

324
497



始



14.6.23

NOTES
ON THE
ACTS OF THE APOSTLES

By Barclay F. Buxton, M. A.
Transcribed by Yutaka Yoneda

使徒行傳講義 全

ビー・エフ・バックストン講述
米田 豊筆記

東京基督教書類會社

324-497



NOTES
ON THE
ACTS OF THE APOSTLES

義講傳行徒使

Barclay F. Buxton, M. A.
Transcribed by Y. Yoneda

述講ントスクツバ
記筆豊 田 米

大正
5. 6. 12
内交

緒 言

一本書は曩に多年我國に定住して、心靈界に大に貢獻せられたるバツクストン師が、一昨々年秋再び來朝せられてより昨年春に至る迄の間、多忙なる巡廻傳道の餘暇々々に、神戸の聖書學校に於て講義せられし、講義の筆記であります。

一二二章の講義は、一昨年の春「昔のペンテコステと今のペンテコステ」といふ題にて出版せられたのですが、文章を處々少々訂正して置きました。

一此講義筆記は全體、毎回同師の校閲を経たので、其際少々添削し、又綱目を區分せられたのです。

一文體は成べく同師の口吻を保ちたい爲めと、同師が成べく平易なる文體を好まるゝ爲め、迂遠のやうてはありますが、今迄發行せられし同師の凡ての講演筆記の如く、是も亦口語體に致しました。同師の口より御聽きなされるやうな心で、御讀みなされるやうに望みます。

一各節或は各項目の講義の始に、唯何節とだけ記して置いたのは、講義の際は同師が其節を讀まれたのですが、冗長に流るゝを防ぐ爲め、唯節だけを記して文言を略しました。讀者諸兄弟は

大正五年四月

筆記者誌

神戸にて

緒言
 必ず聖書を開いて、其節をお読みなされた後、其講義を御覧になるやうに願ひます。然うてな
 いと、思想の連絡を欠きます。又講義中の引照も、聖句を略したのがありますから、必ず聖書
 を開いて御覧になるやうに願ひます。
 一同師の講義が、世間在來の註釋類とは其趣を全く異にし、心靈的にして獨特の能力と趣味の
 ある事は、英國に於ても我國に於ても、多くの人の知る所てあります。此講義も深き祈禱の中
 に準備せられたものでありますから、若し讀者諸兄弟が、祈禱の中に聖靈の光を求めつゝ御讀
 みになりますれば、必ず信仰上大なる利益を得らるゝに相違ありません。
 一尚序に、同師の著書にて日本語にて出版せられたものに、前記「昔のペンテコステと今のペン
 テコステ」の外「約翰傳講義」、「利未記講義」、「赤山講話」、「心靈的講演集」、「リバイバルの要
 件」、「路得記靈的講義」、「雅歌靈的講義」、「聖靈のバプテスマ」、「富める所」等があります。

目次

第一章

第一 此書の内容

キリストの働の續き——傳道の手帳——三の大切な事——神の戦争

第二 甦りたる救主と其約束

甦りし主の職務——最も大なる約束——火のバプテスマ——最も高き欲望——聖靈臨み給ふ——最も尊き聖靈の經驗——爆烈彈の能力——證人——證の順序——復活の證人

第三 キリスト昇天し給ふ

詩篇に於けるキリストの昇天——キリストの王たる三の證——再臨に關する天使の證——四の基礎的事實——キリストは我等の祭司の長となり給へり

第四 祈禱會

エルサレムに歸る——祈禱は最も肝要也——祈り、聖書を読み、歌ひつゝ——使徒行傳に於ける祈禱——神を待望める十日間——缺陷を補ふ

目次

第二章

第五 聖靈の傾注

使徒行傳に於ける聖靈の傾注の四の記事——七の例——戴冠式の賜物

四五

第六 ペンテコステの節

舊約に於ける三大節……麥粉のパンの譬——節筵の特質——徹夜の祈禱

四九

第七 聖靈臨り給ふ

一致和合より起る祝福——俄に——祈禱答へられ、約束成遂げらる——神の氣息——音——火——聖靈の盈満——フレツチャ一の經驗

五四

第八 萬國傳道

諸國の人の救——バベルの塔とペンテコステ——神の大なる御業

六六

第九 町の震動

天の葡萄酒——シナイ山とペンテコステ

七〇

第十 聖書に循ふ説明

七四

新しき能力——傾注の結果

第十一 キリストの御榮光

ペテロの三の説教の題——神の御子——神の聖前の全き者——他の人に由りて聖靈を受く——悟開ける——人間の考と神の考

七六

第十二 危険より救に至る

危険を自覺す——第二の集會——限られざる約束——七の結果——一族——三の新しき特質

八三

第三章

第十三 跛者の癒

聖潔の力——全國民の召——悔改の結果——祈禱の時——イエスの名——ペテロとヨハネ——神の賤しき器——肉に属ける信者の表號——癒されし跛の五の精神——働——人の七の精神

九〇

第十四 跛者に就てのペテロの説教

機會を捕へる傳道者——ペテロの説教の綱領——證人——キリストの四の名——恐ろしき訴——不信仰と信仰——愛の勤——新しき紀元

一〇一

第四章

第十五 猶太人の宗教會議……………二一〇

凡の場合に於ける平和——議會の答——消されざる火——大人物の前に於ける賤しき田舎者——福轉じて福となる——不信仰の誓——説教の題目と證人——頑固なるサンヒドリム

第十六 震動ける祈禱會……………二一八

迫害の四の幸福なる結果——信者の會の空氣——造主なる神の力——戰爭に於ける大膽——震動かし給ふ神の能力——人の心を動かす三の方法——燃立つ燐の如き愛——ペンテコステの祈禱會の順席——神の道

第五章

第十七 アナニヤの死……………二二六

内部の敵——聖靈の燃立つ火——教會の中に宿り給ふ聖靈——眞似の献身——サタンの眞似——聖靈の審判の美しき結果——聖靈の審判を求めよ

第十八 祭司と使徒との戰……………二三四

教會の打撃——天使の勸——權威者の無能力——エルサレムのリバイバルの秘密——ペテロ事實を認はす——最もよき事——普通の方法によれる助——苦よりの喜悅——日々

第六章

第十九 教會の組織及び發達……………二四五

組織や方法に就て靈の導を求めよ——サタンの妨害——最も大切なる奉仕——祈禱の大切なる事——神の勸を務むべき人——愛の勝利——三の聖靈の盈滿

第二十 ステパノの殉教……………二五三

ステパノの變貌——聖靈に滿されたる教會の七の結果

第七章

ステパノの説教……頑固なる心——ペンテコステ的の死

第八章

第二十一 サマリヤのリバイバル……………二六四

福音傳道の苗代——菓籬の教育……惡魔の傳道者としてのサウロの種播——福音の擴張と其力——惡魔の陣營に進撃す——天より火を下す使者——聖靈を求めても得ざる者

第二十二 神の計畫の擴張……………二七五

悔改の三の例——成功ある傳道者の警戒すべき事——エテオピア人なる熱心なる求道者——罪人の救の爲に働く四の者——個人傳道者の精神

第九章

第二十三 新しき使徒召さる……………一八五

迫害者中よりの召——神は或は迫害を許し或は之を妨げ給ふ——「怒ち」の働——光と聲——サウロの悟れる事——サウロの悔改——三日間の暗黒——個人傳道者に對する嚮導と奨励——大膽なる證——サウロ洗禮を受けて聖徒の群に入り又證す——新約のサウロと舊約のサウル——個人傳道者の六の心得——信じ易き心——「憚らず」——迫害の中に於ける導——教會の眞の繁昌——信仰の命令と其結果のリバイバル——更に廣き働の爲にペテロを備へ給ふ——四種の人

第十章

第二十四 ペテロ羅馬人に救を宣傳ふ……………二二四

歴史の危機——三大洲の人の悔改——コルネリヲの人物——神の導と準備——祈禱の力と新しき光——神の攝理——神の言を受入るゝ態度——傳道者の信者に對する態度——會衆の精神——神よりの言——キリストの死と甦——純粹の福音の要點——聖靈ペテロを排除し給ふ——一の經驗を言表す三の用語——「凡の者に」——水のバプテスマ

第十一章

第二十五 エルサレムの批評……………二二六

放蕩息子の兄の精神——ペテロの經驗談——繰返されたるペンテコステ

第二十六 福音の擴張……………二二九

平信徒の傳道——バルナバの喜——バルナバ友を求む——キリストアン——神の恩恵の證據

第十二章

第二十七 ヘロデ王との合戦……………二四七

兩軍の實力——祈禱の三ヶ條——神の御手に在りての平安——天使の働と導——救はれたり、然れど救し——祈禱會の勝利——此話の靈的意味——ヘロデの死——神の勝利

第十三章

第二十八 外國傳道の始……………二六二

外國傳道者の派遣——惠まれし教會の七の特質——神は犠牲を求め給ふ——働人を派遣する者——島の傳道——サタンに遇ふ——審判の言——万伯救はる——サウロの改名——ヨハネの分離——猶太人に對する神の恩恵——パウロの説教——恩恵と審判——説教後の個人傳道——アンテオケに於ける迫害——迫害の時受くる恩恵

第十四章

第二十九 續ける大戦争……………二九二

成功と迫害——跋扈さる——パウロ祭られんとす——パウロの説教——石にて撃たる——第一傳道旅行の終

第十五章

第三十 大なる決議……………三〇八

純粹なる福音に反対す——エルサレムの會議——ペテロの證——パウロとバルナバの證——神のプログラム——教會に送れる書

第三十一 パウロの第二傳道旅行……………三三三

パウロの重荷

第十六章

見よテモテ——神の案外なる導——助を求むる叫

第三十二 歐羅巴傳道の初……………三五一

婦人の小祈禱會——悔改の第一の例——悔改の第二例——吼ゆる獅子の妨害と榮ある勝利の初——迫害の時の感化——獄の奥の美ばしき祈禱會——祈禱の答なる地震——悔改の第三の例——パウロ獄より釋さる

第十七章

第三十三 希臘に於ける舊約の宣傳……………三五二

テサロニケに於ける聖靈の働——其地に於ける惡魔の働——強き信仰の基礎

第三十四 アテンスに於けるパウロ……………三五九

アテンスに於ける彼の心痛——アテンスに於ける彼の傳道——アレオ山に於ける説教——神の命令——説教の結果

第十八章

第三十五 コリントに於ける反對と成功……………三七一

労働者としてのパウロ——コリントに於ける傳道——主の奨勵——主の保護——歸り途

第三十六 第三傳道旅行……………三八三

ブリスキラとアクラ、アポロを導く

第十九章

十二人の信者聖靈に満さる——聖靈の降臨の五の例——リバイバル起る——似而非なる働人——贖者の曝露されし爲め起りし四の結果——パウロの大決心——惡魔のリバイバル

第二十章

第三十七 マケドニヤよりエルサレム迄……………四〇一

其旅行——傳道者としてのパウロ——宣傳ふべき事柄——二の慎むべき事——エベソの長老等に告別の終の言——愛せられたるパウロ

目次

自第二十一章至第二十六章
第三十九 パウロ囚人として審判を受く……………四〇九

自第二十七章至第二十八章十節
第三十九 破船と其結果……………四二六

第二十八章十一節以下
第四十 ロマに着く……………四二九

目次終

使徒行傳講義

ビー・エフ・バックストーン講述
米田 豊 筆記



第一章 此書の内容

キリストの働の續き

第一章

此書は使徒行傳と申します。即ち使徒等の行といふ意味であります。然れども他の點から申し申すれば、是は天に昇り給ひました主の行とも謂ふべき書であります。

【一節】

然てすから此書で、主イエスの行と教の續きを知る事が出来ます。主イエスが續いて何を行ひ給ひましたか、又何を教へ給ひましたかを知ります。路加傳廿四章五十、五十一節を見ますれば斯うあります。『イエス彼等を導きベタニヤに至り手を舉げて彼等を祝す、祝する時彼等を離れ天

第一 此書の内容 キリストの働の續き

に擧げられたり。』是は終てありましたか。路加傳を見れば、昇天は主イエスの行と教の終てあると思はれるかも知れませんが、使徒行傳を見れば、其は終てなく、却て主の行と教の始てありました。新しき始てありました。キリストの昇天は日没ではなく、日の出であります。是は幸福であります。主が此世を去り給ひました事は、悲しむべき事のやうに思はれますけれども、使徒行傳を見ますれば、其は悲しむべき事ではありません。却て新しき日の始てありますから、喜ぶべき事でありました。主は其時から新しく行ひ、又新しく教へ給ひました事を見ます。さうですから使徒行傳は、天に昇り給ひました主の行と謂つても宜しういふます。

其に就て今一寸引照を御覽なさい。二章卅三節を見ますれば、ペンテコステの恵が與へられたのは、主の働でありました。四章十節を見ますれば、此跋者の癒されたのは、主イエスの働である、ペテロが申して居ります。是は主イエスの行ひ給ふた奇跡でありました。七章五十五節を見ますと、ステパノは眞正に聖靈に満されて永眠しました。ステパノが大なる迫害に遇ひました時、主は其を天より眺め、又終に彼を天に受入れ給ひました事を見ます。主は其様な忠實な僕を歓迎する爲に待つて居給ひました。其爲にステパノはペンテコステの永眠が出来ました。又九章六節にあるサウロの悔改は、主イエスの御働でありました。主の奇跡でありました。尙續いて使徒行傳を見ますれば、其様に是は主イエス御自身の働、又御自身の教を記したものである

ことが解ります。

傳道の手帳

又使徒行傳はどういふ書であるかと申しますれば、是は傳道の手帳であります。即ち大切な要點を教へる小い書であります。私共が主の爲に働きたういふ事ならば、外の人を救ひたういふ事ならば、又神の國を擴めたるういふ事ならば、是非祈禱を以て此書を調べねばなりません。使徒行傳で、神は三十年間に何を爲し給ひましたか、解ります。其三十年間の一時代に、神の國は能力を以て擴められました。福音は國々に入り、又勝利を得ました。三十年間に、主イエスは靈に由て大勢の罪人を救ひ給ひました。其を考へまして、主は今日も同じ能力を以て居給ひますから、今日も同じ事を行ひ給ふ事が出来るといふ事を知りたういふ事。今でも三十年の間に、其様な廣い働、廣い事業を成就給ふ事が出来ます。私共が聖靈に満されて居る者でありますれば、又主イエスの御指圖に従順に従ふ者でありますれば、主は私共の生涯の中に其様に働き給ふ事が出来ます。然れども私共に不信仰がありますならば、又幾分か己の爲に生涯を送つてゐますならば、必ず主の働を限りますから、主は其程に働き給ふ事が出来ません。

三の大切な事

使徒行傳三の大切な事を見ます。其は何であるかと申せば

神の靈
神の言
神の人

此三であります。私共は傳道の爲に、此三の事が一番大切であります。即ち神の靈に満される事。神の聖言を知り、又能力を以て其を話す事。又全く神の人となる事です。是は餘程大切であります。或人は靈を得ましたけれども、未だ真正に神の聖言を受入れませんから、罪人に對して神の救の道を説明しません。其爲に人を救ふ事が出来ません。又或人は聖靈を幾分か得ましたけれども、其品性に未だ缺點がありまして、真正に神の人ではありません。自分の家で種々の缺點が表はれて参ります。働に出る時には祈り、又能力を以て説教する事が出来るかも知れませんが、自分の家で、又此世に屬ける用事を致します時に、未だ一全き神の人ではありません。どうぞ兄弟姉妹よ、此三の事に御氣をつけなさい。

神の戦争

使徒行傳を讀みますれば、大なる戦争の歴史を見ます。此處で神の軍隊と此世の盛んな軍隊とが戦つて居ります。傳道する事は眞正の戦争です。傳道とは香氣な働ではありません、生命を賭けて一生懸命に戦ふ事です。使徒行傳其が解ります。

其點から見ますと、使徒行傳は舊約の約書亞記と比べる事が出来ます。約書亞記を見ますと、一章二章三章に於て、イスラエル人は神が約束し給ふた、乳と蜜の流る、地を待望しました。又四章に於て其處に入りました。使徒行傳に於て同じ事を見ます。一章に於て弟子等は、聖靈と聖靈の恵を待望み、二章に於て其を受入れる事が出来ました。即ち乳と蜜の流る、地に入る事が出来ました。又約書亞記五章を見れば、直にエリコといふ城を落さなければなりません。其様な六かしい處が直にありました。使徒行傳五章に同じ事があります。ペテロとヨハネが祭司の長の前に訴へられまして、或は刑罰に遇ひ、又は死罪にせられるかも知れぬやうな場合になりました。然れども神はイスラエル人に勝利を與へ給ひましたやうに、弟子等にも勝利を與へ給ひました。又約書亞記七章一節を見ますと、アカンの大なる罪があります。其爲にイスラエル人は敗北しました。使徒行傳五章に同じ事を見ます。即ちアナニアとサツピラの、大なる罪があります。

然れども聖靈の御助によつて、却て其時に大なる勝利を得ました。續いて約書亞記を讀みますれば、其時から段々與へられた土地を得ました。段々勝利を得て進んで参りました。使徒行傳六章から見ますと同じ事で、段々勝利を得て進んで参りました。即ち人々が救はれ、弟子等が他の國々に進撃しました。使徒行傳は新約の約書亞記であります。

又使徒行傳と以弗所書と比べて御覽なさい。此二の書は大概同じ事を教へると思ひます。以弗所一章二章三章を見ますれば、信者は神の光を得、又心の中に主イエス・キリストを宿す事が出来る事を見ます。丁度使徒行傳一、二章と同じ事であります。其から以弗所四章で、信者は如何して、日常の生涯に於ける小さい事に於て、聖き生涯を暮す事が出来るかを見ます。使徒行傳二章の終の部分で、同じ事を見ます。又以弗所六章に、基督信者は如何して戦ふかについて書いてあります。使徒行傳三章に同じ事があります。使徒行傳では私共が戦はねばならぬ靈的戦争を、地上の方面から見ますが、以弗所書では天の方面から其を見ます。さうですら使徒行傳で、人間の頑固な心、迫害、苦難等の話を見ます。以弗所書で私共の靈の敵、則ち罪人の心を盲すサタンの方を見ます。又私共の靈的の武器を知る事が出来ます。然うですら私共は以弗所書の意味を辨へて、使徒行傳を讀みますれば、使徒行傳の深い意味が解ります。

第二 甦りたる救主と其約束

甦りし主の職務

【一、三節】

使徒行傳一章二節から見ますれば、主イエスが甦りの四十日間に三の事をなし給ひました。

第一は二節『聖靈に託て命じ』即ち命令を與へ給ひました。主イエスは弟子等に唯勸め、或は唯其考のみを與へ給ひませんでした。命令を與へ給ひました。主イエスは弟子等の主でありましたから、彼等は其命令に従はねばなりません。私共の主も同じ主であります。私共に指圖を與へ給ふ主であります。さうですら私共は其に従ひましても、従ひましても構はぬといふものではないです。必ず従順に従はねばなりません。

主は何に就て命じ給ふたかと申せば、四節の終に『我に聞る所の父の約束し給ひし事を待つべし』。是は第一の命令であります。祈禱を以て聖靈を待望む事、聖靈に満さるゝ事、是が第一の命令でありました。教會の組織に就ても何命令がありません。又傳道の方法に就ても命令がありません。然れども聖靈を待望めよとの、固い命令がありました。弟子等は最早幾分か傳道した者

あります。又其手を病人に按いて、病人が癒された事もあります。此點に就て經驗がありましたから、又大分新しい光を得ましたから、格別に主の甦りから大なる光を得ましたから、多分走つて出歩いて、傳道したかつたてせう。走つて他の人に永生を與へたく思ふたかも知れません。然れども主は「爾曹エルサレムを離れずして我に聞る所の父の約束し給ひし事を待つべし」と命じ給ひました。他の人に安慰を與へる代りに、汝自身恵を受けよ。配與ふる代りに先づ受けよ、といふ事でありました。是は主の第一の命令でありました。

第二の命令は福音を宣傳ふる事でありました。馬太傳廿八章十九節廿節を見ますれば「是故に爾曹ゆきて萬國の民にバプテスマを施し、之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とし、且わが凡て爾曹に命ぜし言を守れと彼等に教へよ」。是は私共に對する主の命令でありました。傳道は主イエスの命令であります。私共は唯便利のよい時に、或は唯迫害のない時にだけ、其を致しますれば、其は真正に主の命令に従ふ事ではありません。真正の服従は何時でも、どんなに不便利でありましても、又どんな犠牲を拂はねばなりません、福音を宣傳ふる事でありました。

第二に主イエスは、御自分が活ける者である事を示し給ひました。「夫イエスは苦難を受けし後多くの確據なる證を以て己の活たることを現し……(三節)」。是は實に大切なる事でありました。何故なれば甦りは福音の基礎、確固なる基礎であるからであります。さうですから甦りを確かめる事

は、何よりも大切であります。主が苦難を受け給ひました後に、甦り給ひました事は、私共の救又聖潔き事の基礎です。又是は私共の宣傳へる福音の一番大切なる基礎であります。さうですから主は多くの確據なる證を以て、弟子等に其を示し給ひました。馬可傳十六章を見ますれば、弟子等に取つても、其は信じ難い事で、始には彼等も其を信じませんでした。さうですから主イエスは、多くの確據なる證を以て、明白に其を示し給ひました。主は唯今も同じ主でありますから、私共にも甦りを確かめさせやうとなし給ひます。未だ其基礎が据つて居ませんならば、どうぞ祈禱を以て主に近づき、主が確據なる證を以て、卿に其を示し給ふやうに祈りなさい。其基礎が卿の心の中に堅く据つて居ないならば、卿は潔き生涯を暮らす事が出来ません。又必ず傳道する事も出来ません。

第三に其時に主は何をなし給ふたかと申しますれば、三節の終に「神の國の事に就て語り、種々の事を教へ給ひました。格別に舊約全書の事を教へ給ひました。路加傳廿四章の四十四、四十五節又卅二節を見ますれば、主は其時舊約全書の大切なる事を教へ給ひました。又舊約全書の始より終までが、私共の受くべき靈の糧であること、又其に由りて私共が主イエスを識り、又主イエスの恵を受けらるゝ事を教へ給ひました。其時に最早主イエスは甦りて、靈の體を有つて居給ひました。最早全く天に屬ける者となつて居給ひました。而して其時弟子等の手に、舊約全書を

與へ給ひました。是は大なる賜物であります。弟子等は之を新しく悟る事が出来ましたから、舊約全書は彼等の爲に全く新しき書となりました。廻の主は卿等にも新しい聖書を與へ給ひたうムいます。どうぞ謙つて、其通りに、廻の教主から聖書を受入れなさい。是が第一に教へ給ふた事てあります。

第二は御自分の事を教へ給ひました。馬太傳廿八章十八節「イエス進みて彼等に語りいひけるは天のうち地の上の凡の權を我に賜はれり。御自分が能力ある教主、勝利を得給ふた教主である事を教へ給ひました。言葉ばかりでなく、又種々の行を以て、其を弟子等に示し給ひました。此主は私共にも同じ事を教へ給ひます。私共も靈の眼を開いて、活ける主イエスを見ますれば、其に由りて能力ある生涯を送る事が出来ます。又廻に属ける生涯を暮す事が出来ます。又此世に於て勝利を得る生涯を暮す事が出来ます。

最も大なる約束

【四、五節】

主は格別に此命令を與へ給ひました。「父の約束し給ひし事を待つべし」。舊約全書に父の種々な約束があります。何百何千の約束があります。然れども主は此處に或約束を撰んで、是は格別に

に父の約束であると曰給ひました。何故なれば聖書を與へられるといふ事は、父の至大なる約束であるからであります。其のみならず、其約束の中に他の約束も皆入つて居ります。例へば父は私共にも、平安を與へるとの約束を爲し給ひました。又勝利を與へるとの約束をも爲し給ひました。けれども聖霊を受けますれば、平安も勝利も、豊かに經驗する事が出来ます。聖霊の約束は舊約全書の中に、度々明らかに見えます。賽四四〇三、六十一〇一、結卅六〇廿七、四十七〇一―十、耳二〇廿八等に此約束は明白に記してあります。靈の眼を開いて其を見ますならば、是は舊約の一番大切な約束であると解ります。然れども其ばかりではありません。此四節に「我に聞ける所の……」とあります。即ち主が格別に此約束を指して、説明し給ひました。格別に約翰傳十四、十五、十六章の三章に於て、其約束を新しく弟子等に與へ給ひました。廻り給ふた主が、私共にも其舊約の約束を指し給ひまして、私共にも其を新しく與へ給ひたうムいます。五節を見ると、此約束の聖霊を受ける事は、卿の爲にバプテスマであるといふ事です。卿の爲にバプテスマであるといふのは、卿の全生涯の轉機となること云ふ事であり、静に愛に由りて導かれ、又教へられるといふ事ではありません。卿の生涯に際立つた大變化の起る事であり、バプテスマには深い意味がありまして、是は死ぬる事と廻る事とあります。さうですから卿が聖霊を受けますならば、其は死ぬる如き恵、又廻る如き恵であります。其様に生涯の大

最も大なる約束

なる變化となる筈であります。父の約束を得ますれば、續いて以前と同じ人ではありません。新しい人となり、舊き人がなくなり、甦りに属する人となります。其に由つて新しい生涯を始めます。以弗所書を見ますと、天の處に坐すところありますが、聖靈を受けますれば其天の處に入る事が出来ます。さうですから他の人々を見ます時に、天國の立場から其を見ます。或は自分の事を見るにも、天國の立場から其を眺め、又判断致します。何故なれば聖靈のバプテスマを得ました者は、最早死んだ者、又最早甦つた者であるからであります。是は實に大なる約束であります。聖靈の約束は舊約全書の中で、一番大切な約束であるやうに、新約全書の中でも、一番大切な約束であります。其爲に新約の中に、此約束が六度書いてあります。四福音書の各書に一つ宛、又使徒行傳に二度記してあります。聖靈が私共に六度繰返して、此約束を與へ給ひますのは、丁度父親が其子供に大切な事を教へるのに、度々同じ事を繰返して、其を教へると同じてあります。此弟子等は其約束を受け入れ、其約束通りに恵を受けましたやうに、私共も其約束を待望して求めたういいます。其爲に俯伏して祈り求むべき筈であります。

火のバプテスマ

此弟子等は必ず「火を以て」といふ言を、覚えてゐたに相違ありません。ヨハネが此言を申しましてから、其を覚えて、其恵を待望しました。約翰傳一章に其話が書いてあります。(約翰傳一章卅三—卅七節を御覽なさい)。此二人は其時、火のバプテスマを求めたと思ひます。其晩イエスと共に宿り、イエスの聖顔を見、その聖言を聞く事が出来ましたが、火のバプテスマを得ませんでした。其時からイエスに伴ひ、イエスの不思議なる聖業を見、イエスの恵の聖言を聞きました。然れどもまだ火のバプテスマを得ません。漸く三年の後、イエスは別の訓慰師の事を教へ給ひました。聖靈が來り給ふやうに、約束し給ひました。又甦り給ひました後、氣を嘘いて「聖靈を受けよ」と曰給ひました。其時にも必ず幾分か恵を得ました。然れどもまだ火のバプテスマを得ませんでした。然れ共此時にイエスは「久しからずして」聖靈を受ける事が出来ると曰給ひました。さうですから必ず彼等の心の中に、大なる望が起つたと思ひます。此「久しからずして」といふ言を聞きました時、此言がどんなに弟子等の心を勵まし、振起しましたらうか。心の底迄刺し透すやうに感じた事とせう。活ける主が私共にも同じ事を曰給ひます。今其御足下に坐して居る私共にも、「久しからずして」聖靈によりバプテスマを受くべければ也」と曰給ひます。どうぞ私共も其聖言を聞き、心の中に信仰と望を起し、熱心に其を求めたういいます。火を以てバプテスマを受ける！此弟子等は此言を聞いて、舊約全書の種々の處を思出したに相

違ありませぬ。必ず創世記十五章十七節に於て、アブラハムが其様な火のバプテスマを得た事を覺えましたらう。アブラハムは其時に身も魂も獻げて、神に犠牲を獻げました。アブラハムは其犠牲の側に坐して、神の恵を待望しました。十二時間待つて、漸く十七節の経験をえました。神の火を得ましたのです。又其に由つて、神がアブラハムと契約を立て給ふた事を知りました。アブラハムは格別に神の屬となりました。

又弟子等は必ずモーセの火のバプテスマを覺えましたと思ひます。出埃及記三章二節で、モーセは燃ゆる棘を見ました。其燃ゆる棘の側で、神はモーセに火のバプテスマを與へ給ひました。又此弟子等は幕屋が火のバプテスマを得ましたことを覺えて居つたに相違ありません（出埃及記四十章三十節）。其時にモーセは神の誠に従ひ、幕屋を建てました。又其を神に聖別しました。其時に神は榮光を以て下り給ひました。弟子等は其を覺えて、其様に自分の體を獻げますれば、神は同じ様に榮光を以て下り給ひまして、火のバプテスマを與へ給ふと信じたこと、思ひます。

此弟子等は又、イザヤが火のバプテスマを得ましたことを覺えましたてせう（以賽亞書六章六節）。イザヤは其時潔められ、其時エホバを見て、エホバの使命を成就しました。弟子等はこんな火のバプテスマを待望しました。舊約全書を有つてゐましたから、必ず火のバプテスマの意味を知つて居つたと思ひます。其意味と申しますのは、神の能力と、神の御臨在の新しい顯現です。

弟子等は火のバプテスマを待望みて、必ず其通りに神の能力と、神の御臨在とを新しく經驗する事であると解りましたらう。

併し是と一緒に他の豫言が成就せられると思ひました。六節「集れる者彼に問ひけるは主よ爾いま國をイスラエルに還さんと爲るか」。是は理に合ふ質問でありました。時期が來ますれば、神は必ずイスラエルに國を還すやうに、約束し給ひましたから、イスラエル人は其を待望すべき筈でありました。然れども唯今其は大切なる問題ではありませぬ。是は神の大なる約束ではありませぬ。其よりも未だ大なる約束がありました。即ち聖靈を受ける事の約束であります。イスラエルが國を受ける事は、大なる望てありましたが、唯今其より尙々大切なる、大なる望がありました。神がイスラエルに國を還し給ひますならば、イスラエル人は榮光を受けます。然れども唯今此弟子等の爲に、尙々輝く處の榮光があります。其榮光は何であるかと申せば、主の十字架を負ひ、主の爲に戦ひ、靈魂を得る事、又神の聖國を獲る事、勝利を得る兵卒となる事です。私共は聖書に由りて、未來の榮の望を有つてゐますが、其ばかりを喜びますならば、割合に低い考です。却て今主イエスの爲に苦難を忍び、眞正に戦に出る事は、信者の眞正の榮です。十字架を負ふ事は、信者の慾望であります。どうぞ私共聖靈のバプテスマを求めますならば、低い考を有たず、高い考と望を以て、其を求めたらういふ事。即ち聖靈の能力に由つて十字架を負

第二 廻りたる救主と其約束
一六
ひ、迫害を耐忍び、罪人を導くことが出来る事を、俟望まなければなりません。

最も高き慾望

【六、七節】

申命記廿九章廿九節に斯う記されてあります。「隠微たる事は我等の神エホバに属する者なり、また顯露されたる事は我等と我等の子孫に属し、我等をして此法律の諸の言を行はしむる者也」。神は或事を隠し、又或事を顯はし給ひました。其顯はし給ひました事の中に、聖靈のバプテスマの事があります。私共は隠れたる事を求めませずして、神の默示し給ひました約束のものを受けて、神の凡ての言を行ふ者となりたう願ひます。

『父の其權にて定め給へる時また期は爾曹が知るべき所に非ず然れども聖靈なんぢらに臨むに因て』。五節に於て此經驗をバプテスマと申しましたが、此處では少し言を換へて『聖靈なんぢらに望む』と願ひます。又二章四節には『聖靈に満さる』とあります。此三の事は一々眞實です。又一々大切です。此經驗は一つの人間の言で、説明する事が出来ませんから、此三の言が與へられました。さうですから注意して此三の言を御調べなさい。バプテスマの意味は眞正の死です。望むといふことは、上よりの能力と武具を頂くことです。満されるといふ事は、神の完全圓滿なる、

溢れる程の恵を受けて、少しの不足もない事でありました。此經驗の中に、此三の意味を含んで居ります。

聖靈臨み給ふ

【八節】

此節に『聖靈なんぢらに臨む』とあります、今迄舊約全書の時代に、聖靈が時々人間に臨み給ひました。士師記三章十節「エホバの靈オテニエルに臨みたれば」。是は眞正にペンテコステの恵でありました。又其六章卅四節「エホバの靈ギデオンに臨みて」。又十一章廿九節、十四章十六節、十五章十四節を御覽なさい。此引照を見ますれば、聖靈が臨み給ふ事によりて、何時でも能力と勝利を與へ給ひます。

又士師記の時代は、丁度使徒行傳の時代や、又今の時代と同様でありました。即ち神の民は神を遠ざかつて参りましたから、神に歸す爲に、神が斯様に聖靈を與へ給ひました。然れども其時代の或人々が、其様な經驗を得ましたのは、唯臨時の經驗でありましたが、今は續いて其經驗を與へ給ひます。此弟子等に聖靈は宿り給ひまして、續いて其衷に止り給ふ經驗を與へ給ひます。是は實に貴い經驗であります。

最も高き慾望 聖靈臨み給ふ

最も貴き聖靈の經驗

約翰傳十四章十七節を見ますと、其處に二の經驗を見ます。「此は即ち眞理の靈なり、世之を接くること能はず蓋は之を見ず且つ知らざるに因る、然れど爾曹は之を識る蓋は彼なんぢらと偕に在り、且つ爾曹の衷に在れば也」。

第一の經驗は「なんぢらと偕に」であります。私共が幾分か聖靈の恵を味ひましたならば、其通りに聖靈は私共と偕に在し給ひます。是は實に幸福な事であります。又其に由つて聖靈御自身を知る事が出来ず。此處に主が曰給ひましたやうに、此世に屬ける人は聖靈を見ません。又識る事が出来ません。然れども「爾曹は之を識る」。是は實に貴い經驗であります。

第二の經驗は「なんぢらの衷に在す」といふ事であります。是は更に貴い經驗であります。靈は衷の人を強め、心の願を治め、又心の王となり給ひまして、又其人の全靈全生全身を深き者となし給ひます。

第三の經驗は尙々貴い經驗であります。「聖靈なんぢらに望む」。是であります。其に由りて天より來る能力を有ち、又天に屬ける武器を着る事が出来ず。さうですから其に由りて私共は、眞正に役に立つ主イエスの兵卒となる事が出来ず。

爆烈彈の能力

私共が第一の經驗を得ましたならば、之を私共は聖靈の感化を得たと申します。第二の經驗を得ましたならば、聖靈を受けたと申します。然れども第三の經驗を得ましたならば、聖靈が私共を占領し給ふたと申します。是は實に大切であります。

聖靈は私共を占領し給ひます。占領し給ふならば、神は御自身の神たる御能力を以て、私共を使ひ給ふ事が出来ず。以賽亞書四十一章十四、十五節を御覽なさい。「またエホバ宣給ふ、なんぢ蟲にひとしきやコブよ、イスラエルの人よ、おそるゝなかれ我なんぢを助けん、なんぢをあがなふものはイスラエルの聖者なり、視よわれ汝を多くの鋭齒ある新しき麥打の器となさん、なんぢ山をうちて細微にし岡を糞糠のごとくにすべし」。蟲にひとしきやコブよ、是は肉に屬ける信者の心を喜ばせる言てはありませぬ。然れども眞正に砕けたる心を有つて居りますならば、此様な言を喜ぶ事が出来ず。神は此蟲のやうな者を取つて、山を打砕く事が出来ず。蟲とは自分何の能力も、何の價値もない者であります。然れども使徒行傳一章八節のやうに、聖靈のハテスマを得ましたから、聖靈が其人を占領し給ひましたから、聖靈は其人を以て山を打砕き給ふ事が出来ず。今の時代の人は、鐵道を作る時に、山を打砕く爲にダイナマイトを用ひます。

最も貴き聖靈の經驗

爆烈彈の能力

此八節の「能力」といふ言の希臘の原語は、ダイナマイトであります。さうですから神は私共各自に、ダイナマイトの能力を與へ給ひたうまひます。言を換へて曰ひますれば、私共をダイナマイトのやうな者となし給ひたうまひます。ダイナマイトの働きは、何であるかと申しますれば、大なる岩を打碎くこととあります。先づ其岩に小さい穴を穿け、其穴の中に、小さいダイナマイトを入れます。而して其に火を點けますれば、其大なる、強い、固い岩が打碎かれます。主は此處で其様な雛形を以て、私共に聖靈の能力と、聖靈のバプテスマは何であるかを説明し給ひます。主は其様に私共を以て、山を打碎きたうまひます。聖靈が臨み給ひますならば、其働人はどんな六かしい働をも恐れませぬ。パウロは頑固な人間の心に向つて、鬼に憑かれたる心に向つて、こんな能力を以て勝利を得ました。天に昇り給ひました主は、私共にもこんな神の能力を與へ給ひたうまひます。

然れどもダイナマイトは、其能力を失ひますれば、何の役にも立ちませぬ。却て捨てられ、人の足に踏まれます。私共も丁度其様に、聖靈の能力を失ひますならば、何の役にも立たぬ者であります。オードラを私共は、爆烈する能力を有つて居りたうまひます。何時でも其能力を以て、生涯を送りたうまひます。唯時々はなく、何時でもダイナマイトのやうに、爆烈する事の出来る能力を有つて居りたうまひます。

證人

其様な能力を以て居りますれば、八節の終に「我が證人となるべし」とあります。是は大なる特権であります。主イエスを此世に現はす事が出来、主イエスの御光を證する事が出来ます。主イエスが此世に現はれて参りますれば、必ず此世に正義と、喜悅と、平和の國が出来ます。主イエスは私共に、此様な果を結ぶ力と、特権を與へ給ひます。何故なれば、私共に主イエスを證する能力を與へ給ふからであります。神は此世の暗黒の中に、主イエスを示す能力を與へ給ひたうまひます。罪人の目の前に、主イエスを現はす能力を與へ給ひたうまひます。主イエスが罪人の目の前に見えて参りますれば、罪人は主の足下に倒れて、絶對的に服従せずには居られなくなります。

「我が證人」或基督信者は道徳を教へます。是は大切な事てありますが、主イエスの證は尙々貴い事です。或人は唯救の道、或は教會の組織を宣傳へます。是も大切の問題であります。然れども主は私共に、其より貴い職務を與へ給ひました。即ち主イエスの證人となる事です。證人は何であるかと申しますれば、自分の見聞した事を宣傳へる者であります。主が私共に御自分を見せ、又御自分の聲を聞かせ給ひますから、私共は其證人となる事が出来ます。聖靈のバプテスマ

に由りて、主イエスと其様な親しい交に入る事が出来ます。主イエスの事を親しく知る事を得ますから、主の證人となる事が出来ます。裁判の時、實際の事を見た子供が、證據立てますならば、其話は判事に取つて、餘程大切であります。他の學者は自分の考へ、又は思想を宣傳へる事が出来ます。然れども實際の事を見た子供の話は、學者の話よりも力があります。主は私共を學者とならしめ給ひたういませぬ。證人とならしめ給ひたういします。其爲に毎日々々、聖靈によりて主イエスを知り、又主イエスと伴ひ行く事が出来ます。

使徒行傳を見ますれば、此時から此弟子等は、其證といふ職務を誇りました(二〇卅二、四十。三〇十五。四〇卅三。五〇卅二。八〇廿五。十〇卅九。四十一、四十二、四十三。十三〇卅一。廿〇廿一、廿四。廿二〇十五、廿。廿三〇十一。廿六〇十六。廿八〇廿三)。弟子等は何時でも、此職務を務めました。

原語を見ますれば、『證人』とは能力ある者といふ意味も見えますが、此語は又殉教者の意味であります。主イエスは私共に證人の職務を與へ給ひますから、殉教者の靈を與へ給ひます。是は幸福であります。是は眞正に兵卒の精神であります。私共は生命を捐て、證をせなければ、眞正の證人ではありませぬ。殉教者の精神を以て参りますれば、どんな迫害があつても構ひませぬ。迫害が起りますれば、ステパノのやうに天の使の顔を以て、其を忍ぶ事が出来ます。又パウロの

やうに喜び、歌を歌ふて其を忍びます。

是は殉教者の靈であります。性來の精神ではありませぬ。私共は皆罪の爲に、性來臆病の者でありますけれども、聖靈のバプテスマを得ますならば、眞正の勇氣と大膽とを得ます。眞正に兵卒らしい心を有つ事が出来ます。さうですら喜んで、生命を捐て、傳道する事が出来ます。弟子等は今迄そんな心がありませんでしたから、十字架の時に、皆主イエスを捨て、逃げました。ペンテコステの後に、殉教の精神が起りました。使徒行傳五章四十一節を御覽なさい。『使徒等はイエスの名の爲に辱を受けるに足る者とせられし事を喜びて議員の前を去り』。是は普通の情てはありませぬ。然れども聖靈に感じて生涯を暮しましたから、こんな恥辱を喜びて受入れました。何故なれば靈の眼が開かれましたから、是は眞正の榮光であると解つたからであります。其通り十字架を負ふ事は、天使の前に眞正の榮光であります。私共も靈の眼が開かれて居りますならば、斯様に迫害の榮光を辨へることが出来ます。私共も斯様に臆病の罪から救はれて、眞正に主イエスの兵卒となりたういします。

證の順序

此順序は大切であります。主イエスの證人は第一に、エルサレムに其證をせなければなりません。

ん。即ち自分の都て、自分の町て、自分の家で、其を始めなければなりません。或人は主イエスを受入れれば、自分の親類や友達を忘れて、遠方に行つて傳道したく思ひます。然れども是はペンテコステの順序ではありません。聖靈に満された證人は、先づ自分の親しき者や友達に證を致します。然れども其處に止りませずして、段々廣く證し、ユダヤ、サマリア、又地の極迄も福音を宣傳へたういふます。心の中に斯様な願ひがありませんなら、未だ聖靈を受けて居ないのであります。聖靈のバプテスマを得ましたならば、幾分か外國の人々の爲にも重荷を負ひます。而して又出来るだけ、自分も地の極まで参りまして、傳道したく思ひます。

エルサレムとは即ち弟子等が失敗した處であります。其處で此弟子等は、主イエスを捨て、逃げた事があります。主は其エルサレムに於て、先づ證せよと命じ給ひます。舊約に於てヨナがニネベに行くやうに命令を受けました時に、其に従ひませずして他處に行きました。然れども悔改めました時に、神は再びニネベに行けよと命じ給ひました。其時ヨナは從順にニネベに参りました。丁度其通り、唯今主は失敗した處に證せよと命じ給ひます。私共も其命令に耳を傾けて從はねばなりません。

使徒行傳を概略に讀みますと、此歴史は左の順序に従つて居ります。一章より七章迄がエルサレムに於ける傳道の記事。八章の一節にユダヤの傳道がありまして、次に八章より十二章の終迄が、サマリアの傳道、十三章から終迄が地の極迄の傳道の記事であります。聖靈は其順序に従つて、弟子等を導き給ひました。

「なんぢら……地の極にまで我が證人となるべし」。主はどんな人等に、此大なる役目を命じ給ひましたか。こんな廣い、大なる働でありますから、必ず其を命ぜられました人々は、多額の金を有ち、或は大なる勢力のあつた人でなければならぬと思はれますけれども、さうでありませんでした。一人も金持はありませず、一人も勢力のある人はありませんでした。又一人も教育の充分あつた人はありませんでした。さうですら其様な大なる働を命ぜられまして、必ず失敗すると思はれました。然れ共主は聖靈の働を待望み給ひましたから、此大なる働を賤しき者等に命じ給ひしても、必ず成功があると知つて居給ひました。此賤しき者等の中にも、活る火が燃立ちますれば、其火は必ず地の極に至る迄燃續きます。オ、私共も同じ事であります。私共が自分の智慧や、自分の力や、又此世に屬ける金錢を以て傳道しやうと思ひますなれば、必ず失敗致します。然れども、私共の心の中に神の活る火がありますならば、其火は必ず能力を以て燃續いて参りますから、其によりて地の極に至る迄天の國を擴める事が出来ます。

九節を見ますと、是は主イエスの終の御言であつた事が解ります。終に遺し給ひし御命令ですから、格別に大切なる御命令であります。どうぞ此八節を讀みまして、是が主イエスの終の御言

第二 聽りたる教主と其約束 第三 キリスト昇天し給ふ 二六
てあることを思ひ、其御命令を大切に受入れ、其に聽従ひたいものと云います。

復活の證人

使徒行傳を概略読みますれば、證人とは皆主イエスの甦りの證人であつた事が解ります。是は神學的に甦りを知ることでありませぬ。實驗的に甦り給ふた主イエスを知ることです。又心の眼が開かれて、信じない人々に甦りの事實を宣傳へ、活けるイエスを示す者となる事でありませぬ。一寸使徒行傳を概略御覽なさい。證人は何時も甦りを宣傳へました。二〇廿四―卅一。三〇―五、廿六。四〇二、十、卅三。五〇卅。十〇四十、四十一。十三〇三、卅七。十七〇三、十八、卅一。廿三〇六。廿四〇十五。廿六〇廿三。
こんな風で何處でも甦りの事を宣傳へた事を見ます。私共も其様に甦りの事實を確信して、活ける主イエスを宣傳へなければなりません。此世にある罪人は活ける教主が必要であります。私共は活ける教主と交りて、活ける教主を宣傳へますれば、必ず人々を導く事が出来ます。

第三 キリスト昇天し給ふ

詩篇に於けるキリストの昇天

【九節】

主イエスは天の聖座に昇り給ひました。その時に詩篇二十四篇の言が成就しました(詩廿四〇七―十迄を見よ)。今迄主イエスは戦に出た兵卒でありましたが、今は最早戦に勝利を得給ひましたから、モ―一度榮光の王となつて天に昇り給ひました。其爲に天の使等も主イエスを歓迎致しました。

此時に又詩篇百十篇が成就しました(詩百十〇一)。主イエスは父なる神の右に坐り給ひて、其位を取り給ひました。此詩篇百十篇を見ますれば、主は其時に一節の如く王となり給ひました。又三節のやうに、其民の爲に續いて軍旅の將として居給ひます。又四節のやうに、祭司の長となり給ひました。私共の爲に神の聖前に禱告の祈禱を獻げて、私共に恩恵を注ぐ祭司の長となり給ひました。其のみならず、五節に於て審判主となり給ひました。罪人を審判かんが爲に位に昇り給ひました。さうですら其時に此詩篇が全く成就せられました。どうぞ此詩篇の教を受け、其を覺えて此使徒行傳の九節を讀みたまふいます。

復活の證人

詩篇に於けるキリストの昇天

又此時に詩篇四十五篇六節七節が成就しました。此時に神は其御子に此言を成就し給ひました。今も其通り、聖座に坐して其御支配を續けて居給ひます。

【十節】

『イエスの昇れる時かれら天を仰ぎ視たりしに』。即ち續いて天に昇り給ふた主を眺めて居ました。是は基督信者の當然の態度であります。七章五十五節に。ステパノも同じやうに、昇天し給ふた救主を眺めました。ステパノは大なる迫害の中に天を仰ぎ、又昇り給ふた主を見る事が出来ました。私共も苦難の時にも幸福の時にも、此様に目を上げて聖座に坐し給ふイエスを見る筈であります。(腓立比書三章廿節廿二節)。さうですから私共も此弟子等と共に、斯様に天を仰いで生涯を送らねばなりません。希伯來書十二第一章一節二節『……イエス即ち信仰の先導となりて之を成全する者を望むべし』 Looking unto Jesus!

キリストの王たる三の證

【九十一節】

此處にも主イエスが王となり給ひました事の三の證を見ます。第一の證は地球がキリストの昇天を許した事に由つて解ります。是は普通の地球の法則と全く反對の事であります。自然法に反

對の事でありましたから、其に由つて主イエスは其法則の王であると解ります。是は第一の證であります。

第二の證は、天が下つて主イエスを受入れた事であります。即ち雲が主イエスを受けました。天の王を受ける爲に天が下つたのであります。是は第二の證であります。

第三の證は、天使の證であります。此十一節を見ますと『何故に天を仰ぎ立てるや……』と天に擧げられし此イエスは爾曹が彼の天に昇るを見たる……』と天、天と天使が申しました。是は天使の證であります。主イエスは天に擧げられ、天に昇り給ひました。雲が是を接けて、弟子等は最早主を見る事が出来ませんでした。然れども天使の證によりて天に昇り給ひました事を知りました。此三の證によりて、主が天の王である事が解ります。地球と天と天使が皆同じ證をして、主イエスが天の王である事を教へました。

再臨に關する天使の證

これは明白な證であります。十一節に於て天使も主イエスの再臨を明白に證しました。舊約全書を読みますれば、主イエスが再び來り給ふことを明白に教へてあります。又主イエスも此世に在し給ひました時、再來ると御自分で明白に仰せ給ひました。今此處で又天より下つた天使の證

キリストの王たる三の證

再臨に關する天使の證

を讀みます。即ち是は第三の證であります。此三つの證は實に強ういいます。今此天使の證で、此イエスが再來り給ふ事が解ります。

原語を見ますれば、「此同じイエスは」とありまして、其「同じ」といふ語が格別に意味が強ふふみます。或人は主の再臨は唯靈的の事許りであると思ひます。雛形のやうな事許りだと思ひます。然れども此同じイエスが來り給ひますから、必ずイエス御自身が、同じ形を以て再來り給ふのであります。又天使の言の中に「其如く」といふ語もあります。是は曖昧でありませぬ。明白であります。黙示録一章七節を讀みますれば、「視よ彼は雲に乘りて來る、衆の目彼を見ん、彼を刺したる者も亦これを見るべし、且つ地の諸族これが爲に哀哭かん」とあります。さうですから同じ様にて再來り給ひます。

四の基礎的事實

此使徒行傳の始の十一節を見ますれば、四の大切な事實を讀みます。

三節に於て主の甦

九節に於て主の昇天

八節に於てペンテコステの靈

十一節に於て主の再臨

此四の大切な事實は傳道の基礎であります。又此事實一つ一つが弟子等を勵し、地の極迄證人となりたい心を起させます。どうぞ私共も此四の事實の深い意味をよく知りまして、走つて出て罪人を救ひたいものていいます。

キリストは我等の祭司の長となり給へり

主イエスは甦り給ひました後に、弟子等に詳しく舊約全書を教へ給ひましたから、必ず弟子等は主の昇天の深い意味が解りましたと思ひます。今主は天に昇つて祭司の長となり給ひました。父なる神と此地上にある人々との間に立つて、父なる神より其人々に恩恵を配與ふる祭司の長となり給ひました。又人間の罪を御自分の重荷となして、神の聖前に其爲に禱告の祈禱を献げ給ひました。

利未記十六章を見ますれば、其事の雛形を見ます。毎年々々大なる贖の日に、祭司の長が流されし血を持つて神の至聖所に入り、其處でイスラエル人の爲に禱告をした事を見ます。利未記十六章十三節十四節を御覽なさい。其至聖所て祭司の長は第一に香を焚きました。其香の烟の雲が神の聖前に昇るのは祈禱の雛形でありました。又十四節に、祭司の長は犠牲の血を神の聖前に

四の基礎的事實 キリストは我等の祭司の長となり給へり

注ぎました。是は神の聖前に、イスラエル人の爲に全き贖の出来た事を示します。主イエスは今私共の爲に神の聖前に出て、私共の爲に祈禱の香を焚き、また貴い犠牲の血潮を示して居給ひます。私共は血潮の効能を知りたいと願ひますなら、又血潮の力に頼りて恵を求めますならば、必ず其を與へられます。何故なれば主は御自分の血潮を神の聖前に示して、私共の爲に祈つて居給ふからであります。其爲に希伯來書七章廿四、廿五節にある事が出来た事です。「然れどイエスは窮なく存つが故に易ることなき祭司の職を有り、是故に彼は己に頼りて神に就る者の爲に懇求さんとて恒に生くれば彼等を全く救ひ得るなり」。此弟子等は必ず其事を知つたに相違ありません。多分此希伯來書七章は主イエスが御自分を教へ給ふた教へでありましたせう。弟子等は其を知りまして、今祈禱に由つて主の恩恵を求めました。

又利未記九章廿三節を見ますれば、主イエスが再来り給ふ事の雛形を見ます。此九章は祭司の長の聖別の記事であります。其時にアロンが最初の祭司の長となりまして、種々の犠牲を獻げて幕屋に入りました。廿二節から廿四節迄を御覽なさい。私共の祭司の長たる主イエスは今神の幕屋に入り給ひました。さうですならば又出て、私共を祝し給ひます。「其如く亦来り」給ふ時は、神の榮光が凡の人に顯はれて來ります。又其を見て凡の人々は、必ず神の聖前に俯伏して神を拜みます。

第四 祈禱會

エルサレムに歸る

弟子等は舊約全書を教へられましたから、必ず心の中に今迄申しましたやうな考を以て、エルサレムに歸つたと思ひます。

【十二節】

エルサレムに歸りました時に、心の中にどんな考、どんな強い感情がありましたか。必ず其の心の眼で續いて主の昇天を眺め、又心の耳に續いて天使の聲を聞いて居たと思ひます。また心の中に、主が天の王となり給ふたと覺えましたに相違ありません。又其心の中に、近い中に聖靈が下り、自分の心の中に神の榮光を受入れるといふ大なる望がありました。そんな強い感を以てエルサレムに歸りました。喜びを以て歸つたに相違ありません。「彼等これを拜して甚く喜び」(路加廿四〇五十二)。心の中に其様な感がありましたから、是は當然の事でありました。其愛する主が天に昇り給ひましたから、再び此目て主を見る事が出来ませんが、悲まず甚く喜びを抱いてエルサレムに歸る事が出来ました。多分路加傳の引照のやうに、第一にエルサレムの神殿に

エルサレムに歸る

入つたと思ひます。「甚く喜びエルサレムに歸り恒に殿に入りて神を頌美また祝謝せり」(同五十二、三節)。度々主に伴つて此殿に参りまして、此處で主の聖聲を聞き、又主と共に神に祈りました。又神を讃め、神を禮拜致しました。さうですら多分第一に此殿に入りまして、神に感謝致しました。

祈禱は最も肝要也

又それから自分の高樓に入つて祈りました。

【十三、十四節】

弟子等はさういふ感を以て祈り始めました。私共も祈らうと思ひますならば、幾分か心の中に同じ感を以て恩寵の座に近づかなければなりません。即ち主は昇天し給ふた主です。主は王の王です。主は又今祭司の長てあります。而して再来り給ひます。又主は必ず聖座より聖靈を注ぎ給ひます。私共が此事を覚えて、こんな感を以て恩寵の座に参りますならば、必ずペンテコステを得ます。さうですら、どうぞ其様な感を以て今祈禱を務めたるういます。

併し何故祈らねばなりませんか。神は最早約束を與へ給ひました。主イエスは「久しからずして聖靈によりバプテスマを受くべければ也」と仰せられましたのに、何故祈らねばならぬてせう

か。祈らずとも宜しくありますまいか。否、神が約束を與へ給ひましたも、其約束の恵を得る爲に、私共は祈らねばなりません、祈らなければ得ません(雅各書四章二節)。ペンテコステを得たと思ひましたも、唯其約束を信用して何も爲すに居りますならば、其を得ません。然れども其約束を信じて祈れば必ず其恵を得ます。

列王紀略上十八章一節に、神はエリヤに此大なる約束を與へ給ひました。「我雨を地の面に降さん」。是は大なる約束でした。エリヤは此約束を得て如何しましたか。唯自分の家に歸つて、雨を待つて居りましたか。否、エリヤは神を知る者でありましたから、第一に其約束の爲に妨害を取除きました。其妨害は何であつたかと申せば、イスラエル人が偶像を拜してゐた事でした。併し卅九節を見ると、其を悔改めました。最早妨害は取除かれましたから、其次けてエリヤは唯神の約束を待望して家に歸りましたか。否、妨害が取除かれましたから、四十二節を見れば、山に登つて熱心に祈りました。神は約束を與へ給ひましたし、又妨害も取除かれましたけれども、エリヤは祈らねばなりませんして。エリヤが此禱告の祈禱をせなければ神は雨を降らせ給ひませんしてたらふ。けれども祈禱の爲に神は其約束を成就し給ひました。

此處は丁度同じことです。弟子等は其六かしい約束を頂戴しましたから、高樓に入つて其恵を受くるまで熱心に祈りました。今迄度々祈りました。けれども今の祈禱は今迄の祈禱と全く違ひ

ます。今迄の祈禱は丁度エルサレムの神殿で、祈る人と神との間に隔の幕が懸つてゐたやうな祈禱でした。けれども今此時の祈禱は至聖所に入つて、面と面とを合せて神を拜するやうな祈禱でした。今迄の祈禱は答へられるかどうか解りません。けれども今此時の祈禱は必ず答へられると確く信ずることが出来ます。何故ならば主イエスの名によりて祈ることが出来るからであります。

以士帖書四章十節又五章一節二節を御覽なさい。今迄の祈禱は丁度外に立つて祈るやうな祈禱でした。面と面とを合せて王に祈る事を許されませんでした。然れども今此時の祈禱は、王の金圭が伸されて恵の座に近づく事を許され、其處で祈る祈禱でありました。必ず喜びを以て祈つたに相違ありません。又必ず確信を以て祈つたに相違ありません。必ず神が其約束を成就し給ふと覺えました。どうぞ兄弟姉妹よ、私共も舊約時代の祈禱を祈りませずして、新約時代の祈禱を祈りたうします。私共は今迄度々不信仰によりて、舊約時代のやうな祈禱を献げましたかも知れませんが、どうぞ今から信仰を以て、私共の祭司の長が最早天の聖座に昇り給ひました事を、靈の眼で見えて祈りたうします。然うしますれば、求むる所の恵を得たと信ずる事が出来ます。王は必ず卿に其金圭を伸して、卿の願に従つて恩恵を與へ給ひます。

祈り、聖書を讀み、歌ひつゝ

「凡て此人々は……心を合せて恒に祈禱を務めたり」。然れ共唯祈禱許りを務めては居なかつたと思ひます、祈禱と一緒に聖書をも讀み、又歌をも歌ひましたせう。聖書を讀む事に由て信仰を強め、又其に由て神を握る事を得ました。歌を歌ふ事に由て神に感謝して其聖前に出る事を得ました。必ず舊約聖書の約束を基礎として固く其に立つて神に祈りましたせう。悪魔は活きて居ますから、其時必ず不信仰を起させやうとしたに相違ありませんが、此弟子等は繰返し「舊約の約束と又主イエスの約束を思ひましたから、不信仰を捨て眞の信仰を以て神に近づく事を得ましたせう。今の時代に於て、多分ジョージ・ムーラーは、他の人々よりも深い祈禱の経験を有つた信者であらうと思ひますが、此人は初めの間は唯何時間でも祈禱許りを續けて務めました。然れ共段々神に教へられて、祈禱と共に聖書をも開き、聖言を讀み乍ら、又其約束を信じ乍ら祈りました。さうですから能力を以て祈る事が出来ました。

此弟子等は又必ず歌をも歌ひましたせう。弟子等の讚美歌は詩篇でありました。必ず詩篇の廿九篇をも歌ひましたせう。神が其聖聲を出し給ふ事を待望しましたから、此詩篇に於て神の聖聲の能力ある事、又其は高ぶれる者を打碎く事の出来る聲であると悟りましたせう。又多分祈り、聖書を讀み、歌ひつゝ

六十三篇をも歌ひましたらう。(一節、五節)之を歌つて、聖靈が來り給ふ事を待望み、飽く事を希望しました。又(八節)こんな言を握つて、身も魂も獻げて主に従ふやうに、尙々堅い決心をしましたてせう。或は又九十五篇をも歌つて、其六節の通りに拜みひれふして、造主なる神の聖前に跪く事を致しました。又マリバの時のやうに、其心を頑にする事なからんやうに務めました。多分又百十篇をも度々歌つて、昇天し給ふた主イエスを仰ぎ見る事を得ました。又此歌に由つて必ず心の中に新しい献身も出來、堅い信仰も出來ましたてせう。

又多分私 共がコラスを歌ひますやうに、度々コラスを繰返して同じ言を歌ひましたてせう。聖書にその事を度々見ます。出埃及記十五章の一節と廿一節とを較べますれば、イスラエル人が勝利を得ました時に、繰返して此コラスを歌ひました。又歴代志略下十五章十三節を見ますと、コラスを歌つた時に神の榮光が下りました。「善いかなエホバその矜憫は世々限りなし」。此コラスは度々イスラエル人に歌はれたコラスでありました。此弟子等は又、惡魔に試みられました時、また心の中に恐が起りました時に、多分詩篇五十六篇の「コラスを繰返して歌ひましたてせう。『われ神によりて其聖言をほめまつらん、われ神に依頼みたれば恐ることあらじ、肉體われに何をなし得んや』(四節)また十節を御覽なさい)。又神の榮光が此世に顯はれることを待望みて、多分五十七篇の「コラスをも歌ひましたてせう。『神よ願はくは自らを天よりも高く

し、みさかえを全地の上に擧げたまへ』(五節)又十節)。また祈禱の精神を以て、六十二篇にあるコラスをも歌ひましたてせう。「わがたましひは黙してたゞ神をまつ、わが救は神よりいづるなり、神こそはわが磐、わがすくひなれ、又わが高き楯にしあれば我いたくは動かされじ」(一、二節)。五、六節も同じコラスであります、段々信仰が堅くなりましたから、二節の言を少し變へて「我は動かされじ」と歌ひました。又度々詩篇百七篇の「コラスをも歌ひました。格別に主が此世に御在世中行し給ひました聖業を覺えて、此の「コラスを歌ひましたてせう(八、十五、廿一、卅一節)。多分其を歌つて、凡ての人に福音が宣傳へられんことを熱心に願つたらうと思ひます。

使徒行傳に於ける祈禱

そんな風で此弟子等は、此高樓に於て十日の間祈禱會を務めました。使徒行傳を見ますれば祈禱の大切なる事が解ります。此書を見ますと、信者が種々の苦を忍んで、主に従つて傳道する事も大切であります、其と同時に靜に祈る事の大切なる事を教へられます。

此問題に就て今概略使徒行傳を御覽なさい。三章一節ペテロとヨハネが祈禱の時神殿に参りました。四章廿四節に「心を合せ神に對ひ聲を揚げて曰けるは」。即ち迫害せられた時種々工

夫をせず、神に向つて祈りました。六章四節「而して我儕は常に祈る事と、道を傳ふる事を務むべし」。憐むべき者を助ける事は必ず大切なる事で、是は信者のなすべき務でありました。然れ共其よりも大切な務は祈禱と道を傳ふる事でありました。八章十五節「此二人の者下りて彼等が聖靈を受けん爲に祈れり」。是は一番大切でありました。此新しく教はれた信者の爲に祈る事、また彼等と共に祈る事は、一番大切な事でありました。十二章五節又十二節に、徹夜の祈禱會を開きました。「教會は之が爲に懇切神に祈る」、「多の人こゝに集りて祈り居たり」。此信者等は祈禱の力を知つて居りました。又力を以て祈りましたから、ペテロはヘロデの手より逃るゝ事を得ました。十四章廿三節「斯て二人のもの教會毎に長老を選び、斷食と祈禱をなし、前より信じをる所の主に之を託ねたり」。此新しい牧師の爲に祈りました。又祈禱の中に彼等をエホバに託ねました。十六章廿五節に此二人が牢屋の中に置かれましても、其祈禱に少しの差支がなかつた事を見ます。身體に苦を覺えましても、其が祈禱に差支ありませんでした。「斯て夜半ごろパウロとシラス祈禱をなし、且神を讚美す」。斷えず、何處でも祈りました。廿章卅六節、「パウロかく語りて跪き衆人と共に祈れり」。又廿一章五節、「我儕出立ちて途につく、彼等その妻孥と共に我儕を送りて邑の外にまで至りしが共に岸に跪きて祈り」。神の聖前に祈禱の中に相別れました。さうですから使徒行傳を見ますれば、祈禱の眞に大切なる事を知ります。

神を待望める十日間

此百廿人は高樓に於て祈禱を務めました。祈禱を務めることは六かしい劔です。六かしい戦であります。凡ての信者が其を願ひません。又其が出来ません。此時に信者五百人が主の昇天を見ました。(其は哥前十五〇六で解ります)。然れ共祈禱を務めました者は、唯其四分の一だけでありました。其残りの三百八十人は、多分自分の家に歸つて、自分の職務を忠實に盡しました。せう。多分罪のない生涯を暮して、忠實に主イエスに従つたと思ひます。然れ共主の御指圖に従つて祈禱を務めませんでした。今信者の中に同じことを見ます。或信者は忠實に主に事へて居ます。然れ共熱心に聖靈のバプテスマを待望みません。どうぞ私共は此三百八十人の中に入りませずに、此百廿人と共に祈禱を務めたいものであります。

此時に十四節のやうに、男も女も祈禱を務めました。神の聖前には男と女の區別がありません。皆心を合せて祈禱を務めました。婦人等が、是は自分等に關係のない務だと思ひませんでした。又男子も、是は婦人の爲には餘り貴い勝れたる務であるなどは思ひませんでした。皆謙り互に相愛し、心を合せて神の聖前に跪きました。

其百廿人の中にマリアも居りました。マリアも其息子の手より火のバプテスマを受け度く願ひ

ました。又主の此世に在し給ふに間は信じなかつたキリストの兄弟等も参りました。或は十字架の爲に、或は難の爲に悔改しましたから、今一番熱心な信者と一緒に祈禱を務めました。主イエスは必ず凡ての信者の爲に祈り給ひました。然れ共必ず格別に其兄弟の爲に祈り給ふと思ひます。又必ず彼等が悔改するやうに、熱心に重荷を負ふて父に願ひ給ひました。

此百二十人が主イエスの仰に従つて、待望む事を始めました。待望むといふ事は、爲易い香氣な事ではありませぬ。母が愛する自分の息子の遠國から歸るのを待望む様に、今心を盡して聖靈の來り給ふ事を待望みました。妻が戦から歸る夫を待望む通りに、今恐れたり信じたりして、聖靈の來り給ふ事を待望みました。多分此祈禱を始めました時には、其日の中に受けると思ひました。然れ共木曜日の夜になりましたが、未だ受けませぬ。其翌日の朝は金曜日でありました。金曜日は主イエスが十字架の上に全き贖を成遂げ給ふた日でありますから、此弟子等は多分此金曜日には受けると思ひましたらう。然れ共晩になりましたも、何にも受けませぬして、日曜日になりました時に、是は難の日であると覺えまして、多分此日こそは受けること、待望みました。然れ共未だ何にも得ませぬ。

神は其間に段々此弟子等の心の中に働き給ふたと思ひます。始めに其心の中に未だ幾分か己を信ずる心、己の力に依頼し精神が残つて居たかも知れませぬ。其が全く取除かれねば聖靈を受けらる事が出来ませぬ。或は又心の中に未だ人を恐れる恐、自分の名譽を大切に思ふ考が残つて居たかも知れませぬ。神は此永い祈禱會の時に近づき給ひまして、其やうなものを潔め給ひました。又また其信仰を試して、純金のやうなものにならしめ給ひました。段々日が絶ちますれば經ちます程、サタンが攻撃したに相違ありません。サタンは種々な疑を起させましたらう。主イエスは「久しからずして」と言給ひましたのに、最早七日も八日も過ぎ去りましたから、主の聖言は眞實ではないではなからうか、と云ふ疑が起りました。然れ共其様なサタンの火箭を防いで、續いて信仰を握つて祈りました。

缺陷を補ふ

【十五節以下】

其時に十五節からのやうにユダの代りに或弟子を選びました。聖靈が下り給ふ時に、十二人が揃つて居る筈であると思ひまして、缺員を満しました。聖靈が來り給ひますならば、戦に出なければなりませんから、格別に危い役目の爲に一人の勇士を選びねばなりません。其爲にどんな人がなければならぬかといふに、廿一節「主イエスの我儕の中に往來し給ひたる間、即ちヨハネのバテスマより始め、我儕を離れて擧げられし日に至るまで常に我儕と偕に在りし者」。是が第一に

缺陷を補ふ

大切でありました。永い間忠實に主に従つた者、永い間主の足下に坐つて教へられた者、また永い間十字架を負ふて主に従つた者である筈であります。又他の弟子等と交際をした者を選ばねばなりません。又主イエスの働の始から、即ち其光を見ました時、直に悔改めた者でなければなりません。或人は其光を見ましても、時を延して其時に悔改めませんでした。そんな人は主イエスの爲に善き勇士となる事が出来ません。主の聖聲を聞きました時に早速悔改めた者が、主の爲に一番よき武者となります。又其次に、其人は、甦の證人となければなりません。自分が主イエスの活ける者なる事を経験した者である筈です。主イエスが眞正に勝を得給ひました事、又主イエスが眞正に神の子である事を悟つた者でなければなりません。此弟子等は其危い職務の爲に、此二人を選びました。

さうです。それから段々此弟子等は、聖靈を受ける爲に仕度をしました。自分の心の中に最早全き献身が出来ました。最早己を依頼む心が無くなりしました。自分の力のない事がよく解りました。眞正に神の聖前に空虚となりましたから、聖靈を受けるのに其仕度が出来ました。どうか兄弟姉妹よ、卿等の心の中にも、其仕度が出来るやうに求めなさい。祈禱の中に聖靈の火を求むる事よりも、却て先づ聖靈を受ける仕度が出来たかどうかを省みなさい。或兄弟は永い間熱心に聖靈を求めましたが、未だ其を得ません。何故なれば未だ神の靈に従つて、心の中に其仕度が出来て居ら

ぬからであります。卿が上等の物を器に入れて置きたらういふ事ならば、先づ第一に其器をよく潔め、其を奇麗にしなければなりません。此一章の終迄に、神は此弟子等にそんな風に奇麗に仕度をなさせ給ひました。終に其仕度が出来ましたから、聖靈が來り給ひました。

第五 聖靈の傾注

使徒行傳に於ける聖靈の傾注の四の記事

第二章

【一節】

使徒行傳で四の聖靈の傾注の事を見ます。第一は此二章で、ユダヤ人の上に聖靈が注がれました。第二は八章で、サマリア人の上に。第三は十章で、ロマ人の上に。第四は十九章で、ギリシヤ人の上に聖靈が注がれました。神は誰の上にも、此大なる恵を賜ひたういふ事。今諸國に於て、神が其人々の上に聖靈を注ぎ給ふとの音信があります。ギリシヤ人のやうに教育のある人の上にも、又ない人々の上にも、ロマ人のやうに文明國の人の上にも、又文明でない人々の上にも、サマリア人の如く幾分か神の光を得、幾分か暗黒の中に彷徨ふて居る人々の上にも、又ユ

第五 聖靈の傾注
四六
ダヤ人の如く今迄神の聖言を有つて有る人々の上にも、聖靈を注ぎ給ひます。神は其様に隔なく、又何處の國の人の上にも聖靈を注ぎ給ひます。

七の例

使徒行傳に信者に聖靈が臨み給ふた記事が七度あります。二章四節。四章三十一節。八章十七節。九章十七節。十章四十四節。十八章廿六節。十九章六節。神は私共に見本として此七の記事を與へ給ひました。或人は祈禱の中に、或人は聖言が宣傳へられて居る中に、又或人は手を按かれし時に聖靈を得ました。神は何時でも唯一の方法を以て聖靈を與へ給ひません。心が空虚でありますならば、又信仰がありませんならば、神は其人に豊かに聖靈を與へ給ひます。此七の聖靈の傾注の記事を読みますと、此人々は各自豊かなる恵を得ました。私共は度々神の約束の唯半分許り、或は十分の一許りを頂戴しますが、此人々は毎度神の御約束の通りに、豊かに聖靈を頂戴しました。其に由つて私共も、信仰と望を勵まされて、丁度其通りに恵を得たいものです。

戴冠式の賜物

主イエスは唯今最早榮を得給ひましたから、聖靈の下る時になりました(約翰七〇卅九)。ペンテ

コステの日に至つて、神は人間に、他の物と比べる事の出来ぬ此賜物を與へ給ひたうムいます。是は他の何物よりも愈れる、遙に勝れたる賜物であります。又其に由つて唯人間に愛を表し給ふのみでなく、其御子にも其に由つて愛を表し給ひました。主イエスの新婦に此賜物を與へる事は、主イエスの服従の褒美でありました。主イエスが父の聖旨に従つて、十字架に上り、御自分の身體で全き贖をなし給ひましたから、今神は其服従に對して、褒美を與へ給ひました。また其のみならず、是は主イエスの勝利の結果でありました。主イエスが十字架の上で大なる勝利を得給ひましたから、其勝利の結果として、又其勝利を榮光あるものとするために、神は唯今聖靈の賜物を與へ給ひました。又是は御自分の愛する御子の禱告の祈禱の答でありました。父なる神は是によりて御子の祈禱を聞き給ふた事を示し給ひました。又是を以て御子の王たる事の飾とならしめ給ひました。御子は王となり、其聖座に登り給ひましたから、其僕等は皆王の僕等の如く飾らなければなりません。其爲に神は此弟子等に幾分か天の榮光を與へ給ひました。又是は御子の王たる恵の見本であります。御子は王となり給ひましたから、どんな心を以て其領分を治め給ひますか、一番初之行が其を示します。凡の人は新しい王の第一の指圖或は第一の行を待つて、其に由つて新しい王の心を知ります。其様に王たる主イエスの恵は、此ペンテコステに於て解ります。又格別には王が地上で恥辱を得て殺され給ひましたから、今其王が恵を張りて其酷い行に

七の例 戴冠式の賜物

對して、此榮光ある賜物を以て報い給ふ事でありました。王は凡の權力を受け給ひましたから、此様な世と此様な罪人を全く滅し給ふ事は當然であります。然れ共却て其罪人に愛の福音を宣傳へんが爲に、今其弟子等に此賜物を與へ給ひました。羅馬書十二章廿節、「爾の仇もし飢ゑるなば之に食はせ、若し渴かば之に飲ませよ、爾如此するは熱炭を彼の首に積むなり」。神は今熱き火を罪人の首に積み給ひます。御自分に對してカルバリ山でヒドイ罪を犯した者の頭の上に、ペンテコステの熱火を積み給ひます。

父なる神は斯ういふ理由の爲に、今御子の戴冠式をペンテコステを以て飾り給ひます。王が自分の戴冠式を盛んにする爲に種々の恵を與へるやうに、父なる神は今御子の戴冠式を盛んにする爲に、此世の中で一番榮光ある賜物を與へ給ひます。どうぞ深く此事を御考へなさい。今ても父なる神は同じ心を有つて居給ひます。神は格別に御を飾る爲や、又卿に榮光を與へる爲でなく、御子に榮光の歸せんが爲に、賤しい僕に此榮光ある賜物を與へ給ひます。又格別に私共の祈禱の爲ではなくして、御子の愛の禱告の爲に此を與へ給ひます。火のバプテスマを得ますれば、是は主イエスが活ける救主である證據であります。又其のみならず、主イエスが卿を愛し、格別に卿の爲に禱告の祈禱を獻げ給ふた事の表面の兆てあります(約翰傳十四章十六節)。

第六 ペンテコステの節

舊約に於ける三大節

猶太人は毎年三の大なる節筵を守りました。其節筵は私共の爲に雛形となりますから、其を知る事は心靈上大切な事であります。出埃及記廿三章十五、十六節に、其三の節筵が記してあります。「汝無酵パンの節禮を守るべし、即ちわが汝に命ぜしごとくアビブの月の定の時において七日の間酔いれぬパンを食ふべし、其はその月に汝エジプトより出たればなり……また穡時の節筵を守るべし、是れ即ち汝が勞苦て田野に播る者の初の實を祝ふなり。又收藏の節筵を守るべし、是れ即ち汝の勞苦によりて成れる者を年の終に田野より收藏する者なり」。是は毎年の三大節でありました。其意味は、無酵節は埃及より救はれし事の感謝會でありました。私共も其通り、何時迄も罪より救はれた事を感謝して喜ぶ筈です。第二の收穫の節は、毎年收穫の感謝會でありました。是は新約全書でペンテコステの節と申します。是は私共が聖靈を得た事を喜ぶ事の節筵です。私共は斷えず聖靈を喜び、神が私共に聖靈の收穫を與へ給ひました事と、豊かなる滋養と力を與へ給ひました事を喜んで、常に其を祝はなければなりません。第三の節筵は收藏の節でした。

其年の凡の働の終りし事の節でありました。是は世の終に、神の聖前に榮光ある節を守る事を指します。私共は唯今何時でも其榮光を待望して、神の聖前に此節を守らねばなりません。

此處に基督信者の喜ぶべき三の原因があります。第一は過去を考へて、神が全き救を興へ給ふた事を喜び、第二は現在の事を考へて、神は凡ての無てならぬ恵を興へ給ふ事を喜び、第三は未來に於て神が安息と榮光を興へ給ふ事を覺えて喜ぶのです。どうぞ心の中で、何時でも斷えず此三の節を守りたういます。

麥粉のパンの譬

ペンテコステの節に於て、其年の始のパンを神に献げました。其年に出來た麥を以て造つた最初のパンであります。(利未記廿三章十五節より十七節)。是は唯麥を其儘に献ぐる事ではありません。麥粉で造つたパンを献ぐる事でありました。使徒行傳二章に於て、初めて教會が神に献げられました。今迄は魂が一つく其儘に神に献げられましたが、今全き教會となり、信者の集會が神に献げられる事を見ます。丁度昔の節筵の通りであります。又其麥粉のパンは凡の人の滋養となる筈です。又神は其麥粉のパンを以て、凡の惡魔の勢力を打毀つ事が出來ます。士師記七章十三、節十四節「ギデオンの其處に至りしに或人その伴侶に夢を語りて居り、即ちいふ我夢を見たり

節筵の特質

しが、夢に大麥のパン一つミデアンの陣中に轉入りて天幕に至り、之をうち仆し覆したれば天幕倒れ臥せり、其伴侶答へていふ、是イスラエルの人ヨアシの子ギデオンの劍に外ならず、神ミデアンとすべての陣營を之が手に付したまふなりと。使徒行傳二章から、神は此小い教會を以て凡の惡魔の陣營を倒し給ふ目的を有つて居給ふ事を見ます。

此節筵の特質を尋ねますれば、申命記十六章一節に、逾越節の事が記してあり、十節に七週の節筵を見ますが、是がペンテコステの節筵であります。又十三節には、結茅節を行ふべしとあります。是は第三の大なる節筵であります。今十節を讀んでペンテコステの節筵の特質を見ませう。

第一は心から物を献げる事です。「汝の神エホバの前に七週の節筵を行ひ、汝の神エホバの汝を祝福し給ふ所にしたがひ、汝の力に應じて其心に願ふ禮物を獻ぐべし」。今ペンテコステを受ける人は、こんな特質を以て神の聖前に出て、其力に應じて心に願ふ祭物を神に献げます。此様な祭物がなければ、正しくペンテコステの節を守る事が出來ません。

第二は十一節にあるやうに、心を合せる事です。「斯して汝と汝の男子女子、僕婢および汝の門

麥粉のパンの譬 節筵の特質

の内に居るレビ人、ならびに汝等の中間に在る賓旅と孤子と寡婦みな共に』さうてすから皆一緒とした。其人の僕等も、今迄知らなかつた旅人も、今迄輕蔑してゐた異邦人も、憐れな孤兒も、皆同じやうに心を合せて神の聖前に出ます。是は今のペンテコステの特質であります。私其の心の中に、他の人を輕蔑したり、或は他の人を怒る感情がありますならば、正しくペンテコステの節筵を守る事が出来ません。

第三に喜悅は此節筵の特質でした。十一節の終に『汝の神エホバの前に樂むべし』。喜悅を以て神の聖前に出なければなりません。喜悅を以て神より惠を受けねばなりません。喜悅を以て其惠を得たと感謝せねばなりません。或兄弟はペンテコステを受けるのに、大なる獻物を献げねばならないと思つて、悲しみ苦んで神の聖前に出ます。赤心を以て参りますが、心の中に苦があります。其人は正しくペンテコステの節を守らないのです。此節の特質は喜悅であります。

第四に此節筵の特質は神の御臨在であります。十一節『汝の神エホバのその名を置かんとて撰び給ふ處にて』。神は其處で御榮光を表はし給ひます、其處で聖聲を放ち給ひます。今のペンテコステにも、神は御自分を表はし給ひます。私共が唯神の眞理を求め、或は唯正しき經驗丈けを求めますならば、それは正しく此節を守る事ではありません。然れ共神御自身を求め、而して神の御臨在し給ふ處に近づきますれば、眞のペンテコステを受けることができます。

第五の特質は過去の事を記憶する事でありませぬ。是は十二節、『汝その昔エジプトに奴隷たりしことを誌え是等の法度を守り行ふべし』。ペンテコステを祝ひますれば、今迄の罪を深く憶えませぬ。今迄の罪の軛を深く感じます。今迄の鈍い心と、頑な心と、不信仰とを深く憶えませぬ。埃及に奴隷たりし事をよく憶え、又其に由つて詩篇百三篇二節のやうに『その凡の恩恵を忘るゝ事なく』、其大なる救、其大能の腕を憶えて救を感謝します。今迄も深く自分の罪を感じました。然れ共ペンテコステの日に於て、尙々深く其を憶えます。今迄よく神の救を悟つて其を喜びました。

然れ共唯今尙々明白に其を得、其を感謝します。又今の立場を知つて、是は唯神の御惠によつて其處に立つ事を得たと感じます。是は悉く惠によれる事でした。ペンテコステを得ますれば、自分の義を全く捨てます。自分の力を全く捨てます。而して唯神の純粹の恵のみを祝ひます。其によりて全く高慢を殺して、眞正の謙遜を得ます。是はペンテコステの節の第五の特質であります。

徹夜の祈禱

昔ペンテコステの節の前日には、其時代の熱心なるユダヤ人は徹夜の祈禱を致しました。又格別に神がシナイ山に於て、律法を與へ給ひました事と、同時に聖書を與へ給ひました事を終夜感謝しました。イスラエル人は埃及より救はれましてから五十日目に、シナイ山の麓に立つて神

の律法を頂戴しました。ユダヤ人は毎年ペンテコステの日に其を憶え、其を祝ひました。多分此弟子等は其當時のユダヤ人に倣つて、其前の晩終夜徹夜の祈禱を致しました。神の聖前に喜んで、神が其聖言を與へ、其聖聲を出し給ひました事を喜び、又シナイ山の時のやうに、神が御自分を表はし、又其聖聲を出し給ふ事を願つたらうと思ひます。そんな風でペンテコステの日が参りました。

第七 聖靈臨り給ふ

一致和合より起る祝福

【一節】
 此處に二の考ふべき事があります。一は神の日即ち神の定め給ふた日が参りました事です。其時迄神の聖徒が其日を遠くから見、其を喜びました。今其日が参りました。希伯來書十一章卅九節に『彼等は皆信仰に由り美名を得たれども約束の所を得ざりき』其聖徒等は神の御手から様々の恩恵を得ましたけれ共、未だ約束のものを得ませんでした。然れども今は猶一層愈れるものを與へらるゝ時が参りました。私共も此幸な時代に生涯を暮して居りますが、どうか希伯來

書四章一節のやうに畏れたらういふ事。『是故に我儕畏るべし、其安息に在る約束は今も尙ほ殘れども、恐らくは亦爾曹のうち之に及ばざるものあらん』。

第二は其時に聖靈を受くる事が出来た事です。最早弟子等は仕度をしました。又神の時が参りました。然てすからペンテコステが参りました。何處でもさうです。神の方に仕度が出来て居ると共に、人間の側にも仕度が出来れば、其爲にペンテコステが與へられます。『弟子等皆心を合せて一處に在りしに』二ヶ月前に同じ室に集りました時、争が起りました。『また彼等の中にて長たる者は誰なるかと互の争ありき』(路廿二〇廿四)。然れども今そんな争は最早ありません。そんな争の種が全くなりませんでした。誰も皆己を卑くし、人を己に愈れりと思ひ、心を合せて神の聖前に跪きました。かういふ一致和合があれば、神は必ず祝福を與へ給ひます。唯二三人許ても其様に心を一にする事が出来れば、馬太傳十八章十八節のやうに、能力ある祈禱を献げる事が出来ます。

又詩篇百三十三篇を見ますれば、そんな親睦のある時に、神は必ず祝福を與へ給ひます。其二節のやうに、最早天に昇り給ふた私共の祭司の長に注がれたる同じ靈を、其衣の裾に跪いて居る人々にも注ぎ給ひます。或はヘルモンのやうな一番高い山に下し給ふた露を、同じやうに其周圍にある小山にも下し給ひます。唯はらから相睦みて居りますならば、此様に御子に與へ給ひま

した恩恵を私共にも注ぎ給ひます。又歴代史略下五章十三、十四節のやうに、私共が心を合せますれば必ず其處に神の榮光が顯はれます。

此心を合せる事は、約翰傳十七章廿一、廿二節の祈禱の答でありました。「此は我儕の一なるが如く彼等も互に一にならん爲なり」(廿二節終)。ペンテコステの日に、此祈禱のやうに皆一つになりましたから、神の榮光を頂戴する事を得ました。私共は聖靈を求めたういいますれば、第一に此一致和合を求めねばなりません。八年前ウエールスにリバイバルのあつた時、格別に此事に氣を付けました。或時集つた者が、一つになりませんでしたから、先づ祈つてく一致和合を願ひました。又先づ其一致和合を妨げる者の悔改を願ひました。例へば相互の間に争がありますれば、又は相赦す精神がありませんならば、先づ其兄弟等の悔改を願ひました。是は正しき順序です。私共一致和合が出来ますれば、必ず能力を以て神に祈る事が出来ます。又必ず聖靈の火が下ります。

俄に

【二節】

『俄に』。是はペンテコステの言であります。聖書から聖靈の傾注の例を引いて見ますと、何時

でも俄に與へられて居ります。馬拉基書三章一節に「忽然」といふ同じ意味の言を見ます。主イエスは此世に居給ふた時に、矢張何時も俄に祈禱に答へ給ひました。盲の目を開き、聾の耳を開き、病人を癒し、死人を甦らせ給ふ事は、何時でも俄でありました。今は最早天に昇り給ひましたけれども、何時でも其通りに働き給ひます、さうですから今日も同じ事を見ます。神は俄に聖靈を與へたまひます。段々其經驗に達するのではなくして、俄に其圓滿なる恩恵を頂戴致します。或兄弟は俄に新しい經驗を得たと證する事が出来ませんが、矢張聖靈に満されて居るものもありますが、大概俄に聖靈を受け、又其を證する事が出来ます。

祈禱答へられ約束成遂げらる

『彼等が坐する處の室に』。さうですから此弟子等は皆坐して、靜肅に其を待望して居りました。聲を揚げて祈禱を献げて居つた時ではなかつたせう。最早一生懸命に熱心に祈りました。然れども此時は、最早聲を揚げて祈る事を終り、靜肅に神の大なる恩恵を待望して居りました。十五節を見ますれば、是は朝の九時頃でした。

聖靈の下り給ひました事は、祈禱に對する神の大なる答でありました。神が祈禱に答へ給ふ事の明白なる證據でありました。神は此様に祈禱に答へて、此一番幸福な賜物を與へ給ひますなら

ば、況して祈禱の答として他の物を與へ給はぬ筈はありませぬ。
又是は神の聖言の眞實である事の大なる證據でありました。舊約全書で聖靈の下る事は一番大なる神の約束でありました。主イエスも亦繰返して其を誓ひ給ひましたが、今其約束が成就せられた。是によつて神の聖言の正しい事を知る事が出来ます。私共は人間の智慧を以て、種々の論を以て聖書の眞實を確かめることが出来ます。然れども一番明白な證據は何であるかと申しますれば、其聖書の約束を經驗する事です。例へば主イエスが「我に來れ、我なんぢらを息ません」と仰せ給ひましたならば、重荷を負へる私共は、祈禱を以て彼に近づき、其安息を得ますれば、其によつて其聖言の眞實なる事を確めます。今此弟子等は聖靈を受ける事によつて、舊約全書の眞實なる事を確める事が出来ました。

此二つの事は大切です。即ち是は祈禱の答で、又聖書の約束の成就せられた事でした。さうですから、どうか聖書の言を握つて祈りなさい。或兄弟は他の兄弟の證詞を聞いて祈ります。或は書物を見て其によりて其眞理を知つて祈ります。然れども眞正に聖靈の下る事を求めたうまい事なら、聖書の活ける言を握り、聖書によつて神の聖聲を聞いて、其を求めなければなりません。未だ是に就て神の聖聲を聞かない兄弟姉妹がありますならば、どうか靜に聖書を御調べなさい。私の口より又他の兄弟の口より此證を得ずして、どうぞ聖書を調べ、聖書によつて神の聖聲を

聞いて御祈りなさい。其道を歩みますならば、必ず主の御手から其賜物を頂戴致します。

神の氣息

聖靈の在し給ふ事の表面の兆は何であるかと申せば、此に三の事があります。第一は神の氣息です。

『俄に天より迅風』。原語では風よりも人間の氣息の方が正しういいます。神が氣息を吹き給ひました。創世記一章二節に、『神の靈水の面を覆ひたり』とあります其靈は、原語にてはエホバの氣息であります。其時は神が創造し給ふ時でありましたが、第一に氣息を吹いて其働を始め給ひました。創世記二章七節に、『又大切な創造があります、』エホバ神、土の塵を以て人を造り、生氣を其鼻に嘘入れ給へり。』神が賤しい土を取つて、御自分に似せて貴い人間を造り給ふた時にも、御自分の氣息を吹入れ給ひました。今ペンテコステの日に、神は土の如き賤しい人間を取つて、氣息を嘘入れて御自分に象らしめ給ひます。

又約翰傳廿二章二節に、甦り給ふた主イエスが、弟子等の眞中に立ち給ふた時に、氣を嘘きて聖靈を受けよと言ひ給ひました。其意味は何であるかと申せば、聖靈は御自分からの賜物であり、御自分の生命であり。御自分の性質からの賜物である事を示します。今ペンテコステの日に、第

一に聖靈が氣息のやうに下り給ふて、神の御性質からの賜物を與へ、又神の生命を幾分か配與ひ給ひました。

以西結書一章四節を見ると、エゼキエルが神の異象を見ました時、第一に其通りに烈しき風を見ました。「我見しに視よ、烈しき風……」。又以西結書卅九章九節を見ますれば、此風によつて甦の生命と甦の能力とを得られます。「氣息よ汝四方の風より來り、此殺されし者等の上に呼吸して是を生かしめよ」、此氣息といふ字と風といふ字は原語では同じ字です。

又雅歌四章十六節を見ますと、譬を以て神の風の事が書いてあります。「北風よ起れ、南風よ來れ、わが園を吹いてその香氣を揚げよ、願はくはわが愛する者の己が園に入來りてその佳き果を食はん事を」。聖靈の風が吹き給ひますならば、私共の心から香が出ます。又主イエスが其心に入り給ふて其心の果を喜び給ひます。

音

第二の兆は音でした。烈しき響の音を聞きました。「響ありて」。聖書を調べますれば、神の異象を見ました人が、度々其様に響を聞きました。以西結書一章一節と四節を見ますと、神はエゼキエルに聖言を宣傳ふる事を命じ給ひました。エゼキエルは其命令に従つて出ました。「時に靈

我を上へに擧げしが」(同三章十二、十三節)。エゼキエルは喜んで神の命令に従ひましたから、靈は直接にエゼキエルを感動し給ひました。其時に「我わが後に大なる響の音ありて、エホバの榮光の其處より出づる者は讀むべき哉と云ふを聞けり、また生物の互に相連る翼の聲と、その傍にある輪の聲及び大なる響の音を聞く」。エゼキエルは其を聞きました。其に由つて自分一人行くのてなく、天使が自分と共に行く事が解りました。其響は天使が共に行く音でした。

又以西結書四十三章二節を見ますれば、同じ事があります。五節に「エホバの榮光室に充てる」とありますが、其前に二節で音を聞きました。「其聲大水の音のごとくにして地その榮光に照さる」。神がシナイ山で、御自分を顯はし給ひました時に、同じ事がありました。出埃及記十九章十節「喇叭の聲彌々高くなりゆきて烈しくなりける時、モーセ言を出すに神聲をもて應へ給ふ」。此ラツパは天よりのラツパでありました。希伯來書十二章十九節を見れば、其れは人間の吹きしラツパではありませんでした。

又ダビデが神の命令に従つて、軍に出ました時に、其様な聲を聞きました。撒母耳後書五章廿四節「汝ベカの樹の上に進むの音を聞かば即ち突出づべし、其時にはエホバのまへにいって、ベリシテ人の軍を撃ち給ふべければなり」。此音は丁度エゼキエルが聞きました音と同じものであります。又神は此處に其音を解説し給ひます。其音は何であるかと申せば、エホバ御自身がダビ

テと共に行き給ふといふ事でした。さうですからダビデは、心の中に必ず勝利を得る望が起りま
したてせう。神は私共が傳道に行く前にも、こんな音を聞かせ給ひたういいます。

又列王紀略上十八章四十一節に、エリヤが「大雨の聲あれば」と申しました。他人は此音を聞
きませんでした。エリヤ許り是を聞きました。是は雨が降らんとして居る兆でした。神と交り、
神に祈りし人が、第一に此音を聞く事を得ました。唯今ペンテコステの日に、こんな種々の意味
を以て神は其音を響かしめ給ひます。

火

【三節】

靈の在し給ふ第三の兆は火でありました。「焰の如きもの現れ」とあります。希伯來書十二章
廿九節に「夫れ我儕の神は燬盡す火なり」とあります。聖靈が下り給ひますならば必ず其如く、
燬盡す火として下り給ひます。必ず凡の罪、凡の肉に屬ける者を燬盡し給ひます。

燬盡す火！其意味は妨げる事の出来ぬ能力を以て居るもの、何時でも勝利を得る所の能力を以
て居るものです。小い火を燃やしますれば、段々大火事となります。凡のものを燬盡し、防ぐこ
と能はざる大火事となります。此處で聖靈が御自分の前進する能力を示す爲に、火を表はし給ひ

ました。

又火許りてなく、火の舌が顯はれました。火の舌は勝を得る處の基督教の表號です。又是が各
自に與へられた表面の兆として、各自の上に止りました。「焰の舌(英)の如きもの現れ、岐れて彼
等各人の上に止る」(三節)。是は唯教會に與へられました勢力許りてなく、各自に與へられた勢
力でありました。

又約翰傳一章三十三節にあるやうに 聖靈が主イエス・キリストの上に「止り」給ひました如く、
今弟子等各自の上に止り給ひます。是はペンテコステの時代の特質たる恩恵であります。舊約全
書時代に於ては、聖靈は或時に或聖徒の上に臨み給ひました。今の時代の特質は何であるかと申
せば、聖靈が主イエスの上に止りたまひました通りに、私共の上にも止り給ふ事です。ノアの洪
水の終に、ノアは鶴を方舟より出しました。然れども鶴は其足の爲に立場を見出しませんでした
から、方舟に歸りました。今迄聖靈は此世の有様を見給ひますのに、丁度其通りでした。然れど
も主イエスが此世に顯はれ給ひました時に、始めて聖靈の鶴は此世に立場を見出し給ひました。
唯今貴き血潮に由つて深められました此弟子等が、新しく鶴の止る處となりました。私共も今御
血潮の効能を頂戴しますならば、其様に靈の止り給ふ處となります。其様に眞正に靈の殿となる
事を得ます。

火

第七 聖靈臨り給ふ
神は私共にも此聖靈の三の兆を與へ給ひたうまいます。即ち神の氣息、其響、又活ける火。どうか神の聖前に出て、主イエス・キリストの御手から此様な聖靈の御臨在を御受けなさい。

聖靈の盈満

【四節】

「彼等のみな……満され」。主イエスは此世に居給ひました時、何時でも其様に働き給ひました。五千人にパンを配與へ給ひました時にも、皆飽く事を得ました。其衣の裾に觸る事を得ました病人は、皆癒されました。復活の晩集つて居た弟子等に主が顯はれ給ひました時にも、皆に聖靈の氣息を吹き給ひました。主は平生其様に働き給ひたうまいます。私共の集會でもこんな事を見る筈です。然れ共頑固な心や、不信仰がありますれば、私共は平生其を見ません。

「聖靈に満され」。主イエスは最早昇天し給ひまして、其御榮光を受け給ひました。然れども戦の中、又困難の中に居る其愛する弟子等を忘れ給ひません。其弟子等に幾分か同じ榮光を與へ給ひます。さうですらから戦の中にも、心の中に幾分か天國を経験する事を得ます。

「皆満され」。鐵の片を火の傍に置きますれば、その爲に幾分か暖くなり、觸る事が出来る程熱くなるかも知れません。然れども其鐵片を爐の中に入れて置きますれば、段々火に満され、火と

同じ色となり、火のやうに他の物に火をつける事が出来るやうになります。聖靈に満さるゝ事も其通りです。又氷の片を火の近傍に置けば、段々溶けて水となります。幾分か温味を得ます。然れども其を器の中に入れて、火の上に煮立たせまますならば、段々其熱さに満されて蒸氣となつて天に騰ります。聖靈に満さるゝ事も其通りです。

フレッチャーの經驗

百五十年前に英國にフレッチャーといふ人がありました。其人は實に深い聖靈のバプテスマの經驗を有つた人でありましたが、其人の言ふのに、神を離れず又罪に陥らずして神と共に歩く事は、是は淺い事です。私は其て満足しない。どうかして眞正に満さるゝ事を慕ふと申しました。其後神は其人に近づき給ひて、格別に其愛の事を顯はし給ひまして、其と同時に「汝は白衣を着て我と共に歩まん」といふ約束を與へ給ひました。其時フレッチャーの言ひますのに、今私は満足を得ました。私は満さるゝ事、美はしく満さるゝ事を経験してゐます。今神は愛也といふ事を悟る事を得ましたと申しました。其後或人が聖靈に満さるゝ事の全き經驗は何てありましかと尋ねましたら、フレッチャーは是に答へて、どうして其を認はす事を得ませうか、満さるゝ事とは何であるかと申すならば、神の御慈愛に引かれる事を経験し、御子の愛に勵まされる事

を経験し、聖靈の豊かなる喜びと平安の傾注を経験する事ですと申しました。是は此四節のよい註釋であります。

オルガンは何時でも其轄の中に空気があります。然れども足を以て其轄に風を満しますれば、其オルガンからよい音楽が出ます。聖靈の盈満を頂戴しますれば、此世に居る間にも、自分の心の中にも又他人に聞かせる事の出来る爲にも、天の音楽を奏します。又其によつて真正に神に感謝する事が出来ます。此様なオルガンは黙つて居る事に堪へません。耶利米亞記廿九章九節「然れどエホバの言我心にありて、火のわが骨の中に閉籠りて燃る如くになれば、忍耐に疲れて堪へ難し。此弟子等は丁度其通りに、今神の恵を認はします。『其聖靈の言しひるに隨ひて……言はじめたり』。黙つて居る事に堪へされせん、多分先づ近くに靜肅に立つて居る人々に恵の證詞をしましたてせう。然れども段々大勢の人々が其を聞いて集まつて来りました。多分其時に珍らしい事が起り、エルサレムの町で婦人等が路傍説教をしましたてせう。神が働き給ひますならば、こんな事を見ます。出埃及記十五章廿節に同じ事がありました。イスラエル人は皆救の喜びを感じ、歌を歌つて神に感謝しました。廿節を見れば婦人等までも出て、路傍で神に感謝しました。

第八 萬國傳道

諸國の人の救

【五節】

毎年三の節筵の中で、ペンテコステの節筵には大勢の人々が参りました。他の二の節筵には諸國から猶太人は参りません。然れ共諸國に住んで居る猶太人は、出来るだけペンテコステの節筵には参りました。其は神の攝理でありました。神は其によつて王の王なる事を示し給ひました。今此ペンテコステの節にも神は國々から、代表者をエルサレムに導き給ひました。其處で救を聞き、又救はれ、而して自分の國に歸つて多の人々に其を説明す爲てした。其に由つて他の國々に教會が出来ました。例へばロマにはどうして初に教會が出来ましたか。又バビロンにはどうして教會が出来ましたか。又はイスパニヤにはどうして出来ましたか。多分此ペンテコステの日に、其處より人々が参りまして、此時に救はれて其國々に歸り、他の人々を主イエスに導いたのが起因でありましたてせう。

是は以賽亞書二章三節の成就でした。又其四十九章廿節も成就しました。又六十章をも御覽なさい。此章は初からペンテコステを指します。(一節より四節迄を御覽なさい)「なんぢの目をあげて環視せ、かれらは皆つどひて汝にきたり、汝の子輩は遠きより來り、なんぢの女輩はいだか

れて來らん」(四節)。又其に由つて諸國の人は悔改めましたから、神は凡て國々に其福音を宣傳へさせ給ふ事が解ります。此福音は唯選ばれし民の爲のみではありません、全世界の人々の爲です。神は其日にエルサレムに於て其を確めたまひました。神は段々其に由つて黙示録五章九節と七章九節の成就の仕度をなし給ひます。其事の初は此ペンテコステの日です。其に由つて主イエスの御血潮は凡の人々の爲に流されました事が解ります。又凡の罪人を潔める事が出来ること解ります、又其に由つて神は凡の人々に最も貴い恩恵を與へ、凡の國々より御自分の爲に王となり祭司となる事の出来る罪人を救ひ、又是によつて神は凡の人々の爲に、天國に仕度し給ふ事が解ります。天國に諸國の人々の爲に住居が設けられます。萬國の傳道は何處で始るかと思せば、ペンテコステの恵を受けし本國教會から始ります。萬國傳道の爲に重荷を負ひますれば、第一に大切なる事は、本國教會でペンテコステを起す事です。

バベルの塔とペンテコステ

【六—八節】

此人々は自分の國の言語で、神の恵の話を聞きました。是は神が各自に同情を表して、各自に恵を示し給ふ事の表面の兆です。「おのゝ己が方言を彼等の語れるを聞き」。是はバベルの塔の

詛の反對でありました。バベルの塔で神は人間を詛ふて、言語を亂し給ひました。今神は其詛を祝福に代らしめ給ひます。今神は人間が各々自分の方言で神の恵を聞くやうになし給ひます。バベルの塔に於ては、人々は相別れました。ペンテコステの日の恵の爲には、相愛して一つになりました。今人々は全世界の凡の語を以て神を讚稱へます。又人々は全世界の凡の語によつて神に近づく事を得ます。神は凡の語を以て人間に御自分の聖聲を聞かせ給ひます。

神の大なる御業

【九—十一節】

此「神の大なる用」とは何でありましたかといふに、カルバリ山に行はれし御業でありました。或は主イエスの甦の御業でありました。或は聖靈を下し給ふ事でした。そんな神の大なる御業を語りました。詩篇百七篇八節「願はくは凡ての人はエホバの恵により、人の子になし給へる奇しき事跡によりてエホバを讚稱へんことを」。今ペンテコステの日に其成就しました。又百四十五篇四節から七節を御覽なさい。ペンテコステの日に、聖靈に満されし人々は其詩篇に従つて、神を讚稱へました。其爲に此敬虔ある人々は怪みしました。

第九 町の震動

天の葡萄酒

【十二、十三節】

六節の終と七節に「蹶ぎあへり皆駭き異みつゝ」。又此十二節に「皆おどろき」とあります。即ち其時の教會は悔改めない人々を驚かせました。どうか唯今でも罪人を驚かせる教會を見たらういただきます。こんな教會がありますならば、私共も一日に三千人悔改める事を見ませう。

此驚異は段々信仰になります。是は度々神の順序です。第一恩恵を以て人々を驚かせ、次に信じさせ給ひます。此人々は神の奇跡を見て驚きました。其爲に救はれませんでした。其より後に聖言の爲に救はれました。是は大切です。神は何時でも聖言の能力を以て人間を更生に導き給ひます。其を見て此十二節の如く、或人は驚いて、神を畏るゝ畏を以て満されました。然れども十三節を見ますれば、他の人々は同じ事を見て、嘲つて神の聖名を汚しました。實に人間の心の鈍い事が解ります。神は明白に其御榮光を示し給ふても、或人は暗い心を以て其を嘲ります。又此十三節を見ますれば、そんな人々は基督信者の喜悅について、眞實でない理由を申します。

「此人々は甘き葡萄酒に満されたる者なり」。此理由をつける事は易い事です。神は明白に働きたまひましても、そんな人々は、自分の鈍い心に從つて其を説解します。どうかそんな不信仰の話を受入れませずに、神の働き給ふ事を見上げて、信じて神の大なる御業を感謝致したういいます。

「此人々は甘き葡萄酒に満されたる者なり」。是は眞正でありました。此人々は知りませんでした。たが、眞正の事を申しました。此弟子等は天に属ける甘き葡萄酒に満され、今迄は自分の靈に導かれて生涯を送りましたが、是からは他の靈に導かれて生涯を暮します。撒加利亞書九章十七節と十五節「その福祉は如何計ぞや其美麗は如何計ぞや、穀物は童男を長ぜしめ新酒は童女を長ぜしむ」『萬軍のエホバ彼等を護り給はん彼等は食ふを爲し投石器の石を踏付けん、彼等は飲むことをなし酒に酔へる如くに聲を擧げん』。新しい葡萄酒によりて、そんな福祉とそんな美麗を頂戴します。神は此通りに聖靈を下して、私共に新しい葡萄酒を飲ましめ給ひます。耶利米亞記廿三章九節「預言者輩の爲に我心はわが衷に壞れわが骨は皆震ふ、且エホバと其聖言の爲に我は酔へる人の如く酒に勝るゝ人の如し」。其通りに聖靈に満されて罪人の重荷を負ひます。丁度此人のやうに、葡萄酒に満されし者の如くです。神は私共に此通りに聖靈を與へ給ひたういいます。其通りに心が満されますならば、他の人々に神の御業を認はさずには居られません。其通りに大膽に、罪人の前に主イエスキリストを宣傳へます。其通りに心の中に重荷を負ふて、罪人の爲

第九 町の震動
に働きます。罪人に嘲られても、是非神の言を説解し、其罪人を導きたらうとします。神は私共にも同じやうにペンテコステを與へ給ひます。

シナイ山とペンテコステ

【十二節】

人間は自分の智慧で神の御業を悟ることが出来ません。神は明白に聖聲を出し給ひましても、人間は自分の智慧で其を知る事が出来ません(約翰傳十二章廿九節)。神は奇しき御慈愛を以て、十字架の上に於て人間の爲に働き給ひましたが、人間は其を知りません。今又此ペンテコステの日に神が明白に天より聖聲を出し給ひましたから、人間は心から其意味を尋ねる筈です。「此は何なる故ぞや」。即ち何の意味であるかを尋ねました。其意味は何であるかならば、神が罪人を救ふことを求め給ふ事です。神は罪人を御自分に導き給ひたうとします。是がペンテコステの深い意味です。モーセが神の焰を見ました時に、同じ事を尋ねました。出埃及記三章三節「モーセイひけるは我ゆきて此大なる觀を見、何故に棘の燃たえざるかを見ん」。神は其民を救はん爲に下り給ひました。是が燃ゆる棘の深い意味でした。

シナイ山の麓で、イスラエル人は神の聖聲を聞きました、即ち神は火と暴風から聖聲を聞かしめ

給ひましたが、ペンテコステの火は其シナイ山の火と同じものでした。其シナイ山の火は、埃及から救はれてから五十日後の事でした。其時に出埃及記十九章四節を見れば、神は第一に今迄の事を憶えさせ給ひました。「汝らはエジプト人に我がなしたる所の事を見、我が鷲の翼をのべて汝らを負ひて我に至らしめしを見たり」。過去の事は皆、神の御慈愛と恵のみであつた事を覚えさせ、而して新しい約束を與へ給ひました。五節、六節「然れば汝等もし善く我言を聞き我が契約を守らば、汝等は諸の民に愈りて我寶となるべし、全地は我所有なればなり。汝等は我に對して祭司の國となり聖き民となるべし」。今此ペンテコステの日に此約束を成就し給ひました。此百廿人を御自分の寶とし、御自分の祭司又王とならしめ給ひました。神は續いてイスラエル人に御約束を與へ給ひました。一方から十誠を見ますれば、是は皆神の御約束でありました、誠でなくして、神は其通りに罪を免れて義しい事を行ふ事が出来る様に約束し給ひました。今ペンテコステの日に、神は其通りに信者に新しい契約を與へ給ひます。又其を與ふる事許りてなく、心の中に其を書記し給ひます。即ち其心の願を御自分の聖旨に象らしめ給ひます(哥林多後書三章三節)。神はシナイ山で石牌に記して誠を與へ給ふた通りに、ペンテコステの日に信者の心に其を書記し給ひます。

ペンテコステの火は、丁度新しいシナイの火でありました。然うてすから私共はペンテコステを求めますならば、シナイの火を求むるやうな考を以て求むる筈です。即ち畏を以て、神の榮光

を見ると思つて、謹んで其を求めねばなりません。又其から新しい服従を以て神の誠に従はねばなりません。希伯來書十二章十八節以下に、シナイ山とペンテコステの火が比べられてあります。又其を読んで、心を開き、今神は私共を最も高き恩恵の中に入らしめ給ふと信じて、神に近かねばなりません。私共は幾分かシナイ山に於ける意味を以て此十二節の間に答ふる事を得ます。

第十 聖書に循ふ説明

新しき能力

【十四、十五節】

『此々人は酔る者に非ず』。然うてすからペテロの説教の題は何であるかと申すなら、此人々の前に立つて居る百廿人でありました。聖靈に満されし教會、目で見ゆる教會がペテロの説教の題でした。是はよい題であります。哥林多後書三章三節にあるやうに、此人々はキリストの書となりました。未信者の前に神の聖書となりました。又エルサレムの罪人は、此百廿人を見て幾分か神の聖言を受くる仕度が出来ました。

【十六節以下】

此説教で、ペテロが新しい能力を得た事が解ります。聖靈に満されし人は、何時でもそんな能力を頂戴します。其能力は何であるかと申せば、第一に聖靈の剣を使ふ事でした。十六節と廿五節を見れば、ペテロは聖靈の剣をよく使ふ事を得ました。聖靈の能力を有て居らねば、其剣を使ふ事は出来ません。子供は父の剣を使ふ事は出来ません、然れども聖靈のバプテスマを得て、キリストに在る大人となりました者は、此様に聖靈の剣を使ふ能力を有ります。

第二に、其眞理を以て罪人の心を刺します。ペテロは新しく其様な能力を有りました(卅七節)。明かに此人々の前に、神の眞理と、神の道を示す事を得ました。

第三に、イエス・キリストを示します。今迄此罪人はイエスの榮光を見る事が出来ませんでした。今ペテロが其光を放つ能力を有ります。

第四に、此罪人に自分の罪を悟らせます。自分の鈍い事、又自分の危い事を悟らせます。第五に、心を刺されし者を平安に導きます。

傾注の結果

ペテロは此新しい能力を以て、十六節に於てヨエルの書より引照を引きました。又其によつて神は唯今、誰にも聖靈を注ぎ給ふ事を認はします。例へば婦人でも聖靈を頂戴する事が出来ます。

若者でも、或は奴隷たる者でも聖靈を頂戴する事が出来ず。(十八節の「我僕」の意味は奴隷です)。さうですから、神は唯敬虔ある人々に、又唯勢ある人々、唯位の高い人々に許り此恩恵を興へ給ひませぬ。誰でも、一番賤しい者でも、唯信じさへすれば、頂戴する事が出来ず。今エルサレムの人々の前に、其が成就した事が見えます。今其恩恵を頂戴した人々は、大概輕蔑せられた無學なるガリラヤ人のみでありました。

又此引照によつて、傾注の結果を見ます。第一の結果は預言する事です、即ち活ける能力を以て神の言を宣傳へます(十七節)。第二は異象です。即ち明白に真相を見ることを意味します。第三は夢、即ち聖なる望の成就する事を見る事です。第四の結果は奇跡と休徴です(十九節)。第五は神の審判の確實なる事です(廿節)。ペンテコステによつて、神は必ず此世を審判さ給ふことを確め給ひます。神は第一に恩恵を注ぎ、次に罪を審判さ給ひます。ペンテコステと審判の兩方は、神の奇しき御業であります。第六は罪人が救はれる事であり(廿一節)。

第十一 キリストの御榮光

ペテロの三の説教の題

十四節以下のペテロの説教を読みますれば、ペテロは此三の事について話しました。第一に聖靈に満されし人々に就て述べ、第二に聖書を引いて語り、第三にキリストを宣傳へました。此キリストによつて聖書の言が成就しました。

神の御子

今迄此ユダヤ人等は主イエスを信せず、却て輕蔑し、是を憎みました。今ペテロは格別に、主イエスが神の格別に愛し給ふ御子であると示します(廿二節)。其活きて居給ふた時に、神はキリストに由て働き給ひました。「それナザレのイエスは爾曹の知る如く、神かれに託て爾曹の中に行し、妙なる能力と奇跡と休徴とを以て爾曹に證し給へる所の人なり」。神は其通りに、ユダヤ人の眼の前に主イエスを指し給ひました。是は此「證し」といふ語の原語の意味であります。第二に廿四節「神は之を甦らせ給へり」。第三に廿三節「神の右に擧げられ」。第四に廿六節「神之を主となしキリストとなし給ひし事」。此四の事によつて、ペテロが主イエス・キリストのメシヤたる事を證據立てました。第一の證據は即ち主イエスの行で、ユダヤ人が其行を見た事でした。第二の事は甦て、ペテロは聖書を引いて其を示しました。又廿二節に自分の證を以て其を示しました。第三の事の證據は、今の聖靈の傾注です、廿三節の終に「爾曹が見る所聞く所のものを注げり」。又

第四の事、即ちイエスが主となり、またキリストとなり給ひました事については、聖書によつて是を確めました。

こんな明白な證據がありましたから、ペテロは初めに廿二節にイエスをナザレのイエスと申しました。ユダヤ人は此名を輕蔑しました。然れども神は賤しいナザレ村より、其救主を遣はし給ひました。又或人はイエスが十字架に釘られましたから、其に由つて神の御子又メシヤでない事を證據立てます。然れどもペテロは然うてないと答へ、廿三節に十字架も神の定め給ふた聖旨であり、又救を興ふる神の道である事を述べ、又聖書を引いてメシヤが必ず死に給ふ事を語りました。然れども神は主を甦らせ給ひました。「神は其死の苦を釋きて之を甦らせ給へり、彼は死に繋がれ在るべき者ならざれば也」(廿四節)。他にも死んだ後此世に歸つた者がありました。然れども神がイエスの死の苦を釋き給ひました通りに、他の人々の死を釋き給ひませんでした。主イエスは死に繋がれ居るべき者でありませんから、最早何時迄も死に給ひません。

神の聖前の全き者

詩篇十六篇にそんな事を見ます。ダビデは其處に全き者に就て預言しました。全き道を踏む全き者、即ち常に其前に主の在し給ふ事を見るもの、斷えず神の光の中に歩いて、少しも神の聖旨

を犯さぬ者の踏む處の道は、大なる望の道であります。「我心は樂み我舌は喜べり且わが肉體は望に居らん」(廿六節)。其望は格別に甦の望でありました。廿七節のやうに死を嘗ひましても、必ず甦るといふ望でした。又廿八節の終のやうに、神の聖顔を見て榮光を得る望でした。(廿八節の「爾の前に置きて」は「汝の聖顔を見る事に於て」といふ意味です)。ダビデは其様な者でありません。ダビデは最早死んで葬られた者です(廿九節)。是はダビデが自分の裔であるメシヤの事を預言した處であります。甦を得給ふたキリストは此言を成就し給ひました。

卅三節を見ますと、今神の聖前に全き人が立つて居給ひます。是は天國に於て新しい事實でありました。始から自分の義の爲に、神の聖前に立つ事を得る人は一人もありません。けれ共今其様な人が神の聖前に立つて居給ひます。其人は甦の初穂となり給ひまして、其人に由つて多の人が義を以て神の聖前に立つ事を得ます。神の右に擧げられる事は、天に於ける新しい事實でした。其故に地の上にも新しい事實が出来ました。其はペンテコステであります。神の聖前に完全なる人が立つて居るといふ事は、不思議なる事實でありました。其が神の聖前に出来ましたから、地上に於てペンテコステといふ新しい事實が出来ました。此二の事實は深い關係があります。ナザレのイエスが神の聖前に立つ事を得ましたから、聖靈が私共の心の中に宿り給ふ事が出来るのです。天に昇り給ふた救主がありますから、私共の心の奥底に聖靈が王となり給ふ事が出来るのです。

神の聖前の全き者

完全なる人間が神の榮光に入る事を得ましたから、私共も此世に居る間、潔き者となつて神の御榮光を頂戴する事が出来ませう。さうですら聖靈を得ました人々がありますならば、其はキリストが天に昇り給ひました事の外部の證據であります。

他の人に由りて聖靈を受く

繰返して始からペテロの説教を見まして、神はどんな管を以て私共に聖靈を與へ給ひますかを見ますならば、唯キリストに由つて與へられます。即ち私共は自分の熱心の爲、或は自分の献身の爲、又は自分の祈禱の爲ではなく、他の人の爲に聖靈を頂戴します。

即ち肉體を取り給へる神の御子の爲(廿二節)。又十字架に懸り給へるキリストの爲(廿三節)。又廻り給へるキリストの爲(廿四節)。昇天なし給ふたキリストの爲(廿五節)であります。その通りに神は高き天に在り完全なる泉より、此地に居る私共に至る新しい管を備へ給ひました。其の爲に、即ち十字架と廻り昇天の爲に、今黙示録廿一章五節六節の通りに、天の聖位に坐し給ふ者が何人にも生命の水を飲ませ給ひます。

又其爲に、ヨハネは幻の中に天から聖靈の下る事を見ました。「天使生命の水と河を我に示せり其水澄澈りて水晶の如し神と羔の寶座より出づ」(黙廿二〇一)。是はペンテコステの事です。聖靈

が聖座に坐し給ふ神の羔から流れて参ります。聖靈が殺されし羔から流れて参ります。どうか私共も靈の眼を開いて、今でも十字架又廻りよつて聖靈が下り給ふ事を見たいものです。又其恩寵の聖座に近づく者が、價なしに其生命の水を頂戴する事が出来る事を見たいものです。今私共も其を見る事が出来ませう。どうか兄弟姉妹よ、今聖書の御言に教へられて、信仰の眼を擧げて聖座に坐し給ふ救主を御覽なさい。又信じて其御手から豊かに聖靈を御受けなさい。

悟開かる

エゼキエルも同じ事を見ました。以西結書四十七章に、天から此川が流れて來る事を見ました。又其川が段々深くなりまして、泳ぐ程の深い川となりました。私共が信じて其川の水を受入れませうならば、段々心の中に其經驗が深くなつて、終に神の御能力に流され、神の御慈愛に引かれて生涯を暮らす事が出来るやうになります。

他の人に由りて聖靈を受く 悟開かる

も聖靈の光によつて、其様に詩篇の深い意味を握る事が出来ます。

第二にペテロは明白に主イエスの榮光を悟りました。主イエスが御自分の王たる權利と、祭司たる權利を得たまひました事を、明白に悟りました。又主は能はざる所なき能力を以て居たまふ救主である事を知りました。又主は唯今一番悪い罪人をも忽ち救ひ給ふ事が出来る事を知りました。其故にペテロは此エルサレムの罪人にさへも、其時に救はれる事を宣傳へました。斯様に此時から主イエスの榮光と、主の恩恵とを知り始めました。(日本語で恩恵といふ語は、意味が淺いやうですが、此處では價なしに受くる恩恵を指します。イエスが救はれる價値もない者を即座に其場で救ひ給ふ事の出来る能力を有し、極悪の罪人をも救はんとして待つて居給ふ事を表します。ペテロは可驚事を宣傳へました。即ち十字架に釘られた、罪人と見えるイエスが、今晷を戴いて全世界の王となり給ひました。王となり給ひましたから、凡の膝が其前に屈む筈です。以賽亞書四十五章二十三節「我は己を指して誓ひたり、この言はたゞしき口より出てたれば反ることなし」。神は此言を確め、此言に御自分の印を捺して其を曰給ひます、「凡ての膝は我がまへに屈み、すべての舌はわれに誓をたてん」。ペテロは此言が主イエスを指すと悟りました。又詩篇二篇九節より十二節迄の言が成就した事をも知りました。

人間の考と神の考

此人々は十字架の上に、主イエスの爲に場所を設けましたが、神は聖座の上に其場所を設け給ひました。其に由つて人間の心と、神の心の區別が解ります。其に由つて人間の深い罪が解ります。主イエスが位に擧げられましたから、人は二つに分れて參ります。即ち一方は廿二節の通りに、主イエスの名を呼籲む者です。さういふ人は救はれます。もう一方の方は主の敵です(卅五節)。此主の敵は必ず滅されます。

第十二 危険より救に至る

危険を自覺す

【三十七節】

此節を見ますれば、此ペテロの説教を聞きましたものは、自分の危い事を知り、自分が今迄キリストの敵であつた事を悟りました。又神は愛を以て救主を與へ給ひましたのに、自分の鈍い心を以て其救主を逐捨て、其を殺した事をも知りました。其大なる罪を知つて、心を刺されまし

た。今でも罪人の有様は同じ事です。神は全き愛の救主を與へ給ひました。然れども罪人は却て其を拒みました。罪人は第一に其大なる罪を感じて、心を刺される筈です。神の福音には其様な能力があります。「我言は火の如くならずや、又磐を打碎く槌の如くならずや」(耶廿三〇廿九)。「このゆゑに預言者等をもて彼等を撃ち、わが口の言を以てかれらを殺せり」(何六〇五)。神の言は罪人を殺し、又甦らす筈です。此人々は心を刺され、以西結書卅七章の異象の中にある八節の言のやうになりました。「我見しに筋その上に出きたり肉生じ、皮上より之を蔽ひしが氣息その中にあらず」。未だ其衷に生命がありませんが、ペテロは聖靈の能力で、最早此罪人を殺しましたから、今聖靈の能力を以て彼等を甦らせませす。

第二の集會

【三十七—四十節】

卅七節から第二の集會であります。その集會でペテロは皆が救はれると信じました。卅八節に「爾曹おのく」とあります、是は英語で every one of you です。皆が信じて悔改むる事を信じて、待望しました。三章二十六節にも同じ言がありました。「なんぢら各々を其惡より引反し」。眞の傳道者の心の中にはこんな信仰があります。福音を宣傳へれば、其を聞く人々が皆救はれる事を

信じて待望します。私共は度々心の不信仰の爲に神の働を妨げます。どうか斷えずペテロの信仰を以て説明したういいます。

三十八節を見れば救の順序が知れます。第一は悔改。第二は信仰、第三は告白、即ちバプテスマを以て他の人々の前に、自分が救を得たと認はす事です。又其に由つてどんな恩恵を頂戴するかと申せば、二つあります。第一は過去の爲に罪の救を得て、神の聖前に潔き者となります。第二は未來の爲に聖靈を頂戴します。私共はコルネリオのやうに、一緒に此二つの恩恵を頂戴する事が出来る筈です。然れども普通罪人はこんな信仰を抱く事が出来ません。さうですから第一に罪の救を得、其後聖靈御自身を得ます。ウエスレーは救はれし人々の證をよく聞きましたが、一度に此二つの恩恵を得た人に遇つた事がないと申しました。何時でも此二つの恩恵を別々に戴きます。

限られざる約束

是は餘り大なる恩恵ですから、多分其を得る人々は稀であると思ふ人がありませう。然れどもペテロは卅九節に其考に答へて、此約束には限りがなく、誰でも此圓滿なる救を得る事が出来ると申しました。三十九節に「爾曹」でも、神の子を殺したヒドイ罪人である爾曹でも、神の救に與

る事が出来る」と申しました。又「爾曹の子孫」でも、物のよく解らぬ子供でも、此恩恵を得られ
ると申しました。馬太傳二十七章二十五節に、エルサレムの人々が其子孫にヒドイ詛を願ひまし
た。「民皆答へて曰けるは其血は我儕と我儕の子孫に係るべし」。神が若し其願を聞入れ給ひまし
たならば、其人々も其子孫も全く滅びるのみであります。然れども神は却て其子孫にも、罪の赦
と聖靈を與へ給ふやうに曰給ひます。又「凡の遠き者」も其を得ます。異邦人の如き者、即ち神
に遠ざかつて、神を少しも知らぬ異邦人でも、此全き救に與る事を得ます。又此時代に遠い時代
の私共も、此賜物を頂戴する事が出来ます。少しの特權のない私共も、同じ榮光を得られます。
是は少しも自分の功績の爲めではありません。三十九節の終に「主たる我儕の神に召さるゝ人々」
とあります。即ち神の聖聲を聞き召を受けた者は皆、此救を得る事が出来ます。
四十節を見れば、多くの言を以て證しました。多分長い話をしましたせう。ペテロは淺い働
をしたくありませんでした。どうかしてよく此人々に説明し、其危い有様を示して熱心に導かう
と致しました。路加傳十四章廿三節に「強て人々を引來り」とありますが、今ペテロは強て人々
を連來りたるうございました。

七の 結果

【四十一—四十七節】

此恩恵の結果として七の結果を見ます。

第一は四十二節です。此恩恵は急に下りました。此人々は急に悔改めました。然れども其結果
は何時までも續きました。格別にどういふ風に續いたかと申せば、四十二節に四の事があります。
『使徒等の教訓を受け』。即ち靈の眞理を學びました。次に『交際をなし』。信者と愛を以て心を合
せました。又『パンを擘く事』。何時迄も十字架の事を覚えて、十字架を其中心と致しました。其
次に『祈禱を努む』。即ち自分の乏しい貧しい事を認はして祈りました。最早聖靈の榮光を得まし
ても、謙つて自分の乏しさを感じて祈禱を勉めました。是は第一の結果です。
第二の結果は四十三節にあります。「是に於て敬畏人々の心に生ず」。他の罪人が畏れました。
神の敬畏が罪人の心を動かしますならば、其はリバイバルの始です。
第三の結果は心を合せる事です。四十四節「信者はみな一處に會りて」。
第四の結果は愛であります。四十四節の終と四十五節。「諸物を共にし」。是は全き愛の果であ
ります。

第五は何時でも集會に出た事です。四十六節「日々心を合せて殿に在り、又家に於てパンをさ
き、歡喜と誠心をもて食を共にし」。公の集會もありました。又小さい家の集會もありました。聖靈

第十二 危險より救に至る
が働き給ひますならば、必ずよく集會を設けます。

第六の結果は四十六節の終の喜悦と感謝です。此暗き地上に天の如き喜悦が出来ました。
第七の結果は靈魂が救はれる事です。四十七節「主すくはるゝ者を日々教會に加へ給へり」。其時に於て大なる働人は誰であつたかと申せば、天の聖座に坐し給ふ主でありました。

一 家族

此有様を見ますれば、教會は一家族のやうであります。主イエスが此世に居給ふた時、弟子等を集めて、自分の家族の如くに彼等を取扱ひ給ひました。弟子等は皆一家族のやうになりました。馬可傳三章卅五節「それ神の旨に従ふ者は是れが兄弟わが姉妹わが母なり」。其通りに、愛に満されし家族の如き教會がありました。

三の新しい特質

此處に三の新しい特質がありました。第一は新しい教師が出来ました。今迄エルサレムで高い、進歩した教師の教を得ましたが、今より無學の田舎者から聖なる教を受入れれます。

第二に新しい儀式が出来ました。其はパンを擘く事です。何時でも新しい儀式を始めることは

六かしい事です。然れども初の弟子等は主の教を得ましたから、パンを擘く事を始めました。其時から十字架に釘られし主イエスが教會の中心となり給ひました。其時からパンを擘く事により、主イエスから又十字架から心の能力と心の生命と、心の滋養を頂戴する事を表はしました。又第三に新しく持物を共に致しました。是は長く續きませんでした。又多分其は神の聖旨でありませんでした。併し其時に溢れる愛がありましたから、其愛が此珍らしい果を結びました。是は間違つた事であつたてせうけれ共、必ず神の聖旨を喜ばせたと思ひます。其信者はキリストに在る富と財を得たと感じて、喜んで自分の持物を他に配與へました。又教會の一番小さい者、或は賤しい者の價値を感じて、喜んでキリストを助けると思ふて其兄弟を助けました。

神は創世記二章に、此世に天の型としてエデンの園を造り給ひました。然れども人は早速其を汚して、其を失ひました。今神は其敗壞の中に、十字架の贖の爲に、新しくエデンの園を造り給ひました。未來に於て黙示録廿一章廿二章にあるやうに、神は私共に全きエデンの園を與へ給ひます。私共は神が私共の心の中に小さい天國を造り給ひました事を、唯今此亡ぶる世の中に、又苦める罪人の間に表はしたいものであります。其によりて人々は神が生ける救主である事を感じます。どうか其爲に此二章の通りに豊かに聖靈を御受けなさい。

第十三 跛の癒

聖潔の力

第三章

此第三章の始に跛の癒された話があります。二章に於て聖靈の降臨の事を見ました。又人々は聖靈に満されて、新しき經驗を得た事を見ました。此第三章の始に於て跛へたる者の癒された事によりて、神は私共に聖靈の能力を示し給ひます。又聖靈の能力を得ますれば、私共の中にどういふ結果が見えるかを教へ給ひます。信者が聖靈を得ますれば、丁度跛へたる者が溢れる程の生を得て癒さるゝと同じ事であります。馬太傳八章を御覽なさい。同じ事であります。馬太傳五章六章七章に於て、山上の説教で主は私共に潔き心の事を教へ給ひましたが、其が終つて八章一節から癩病人が潔めらるゝ事を見ますが、主は是に由て私共に御自分の聖潔の力を教へ給ひます。即ち始に聖潔に就て説教し、次に例を引いて其能力を表はし給ひます。

全國民の召

然れ共此使徒行傳第三章は唯其許りでありません。此處で神はイスラエル全國民を悔改に招き

給ひます。二章に於て神は一個人々に悔改を命じ給ひましたが、多の人は其聖聲に従つて悔改め、大なる恩恵を頂戴しました。今神は一步を進めて、其全國民に悔改を命じ給ひます。神は忍耐を以てイスラエル人を取扱ひ給ひました。色々の方法を以て、其懐かしい國に聖聲を聞かしめ給ひました。又イスラエル人民が御子を殺しましたも、神は其國を捨て給はず、二章に於てエルサレムの有司の目の前に、奇しき御業をなし給ひました。又二章の終に基督信者の美はしい有様によりて、其恩恵を示し給ひました。今新しい證據を立て、イスラエル人の心を刺し、モウ一度全國民に悔改よと言ひ給ひます。

悔改の結果

悔改めると何ういふ結果がありますかならば、第一に三章十九節「是故に爾曹罪を悔い心を改めて其罪を抹るゝことを爲よ、蓋主の前より安舒日の來り」。此安舒日といふ言は意味が少し弱らうとあります。英語で Time of refreshing として、矢張りバイバルの時を指します。神は主イエスの死の爲にイスラエルを罰し給ひたうとせません。却て其によりて、溢れる程の恩恵を與へ給ひたうとします。眞のリバイバルの時を與へ給ひたうとします。舊約全書に度々リバイバルが起るといふ約束があります。例へば詩篇七十二篇、以賽亞書三十五章、耶利米亞記三十三章、以西結書四十七

章等に、さういふ約束が與へられました。神は今でも其約束を成就し給ひまして、イスラエルの國に眞正のリバイバルを興へ給ひたういたします。

使徒行傳二章に於て、一個人として聖靈に満される恩恵を頂戴する事が出来ます、三章に於て一步を進めて、一般のリバイバル即ち一般の聖靈の働を頂戴する事が出来ます。私共も或時は二章のやうに説教して、一個人の爲に聖靈の聖潔と、聖靈の能力を宣傳ふる筈です。又或時は三章の説教の通りに、一般のリバイバルは何處から起るかを宣傳へなければなりません。又其許りてなく、第二に廿節に於て「且あらかじめ擬め給ひしイエス・キリストを遣られんが爲なり」。イスラエル人が國民として悔改めましますならば、其時こそ必ず主イエスが此世に再來り給ふ時です。

又第三に、廿一節に「萬物の復興らん時」が来る筈です。是は即ち新しき天と新しき地です。主が此世に於て聖國を擴め給ふ事です。さういふ美はしい結果があります。神の心の中にこんな考と、こんな目的がありました。神は第一にイスラエル、次に凡の人を祝福し給ひたういたしました。三章廿五節「……地の諸族は爾の裔に由て福を獲んと曰給へり」。イスラエル人が若し其時に悔改めましたならば、神は地の諸族に幸福を興へ給ふたせう。然れども頑固にして其を斷りました。却て自分の道を踏み、自分の心の考に従つて神を敬ひましたから、凡てこんな恩恵を斷

りました。

此章に於て一方から信仰の大なる力を見ます。即ち信仰によりて斯ういふ大なる恩恵を頂戴する事が出来ます。又他の方からは、不信仰の恐ろしい力、即ち不信仰によりて神の恩恵を防ぐ事が出来る事を見ます。神の救の能力に反對する事が出来ます。不信仰によりて此世の暗黒さと世の汚たる有様が積まします。さういふ事を見ます。

祈禱の時

【一節】

『第三時祈禱の時に當りて』。祈禱の時、即ち神が奇しき御業を行ひ給ふ時です。神が聖聲を聞かしめ給ふ時、神が恩恵を下し給ふ時です。其に就て舊約の三の引照を引きます。

第一は列王紀略上十八章卅六節。是はエリヤがカルメル山の上に人々を集め、壇を築いて神の火を願つた時です。『晩の祭物を献ぐる時に及びて』祈りました。是は祈禱の時でした。其祈禱が答へられて『時にエホバの火降り』ました(卅八節)。祈禱の時は火の下る時です。神が祈禱に答へて火を下し給ふ時であります。

次に以士喇書九章五、六節。是は神がイスラエル人をバビロンの捕囚より救出して、歸らしめ給

ふた時でした。然れども歸りました神の民が、モウ一度神に反きて罪を犯しました。エズラは此處で、其罪を重荷として祈りました。格別に此五、六節に「晩の供物の時に至り、我その苦行より起て衣と袍とを裂きたるまゝ、膝を屈めて我神エホバに向ひ手を舒べて言けるは、我神よ我は我神に向ひて面を擧ぐるを羞ぢて赧らむ」。即ち懺悔しました。又神は其懺悔を受入れ給ひまして、其全國民に悔改を與へ給ひました。祈禱の時懺悔と悔改の時でした。

終に但以理書九章廿一節を御覽なさい。此章の二節を見ますと、其時は救はるべき時でありました。神は其民を救出し給ふ様に約束し給ひました。さうですから三節に於て、ダニエルは斷食をして祈りました。「是に於て我面を主エホバに向け斷食をなし麻の衣を着、灰を蒙り、祈り且願ひて求むる事をせり」。熱心に祈りました。又其祈禱の終に、十九節を御覽なさい。「主よ聽かれたまへ、主よ救したまへ、主よ聽いれて行ひたまへ、此事を遅くし給ふ勿れ、わが神よ汝みづからの爲に之をなしたまへ、其は汝の邑と汝の民は汝の名をもて稱へらるればなり」。熱心な祈禱です。此一節の中に五つ六つの熱心な確實な祈禱があります。神は其様な祈禱に答へ給ひました。「我かく言ひて祈りかつ我罪と我民イスラエルの罪を懺悔し、我神の聖山の事につきて我神エホバの前に願を奉りせる時、即ち我祈禱の言をのべせる時、我が初に異象の中に見たるかの人ガブリエル迅速に飛びて晩の祭物を献ぐる頃我許に達し」(廿、廿一節)。然うですから祈禱の時は天使の來

イエスの名

る時、祈禱の答を受ける時であります。ダニエルは其悟識が開かるゝ事を得ました時、三度「晩の祭物の時」と申しました。祈禱の時を祭物の時と申しました。其時はエルサレムの神殿に於て、神の命、神の律法に従つて、神の壇の上に羔を載せる時でした。私共の祈禱の力は何處から起りますかならば、十字架から起ります。エリヤは晩の祭物の時に祈つて、其エルサレムの壇の上に載せられました祭物の爲に、天より火を得ました。エズラもダニエルも祭物の効能の爲に、祈禱の答を得ました。私共は祈る時に十字架の効能の爲に、其祈禱が答へられます。

此祈禱の答は何でありましたかならば、十三節(使徒行傳の方の)を御覽なさい。「イエス……を榮めたまへり」。神は何時でも主イエスを崇め給ふて、祈禱に答へ給ひます。格別に私共は幸福を與へる爲めにはありません。主イエスを崇める爲に、祈禱に答へ給ひます。跛へたる者が癒された事によりて、主イエスが生きて居給ふ救主、力ある救主、祈禱に答へ給ふ救主であると示し給ひました。

度々此章に於てイエスの名といふ事が記してあります。六節「ナザレのイエスの名によりて」。十六節に「イエスの名は其名を信するに由て」。四章十節「其爾曹が十字架に釘けしところ、神の

懸らせ給ひし所のナザレのイエスキリストの名に由て」十二節「我儕の依頼みて救はるべき他の名」十七節の終に「此後その名に就て」斯いふ風に度々イエスの名に就て記されます。若し或人の名が能力ある名なれば、即ち名に勢力がありますれば、其人は必ず生きて居ります。例へば茲に銀行の小切手がありまして、其が價值あるものでありますれば、其下に記してある名の人には必ず生きて居ります。死んだ人の名ですなれば、其小切手は何の價值もありません。此三章四章に於て、主イエスの名に能力のある事が表はれましたから、主は生きて居給ふ者であると解ります。例へば百年前に、ナポレオンの名は恐ろしい名でありました。國々の王等は其名を恐れしました。ナポレオンが捕虜になりました時にさへ、人々は其名を恐れしました。然れどもナポレオンが死んでからは、最早其名は何の能力もありません。此章に於て主イエスの名の能力を知ります。

ペテロとヨハネ

「第三時祈禱の時に當りてペテロとヨハネ共に殿に上りしに」。此二人は心を合せて主の爲に働きました。三四年前に此二人は職業の仲間でした。路加傳五章十節を見ますれば「シモンの侶なるゼベダイの子ヤコブとヨハネも亦然り」とあります。此侶といふ字は、原語では友達ではありせん。實業の仲間であります。又此二人は約翰傳一章を見ますれば、バプテスマのヨハネにより

て多分一緒にヨハネのバプテスマを受けたと思ひます。四十、四十一節に於て、バプテスマのヨハネの集會に出た事を見ますが、多分其時二人はヨハネのバプテスマに興りましたせう。而して其時から一緒に居りまして、又一緒に主に従ひまして、主の奇跡を見、主の教訓を受けました。又終にペテロが三度主イエスを拒みました時に、ヨハネがペテロの其言を聞きました（約翰傳十八章十五節）。然れども約翰傳廿三章三節を見ますと、ヨハネが其爲に友達のペテロを捨てさせなんだ。其後一緒に主イエスの墓に参りました。又一緒に聖靈のバプテスマを受けました。今此處で心を合せて一緒に祈禱に参りました。

此時に此二人は、格別に神が働き給ふ事を思ふて居なかつたに相違ありません。唯自分の爲め、神を禮拜する爲に殿に上りました。神は度々思ひの外に、聖靈に満されし者を用ひ給ひます。

神の賤しき器

【三節】

「一人の生來なる跛あり」。四章廿二節を見ますれば、此人は四十歳餘になりましたから、永い間 疾つて居りました。今迄何にも役に立たない者でした。歩く事は出来ず、働く事も出来ず、神殿に入る事も出来ません。神は此役に立たぬ、死んだやうな者を用ひて、エルサレムを動かした

ペテロとヨハネ 神の賤しき器

給ひました。神は度々この様に、其御能力を表はす爲に、賤しい者を取り給ひます。蟲の如き者を取りて御榮を表はし給ひます。以賽亞書四十一章十四、十五節を御覽なさい。

肉に屬ける信者の表號

【三節】

又この跛へたる者は肉に屬る信者の表號であります。さういふ信者は神の義しい道を踏む事が出来ず、又自分の養を受くる事も出来ません、又神の殿に入る事も出来ません。神は近くに居給ひました。又神に到る爲に美しい入口がありました。然れども神に到る事が出来ません。唯外に立つて物を乞ふ事許り出来しました。

三節に於て「彼ペテロとヨハネの殿に入らんとするを見て施濟を求り」。即ち唯幾分か其日々々の爲に養を貰ふ事を願ひました。神の目的は何てありますかならば、全き贖を與へ給ふ事であります。然れども私共は度々此跛のやうに、不信仰の祈禱を献げて、唯僅か許りの恩恵を求めます。併し神は全き聖潔と、全き能力を與へ給ひたうします。神は其時に、其人の思に越えたる恩恵を與へ給ひました。又何時迄も續く恩恵を頂戴しました。肉に屬ける信者が聖靈を得ますれば、丁度同じ通りであります。

癒されし跛の五の精神

癒されました人の心を探ねますれば、其人に五の精神がありました。第一は信仰です。此人は必ず心の中に癒される事が出来るといふ信仰を有つて居たに相違ありません。「イエスの名は其名を信するに由り」(十六節)。さうですから此人は信しました。馬太傳廿一章十四節を見ますと「尊者跛者の人々殿に入てイエスに來りければ之を醫しぬ」とあります。是は神殿の庭に入つてイエスに來て癒されたのでありますが、此跛は多分其事を聞き、又其時癒された者を見ましたてせうから、心の中に今自分の癒を受けられるといふ信仰があつたと思ひます。

又第二に此人は主イエスを信しました。ペテロは「ナザレのイエス・キリストの名により」(六節)と申しました。イエスは唯二ヶ月前に、十字架に釘られて死んだ人です。信じない人から見ますれば、何にも力のない人であります。然れどもペテロが其を言ひました時に、此人は主の名を信じて恩恵を得ました。又是から此人は大膽に主イエスを認はしました。

第三に十一節を御覽なさい。「その跛者ペテロとヨハネにすがり居りし間」。又四章十節「此人健勁なることを得、なんぢらの前に立ちたり」。さうですから大膽に、迫害を頓着せず、ペテロとヨハネと共に居りました。

肉に屬ける信者の表號 癒されし跛の五の精神

又第四に此人の心の中に感謝の精神がありました。八節の終「神を讚美つ」。又第五にペテロとヨハネを愛する心がありました。神の使者を愛しました。今心の跋へたる者が、其心の中にかういふ精神がありますなれば、必ず全き恩恵を頂戴致します。

働人の七の精神

【四—十二節】

又ペテロの事を御覽なさい。ペテロは靈魂を捕へる人の模範であります。第一に愛の心を有て居ります。路加傳十章卅三節の善きサマリア人のやうに、傷を得た者を見て、是非其人を助けたらうします。

第二にさういふ働人は、辨へる事が出来る目を有つて居る者です。四節「ペテロ、ヨハネと共に熟々之を視て」。聖靈に満されました者は、能力ある目を有つて居ります。十三章九節「パウロ聖靈に満され目を注て彼を見、曰けるは、噫凡ての詭譎と奸惡にて盈てるもの、惡魔の子、凡ての義との敵よ」。パウロの目は斯んなに能力ある目でありました。ジヨージ・フォックスが、或時路傍説教をしました時に、其前に或ヒドイ罪人が立つて其説教を聞いて居ましたが、其説教の中に呼はつて「人よ御前の其眼を引抜いて置いてくれ、其が私を焼く」と申しました。私共は聖靈

に由りて幾分か斯ういふ眼を有つて居る筈です。十四章九節「パウロ眼を注て其愈さるべき信仰あるを視」。私共は斯様に心を辨へる眼を有つて居る筈であります。

第三に斯る働人は、自分は能力を有つて居るといふ事を認め、又其を配與ふる事が出来ると思ふに居る筈です。「我に有るもの」、さういふ確信です。「爾に與ふ」、さういふ確信です(六節)。

第四に斯る働人は、今跋が癒されるといふ信仰を有つて居ります。「起ちて歩め」(六節)。即ち此確信です。今山が取除かれて、今信仰の命令に従つて跋が癒されるといふ信仰を有つて居ります。馬可傳十一章卅三節の通りです。

又こんな働人は第五に、助ける事の出来る手を有つて居ります。「其右の手を執り」(七節)。神の爲に働きたらういふすれば、又信仰の業を行ひたらういふすれば、人間の手を度々使はねばなりません。主イエスは温かい人情を有つて居給ひましたが、或働人は其がありませんから、人を助ける事が出来ません。

第六に、主イエスを認はす大膽を有つて居ります。此時神殿に於て主イエスを認はす事は、實に危い事でありました。然れ共彼等は大膽に主イエスを認はしました。

第七に、そんな働人は謙遜を有つて居りますから、少しも自分が譽を得たくありません。「ペテロ

之を見て民に答けるは、イスラエルの人々よ何故に此事を奇とするや、我儕が自己の能と徳をもて此人を行まし、が如く何ぞ我儕に目を注るや(十二節)。或基督教の働人は八章九節の様な心を以て主イエスの爲に働きます。『自らを大なる者としてサマリアの民を駭かし、者あり』。然れ共聖靈に満されました者は、凡の榮光を主に歸し奉りたうします。其働人は詩篇百十五篇を歌つて傳道を致します。其詩篇百十五篇をペテロの説教と比べますれば、終迄よく似て居ります。私共は此二つの繪を以て、どうぞ同じ心を求めたうします。跛へたる者の心を有つて居りますれば、全き救に與ります。ペテロの心を有つて居りますれば、眞正に罪人を救ふて、神の奇しき御業を拜見する事が出来ます。

第十四 跛者に就てのペテロの説教

機會を捕へる傳道者

【十三節】

ペテロは其機會を捕へました。聖靈に満されました傳道者は、何時でも機會を捕へる準備をして居ります。人々がよく集りましたから、ペテロは路傍説教を始めました。使徒行傳に度々使徒

の説教の筆記があります。聖靈は何故私共に其説教の綱領を與ひ給ひますかならば、私共の説教の手本の爲であります。或時には福音をまだ聞かない人々に對する説教を見ます。或時には舊約を知つて居る人々に對する説教を讀みます。私共は其を見まして、其手本に従つて、主イエスを宣傳へたうします。

ペテロの説教の綱領

【十三節以下】

此説教の綱領を御覽なさい。第一、十三節に於てキリストの榮光を宣傳へます。神はキリストを『榮め給へり』。

第二、其に比べて人間の罪、又格別に『汝等』の罪、即ち主イエスを拒み、此神の子を捨て、之を殺した其罪を示しました。今の人々に對しても同じ通りに罪を表はす事が出来ます。今の人々も矢張神の御子を拒み、又捨て、居ります。

第三、キリストは信する者の爲に、如何いふ恩恵を與へ給ひますか。是は十六節です。ペテロは其癒されました人を指して、此人は主イエスを信じたから其爲に全快したと申しまして、今主が信する者にどういふ恩恵を與へ給ふかを示しました。

第四に、十九節からの處で、悔改めて信ぜよと勧めました。

第五に、其結果は唯卿の爲め許りてなく、全國の爲だと申しました。其は十九節から廿一節迄です。

第六に、一個人／＼に對して、救はれるやうに熱心に勧めました。廿六節に「なんぢら各人を」云々とあります。

証人

ペテロは其爲にどういふ證人を以て参りましたかならば、第一に十五節に於て「我儕は」とあるやうに彼等自身です。唯學んだ事を證する許りてなく、實際其を見ましたから證人となる事が出来ました。

第二の證人は、其處に立つて居る癒されし跛です。

第三は聖書です。私共が未だ聖書を読まない人々に對して説教する時にも、聖書の證は能力ある證であります。十八節「凡の預言者」、廿一節「神の古より聖預言者」、廿四節「語りし所の預言者」。ペテロは此やうに三度聖書の言を引きました。

キリストの四の名

此處でキリストの四の名を御覽なさい。第一は「神の僕」(十三節)。此人々はイエスを、神に反對して其律法を犯した異端者であると思ひました。然れどもイエスは眞正に神に従ひ給ふた神の使者でありました。

第二に「聖者」(十四節)。舊約全書を知つて居る人は、其を聞いて是はキリストは神であるといふ意味であると解りました。聖者と云ふ名は舊約全書で、度々エホバの名として記してあります。以賽亞書四十三章十四、十五節「汝らを贖ふものイスラエルの聖者エホバ」、「われはエホバなんぢらの聖者イスラエルを創造せし者」。是は實に面白い御名前であります。又以賽亞書四十九章七節に「エホバ、イスラエルの贖主イスラエルの聖者」。又哈巴谷書一章十二節「エホバ我神我聖者よ」。又其三章三節「神テマンより來り、聖者バラン山より臨み給ふ」。然うてすから舊約聖書に度々かういふ名を見ます。而して是は何時でも神の御名前であります。ペテロは是に由りて明かにキリストが神であると宣傳へました。

第三の名は「義者」です。十四節「なんぢらは聖者義者を拒み」。聖者といふ名は主エホバを指す言、義者といふ名は、人間としての主イエスを指す名であります。キリストは人間として罪

なき者でありました。使徒行傳七章五十二節にも同じ名が記されてあります。『彼等は義者の來らんとを預め語りし者を殺し、爾曹は今その義者を解し。』又廿二章十四節『我らの列祖の神は爾に神の旨を知しめ彼の義者を見させ。』又此使徒行傳に於て使徒のペテロとヨハネとを見ますが、彼等の書即ち彼得の書と約翰の書に於て、キリストの事を義者と申しました。彼得前書三章十八節『義者不義者の爲にせり。』又約翰第一書二章一節の終に『即ち義なるキリスト』とあります。ペテロは今此名に就て説教しました時、唯其名を云ふ許りてなく、其名を説明し、其深い意味を言表はしたらうと思ひます。

第四の名は十五節の『生命の主』。是は英語の Prince of Life 即ち生命の皇太子といふ意味で、實に面白い名でつきます。何卒其名前をよくお味ひなさい。其に就て約翰傳十七章二節を御覽なさい。『これ爾われに賜ひし所の者に我永生を予へんがため凡の者を制むる權威を我に賜ひたれば也。』主イエスは權威を有ち給へる君でありましたが、其は何の爲てでありましたかならば、人々に永生を與へる爲てでありました。さうですら生命の主 (Prince of Life) と申します。何卒祈禱の中に一つく此主イエスの御名前をよくお味ひなさい。其によりて主イエスの御榮光を見る事が出来ます。主イエスは神の僕です。聖者です。イスラエルの聖者です。又義者即ち罪のない御方です。又生命の君であります。

恐ろしき訴

ペテロは此人々に對してヒドイ言を以て訴へて居ります。聖者を拒み、又其を殺したといふ、さういふヒドイ言を以て會衆に訴へました。又其許りてなく、人間は主イエスに對してこんなヒドイ事をしましても、主イエスは勝利を得給ひまして、今救を與へ給ふ事が出来る事を述べました。

不信仰と信仰

十五節と十六節とを比べますれば、是は反對です。十五節に於て罪人はキリストを殺しました。キリストを信ぜぬ爲にキリストを殺しました。十六節に於ては、此跋へたる者はキリストを信じて、其信仰によりて新しき生命を得ました。此癒された者が主の生ける救の力の證據であります。跋へたる者が殺されたキリストを信じました事によりて、新しき力を得ました。

愛の勸

十三節から十五節迄に、ペテロが靈の劔を以て此人々の心を刺しましたが、十七節から却て愛と柔しい言を以て此人々を慰めました。又其心の中に信仰と望を起しました。十七節に『兄弟よ』

恐ろしき訴 不信仰と信仰 愛の勸

とありますが、是は實に柔しい言です。丁寧なる言です。「兄弟よ我は知る、爾らが行ひし事は知らざるに由て也」是はキリストの精神であります。キリストは路加傳廿三章卅四節に「父よ彼等を赦し給へ其爲す所を知らざるが故なり」と言ひ給ひました。ペテロは今此キリストの靈を以て此人々に勧め、此人々に福音を宣傳へて、今でも恩恵を得る事が出来ると申しました。イエス・キリストを殺し、神の恩恵に反対した罪人でも恩恵を受ける事が出来る、其人々の爲に未だ恩恵の日が過ぎりません。今でも十九節の如く罪を消される事が出来ます。

又第二に「安符日」が来る事を申しました(十九節)。

第三に廿節の如く、殺されたキリストが又來り給ふ事を申しました。

第四に萬物の改まる時が來ると申しました。今でも唯悔改めすれば此四の大なる恩恵を頂戴する事が出来ます。舊約全書に書いてあるリバイバルの時が、其約束通りに與へられます。廿二節に其を證據立てる爲に舊約全書を引きました。

新しき紀元

神は私共にモーセの如き新しき預言者を與へ給ひました。モーセの爲に新しい紀元が始りました。今主イエスによりて新しい恩恵の紀元が始りました。モーセによりてイスラエル

人の中に、神の御榮光が表はれて、新しく神の光を得ましたやうに、主イエスの來り給ひました事によりて、私共が神の御榮光を拜見し、新しく其聖旨を曉る事が出来る様になりました。然うですら廿三節に於て、主の御言に聽従はぬ者の罪の宣告は恐ろしいものであります。ペテロは唯會衆を忠告する爲でなく、彼等を導く爲に此廿三節の恐ろしい言を申しました。

終りに廿六節に於て、キリストは何の爲に來り給ひましたかならば、咀ふ爲でなく、幸福を得させんが爲に來り給ふた事を申しました。恩恵を以て、先づエルサレムに居る「なんぢら」に福を得させ給ひたうしました。

最後にペテロは一個人に對して、悔改を熱心に勧めました。此廿六節を話しました時に、ペテロの心の中に、其言を聞いた者が皆救はれるといふ信仰があつたと思ひます。私共も福音を宣傳する時に、神を信する信仰を以て參らなければなりません。又其許りてなく、罪人の爲に信じて、今福音を聞く者が皆救はれる事を望む等です。神は説教者の信仰の爲に自由に働き給ふて、罪人を生復らせ給ふ事が出来ます(以西結書卅七〇一—十)。神は此説教をする爲にペテロに聖靈を與へ給ひました。何卒私共も聖靈を頂戴して、此やうにキリストを崇め、このやうに靈の劍を使い、又このやうに愛と熱心を以て罪人に勧めたいものであります。

第十五 猶太人の宗教會議

凡の場合に於ける平和

第四章

聖靈に満されて居る人は、どういふ場合に遇ひましても其心を深くしてキリストを顯はす事を得ます。例へば二章四十一節より四十七節迄のやうな、安らかな家族の中に生涯を暮しますならば、其處で潔き喜ばしき生涯を暮します。或は三章のやうに傳道に出ましても、働の中に罪人の眼の前に明かにキリストを顯はします。或は又此四章のやうに、迫害に遭ひましても、平安を有ち、喜ばしい顔をして勝利を得る事が出来ます。聖靈に満される事は唯禮拜の時の爲め許りてありません、或は説教する時の爲め許りてはありません。平生の時の爲め、又どんな場合の時の爲めでもあります。

議會の答

三章に於てペテロは、熱心にイスラエル全國民に悔改めよと勧めました。イスラエル人は其に對して何と答へましたか。其答に従つて大なる結果が表はれて参ります。彼等の國民的運命は其答の如何によりて決ります。處が此四章の一節から見ますと、有司等は使徒を牢屋に入れて今から主イエスに就て黙つて居るやうに命じました。神はモー一度イスラエル人に恵の機會を與へ給ひましたけれども、イスラエル人は其を斷りました。

消されざる火

【一—三節】
其晩は心配の晩でありましたせう。エルサレムの信者等は多分心配して、一緒に集つて終夜祈禱を務めましたせう。廿四節を見ますと、多分教會が其時祈禱會を開いて居たやうに思はれますが、是は多分使徒等が牢屋に入れられた時から、熱心に續いて祈つたらうと思ひます。是は心配の時でありましたが、神の働は續いて進んで参りました。

【四節】
即ち其説教の爲に五千人が悔改めました。天路歷程の中にかういふ譬話があります。一方に悪人が火を消さうと思ふて、バケツから水を盛んに注いでゐますが、一方に隠れたる處に其面の輝

凡の場合に於ける平和 議會の答 消されざる火

ける御方が油を注いでいますから、いくら水を注ぎましても益々盛んに火が燃上つてゐます。此四節は丁度其と同じであります。

大人物の前に於ける賤しき田舎者

然れども段々戦が劇しくなつて参ります(五節以下)。其戦の一方は教會の有司等、又國の大人物であります、他の一方は賤しい田舎者のみであります。然れども彼等と共に神の力がありました。又神の御臨在がありました。丁度歴代志略下冊二章七、八節の通りです。「汝ら心を強くし且勇め、アツスリヤの王のためにも彼と共に其なる群衆のためにも懼るゝ勿れ慄く勿れ、我らともなる者は彼とともにある者よりも多きぞかし、彼ともなる者は肉の腕なり、然れども我らともなる者は我らの神エホバにして、我らを助け我らに代りて戦ひたまふべし」。是は實にハレルヤです。主が未だ此世に在し給ひました時、弟子等がかういふ迫害に遇はねばならぬ事を預言し給ひました。或は弟子等の心の中に最早聖靈を得たから、又最早神の榮光が我等の中に輝いて居るから、多分今から最早戦に出遇ふ事なく、何時までも靜かに勝利を得られるだらうといふ考があつたかも知れませんが、主が約翰傳十六章二節、又馬可傳十三章九節より十一節迄に預言し給ふた通りであります。然れども其迫害の時にも「人爾曹を曳解さば以前より何を言はんと

慮りまた思煩ふ勿れ、唯爾曹其時賜ふ所の言を曰ふべし、蓋ものいふ者は爾曹に非ず聖靈也」といふ約束があります、今此四章に於て神は其様な御約束を成就し給ひました事を見ます。

禍轉じて福となる

猶太の祭司等の方から見ますれば、之は異端者の審判でありました。然れども神は度々人間の企圖をヒツクリ返し給ひます。神は此折をよい傳道の集會となし給ひました。彼等が死ぬるか生るかといふ此裁判の時を變へて、福音宣傳の時となし給ひました。神は此有司等や祭司等を集め給ふて、其前にガリラヤの海の漁夫を立たせ、ペテロを以て福音を宣傳へさせ給ひました。今迄ペテロはエルサレムで人民に説教しましたが、かういふ集會の前に説教した事はありませんでした。今神はペテロの説教を聞かせる爲に、エルサレムに於ける一番貴い者を集め給ひました。

又其許りてなく、神は此裁判を美しい聖別會とならしめ給ひました。ペテロは其處で新しく聖靈に滿される事を得ました。是は實に美しい事ではありませんか。又其爲に三十一節を見ますれば、弟子等は皆新しく聖靈に滿される事を得ました。然うですから神は人間の怒をヒツクリ返して御自分の榮光とならしめ給ひます。

不信仰の誓

【五一七節】

必ずかういふ大人物等が一緒に集まつて心を合せますなれば、自分の思ふ所をなす事が出来ると思つたてせう。使徒等即ち賤しい田舎者を其中に立たせて、「問けるは爾曹何の權また何の名に由て之を行ひしや」。是は馬鹿らしい問です。跋へたる者が癒され、善行が行はれたのに、此馬鹿らしい人々許りが此事に反對して此事を尋ねました。然れども神に反對する人は誓てあります。其時神の働が明かてありましたのに、世に屬ける人々は其を見る事が出来ませなんだ。其中に神の美はしい救の力が働いて居りまして、神の聖國が近づいて居る事が明らかでありますが、誓たる者は其を見る事が出来ません。耶利米亞記十七章五、六節「エホバかく曰給ふ、凡そ人を恃み肉を其臂とし、心にエホバを離るゝ人は詛はるべし。彼は荒野に棄られたる者の如くならん、彼は善事の來るをみず」。今此四章に於て猶太の有司等は、善事の來るを見ません。私共も是によりて教へらるゝ筈です。私共も度々誓になつて善事の來るを見ない様な事はありませんでせうか。

説教の題目と證人

【八一十二節】

ペテロは唯其處に立つて居る者許りてなく、イスラエルの民皆に是を宣傳へました。「爾曹とイスラエルの民も皆知べし」。又何を宣傳へましたかならば、主イエス・キリスト即ち十字架に釘られし主イエス・キリスト、又甦り給ひました主イエス・キリスト、又今生きて働いて在す主イエスを宣傳へました。有司等は全く神の御子を捨てたうまいました。然れどもペテロは主が今も猶ほ其國の中に生て在し、又働きてお出でなざる事を宣傳へます。

又其證據は何てすかならば、第一に「此人」(十節)即ち癒されし跛は第一の證據であります。

第二の證據は聖書です(十一節)。此處に聖書を引て其を證據立てました。三章廿二節には申命記から聖書を引て主イエスを證據立てましたが、今詩篇から聖書を引て主イエスを宣傳へます。又其説教の終に格別に此事を以て彼等の心を刺します(十二節)。此處に彼等の爲にも唯一の救の望があります。

頑固なるサンヒドリム

【十三一廿二節】

此サンヒドリム即ち猶太人の宗教會議の人々は三度格別に神の聲を聞きませんでした。第一は馬太傳

不信仰の誓

説教の題目と證人

頑固なるサンヒドリム

廿六章五十七節及び六十四節に、神の御子主イエスの證を聞きました。此長老等の集會は、唯二ヶ月以前でありますから、使徒行傳四章の人々と同じ人てあります。此人々が主イエスの證を聞きました。さうですから神は此時第一の聖聲を聞かじめ給ひました。

第二は馬太傳廿八章十一、十二節に兵卒の證を聞きました。此長老等が兵卒の證、即ち信じない人々の明らかなる證を聞きました。

今三度目に此使徒行傳四章に、惹かれし跋によりて主の甦りの力の明らかなる證を聞きました。然れども悔改めません。神は色々の事を以て此人々に勧め給ひましたけれ共、悔改めません。阿摩士書四章にある言は丁度此人々の事です。六節の終に「然るに汝らに我に歸らずとエホバ言たまふ」。又其八節の終に「然るに汝らに我に歸らずとエホバ言たまふ」。九節の終に「然るに汝らに我に歸らずとエホバ言たまふ」。十節の終に「然るも汝らに我に歸らずとエホバ言たまふ」。十一節の終に「然るも汝らに我に歸らずとエホバ言たまふ」。十二節「イスラエルよ然ば我かく汝に行はん、我是を汝に行ふべければイスラエルよ汝の神に會ふ準備をせよ」。

此人々は今此證據に反對する事が出来ません。十四節の終に「駭すべき言なかりき」。又十六節の終に「われら之を言滅こと能はず」。何も答へる事が出来ません。然れども悔改めません。是によりて私共は、人間の心の頑固な事を見ます。神は明らかな光を與へ給ひました。明らか

な力ある證據を與へ給ひました。此人等は自分は其を言消す事が出来ぬと申しました。然れ共其を受入れて悔改むる事を致しませなんだ。却て十八節「遂に彼等を召て更にイエスの名に就て語るに、教ふるを爲す勿れと戒む」。是は何時でも世が私共に戒むる處であります。罪人は何時でも此様に命じます。然れども十九節を御覽なさい。聖靈に満された人は其に譲る事が出来ません。「ペテロ、ヨハネ彼等に答て曰けるは神に聴くよりも愈りて爾曹に聴は神の前に在て義たらんか爾曹自ら之を判よ」。此二人は人間に限られる事を許しません。加拉太書一章十節「若われ人の心を得んとを求はキリストの僕に非ざるべし」。此二人はキリストの僕の心を以て居りましたから、人間に限られませなんだ。十三節のやうに「忌憚る處なく」英譯は大膽に福音を宣傳へます。私共もかういふ大膽を得なければなりません。ペンテコステの聖靈を得ますれば、かういふ自由を得ます。戦の力を得ます。勝利を頂戴致します。耶利米亞記一章十八節十九節「視よわれ今日この全國とユダの王と、その牧伯と其祭司と其地の民の前に汝を堅き城、鐵の柱、銅の牆となせり。彼等なんぢと戦はんとするも汝に勝たざるべし、そはわれ汝とともにおいて汝を救ふべければなりとエホバいひたまへり」。是は幸てはありませんか。是は聖靈のバプテスマの能力であります。

第十六 震動ける祈禱會

迫害の四の幸福なる結果

【廿三、廿四節】
 迫害によりて四の幸福なる結果がありました。第一は祈禱の精神です。神に近づきたらうまいました。第二は新しい聖靈のバプテスマです。第三は愛の一致。第四は傳道の成功であります。此四の幸福なる結果がありますれば迫害は恐ろしいものでありません。又此結果によりて神は凡てを統治め給ふ事が明らかに解ります。人間は此世に属ける力を以て、全く傳道を消したうまいますけれども、却て其怒によつて神は尙々能力と祝福を加へ給へます。

信者の會の空氣

『彼等釋されて其友の所にゆき』。是は美はしうまいましたせう。今迄猶太人の宗教會議の空氣を吸つて居ましたが、今基督信者の中に全く違つた空氣を吸ふ事を得ました。愛の空氣、感謝祈禱の空氣、かういふ美はしい事を經驗しました。多分是は祈禱會の半ばでありました。祈禱會は

造主なる神の力

感謝會に變りました。今迄使徒等が此世に属ける有司等の前に立つて居りましたが、今其人々の前を去りて天地の王の御前に跪いて祈りました。其時詩篇四十六篇を歌ふ事は適當でありましたせう。『神はわれらの避所また力、なやめる時の最近き助』であるを經驗しました。又其三節の如く人々は『なりとゆるきて』騒ぎましたけれ共、其時にも靜かに流れて居る神の喜樂と平安の『河あり』と經驗しました。然うてすから今十節の通りに、神の神たる事を知る事を得ました。

彼等は神の力を握つて祈る事を始めました。神の聖名に依頼みて祈りました。格別に此廿四節に神の御名前を見ます。『主よ汝は天と地と海と其中の萬物を造り給ひし神也』。此造主に近く事を得ました。萬物を造り、萬物を支配し、萬物の上に力を有つて居給ふ神を拜しました。私共は幾分か其信仰を失つたと思ひます。私共は私共を贖つて下さつた神を信じます。又私共を潔め、又私共を祝福し給ふ神を信じます。然れども割合に、天地萬物を造り給ふた造主なる神を信する信仰が薄らうまいです。然れども造主なる神を仰ぎますれば、信仰が強められます。詩篇百廿一篇一、二節『われ山に向ひて目をあぐ、わが扶助はいづこより來るや。わがたすけは天地を造りたまへるエホバより來る』。造主なる神は必ず此小さい者を守り又助け給ひます。又詩篇百四

迫害の四の幸福なる結果

信者の會の空氣

造主なる神の力

十六篇六節より御覽なさい。六節に「あめつちと海と其中なるあらゆるものを造り、とこしへに眞實をまもり」。かういふ能力を有つて居給ひますから、必ず七、八、九節の恩恵を與へ給ひます。其靈的意味を考へて之を讀みますれば、大に信仰の助となります。是は天地萬物を造り給ふた神の恩恵であります。

又以賽亞書四十二章五節六節「天をつくりて之をのべ、地と其うへの産物とをひらき、其上の民に息を與へ、その中を歩むものに靈を與へたまふ神エホバかく曰たまふ、云くわれエホバ公義を以てなんぢを召したり、われ汝の手をとり汝を守り、なんぢを民の契約とし異邦人のひかりとなし」。私共は祈禱を以て、神が造主たる神であると認める事を求めなければなりません。主イエスキリストも、かういふ名を以て神に祈り給ひました。馬太傳十一章廿五節「其時」。是は矢張り人々が頑固にして聖言を聞かんだ時でありました。「其時イエス答て曰けるは天地の主なる父よ」私共この言を味ひまして、強き信仰を以て神の御能力を待望みたく願ひます。

ペテロは今造主なる神に自分を委ねました。後に彼が信者に書翰を送りました時に、矢張り同じ事を勧めました。「是故に神の旨に循ひて苦に遇ふものは、善を行ひて其靈魂を信すべき造物者に託すべし」(彼前四〇十九)。

戦争に於ける大膽

【廿五—廿八節】

弟子等は此處で舊約全書の言を借りて祈りました。其に依頼して祈りました。今神は詩篇二篇の通りに働き給ふ事を信じました。又今は戦争の時であると深く感じました。私共も其を深く感じなければなりません。一方に於て神及びキリストが在し給ひます。他の一方には此世につける人々が、此世に属ける能力を以て戦ひます。此詩篇二篇は戦の時の詩でありますが、此詩篇によりて神は人間の力と人間の迫害を嘲り笑ひ給ひます。神は未だ何もなし給はず、未だ御力を表はし給ひません時にも、天の位に坐して笑つて居給ひました。此神と共に働く者は、神と共に信じて迫害の時にも笑ふ事が出来ます。其信仰の原因は何でありますといふに、六節に神は其王たる主イエスを立て給ひましたから、必ず神は御自分が立て給ふた王の敵を滅し給ひます。又必ず此八節のやうに、主イエスの國が廣められまして、地の極に迄及びます。弟子等は此詩篇二篇を信じて、今迫害が無くなる事を願はず、大膽に戦に出る事が出来るやうに願ひました。又巧みに聖靈の劔を用ふる事が出来るやうに願ひました(卅節)。以弗所書六章十九節に於て、戦の時憚らずして福音の奧義を大膽に傳へる事が必要である事を見ます。腓立比書一章廿節にも「臆せず」と

戦争に於ける大膽

あります(英譯は以上三の引照共大膽)。私共もかういふ大膽を願はねばなりません。

震動かし給ふ神の能力

【廿九—三十一節】

弟子等は自分の利益、又は自分の幸福、又は自分の安逸を全く捨てまして、唯神の榮光の表はれる事を願ひました。神は必ずかういふ祈禱に答へ給ひます。今神は御自分が全地の王である事を示して、其集れる處を震ひ動かさしめ給ひました。是は造主に適ふ祈禱の答であります。詩篇百十四篇一節より七節迄を御覽なさい。神は今集會を震動かしめ給ひました事によりて、此様に必ず聖前に凡ての物が震ひ動く事、又必ず反對者が退く事を示し給ひました。詩篇九十七篇四節にも『エホバのいなびかりは世界をてらす、地これを見てふるへり』とあります。今神は弟子等にも『御自分は詩篇九十七篇の神で、其様な榮光と能力とを有つて居給ふ事を示し給ひます。又哈基書二章六、七節をも御覽なさい。』萬軍のエホバかくいひ給ふ、いま一度暫くありてわれ天と地と海と陸とを震動はん、又われ萬國を震動はん、また萬國の願ふ所のもの來らん。即ちキリストと、キリストの國が參ります。神はまた其を成就し給ひませんけれども、必ず未來に於ても其通りに全地を震動かしめ給ひます。今祈禱の時に、其集れる處を震動かし給ひました事によりて、御自

分が未來の審判主である神たる事を示し給ひます。未來に於て凡の人の心を恐れしめ給ふ神が、其祈禱を聞き給ふ事を、明らかに示します。又以賽亞書六十四章一節二節を御覽なさい。『願はくはなんぢ天を裂てくだり給へ、なんぢのみまへに山は震ひ動かんことを、火の柴をもやし火の水を沸すがごとくして降りたまへ、かくて名をなんぢの敵にあらはし、もろくの國をなんぢのみまへに戰慄かしめ給へ。』神は此時の祈禱の答によりて、御自分が其敵に名を表はす事が出来る事を示し給ひました。私共は私共の周圍にある人々の心が、動かされるやうに願ひますなれば、此能力ある神に祈らなければなりません。詩篇十八篇を御覽なさい。此篇は實に美しい祈禱に就て教を見ますが、其四節五節を御覽なさい。『死のつな我をめぐり、惡のみなきる流われを恐れしめたり、陰間の繩我をかこみ、死のわな我にたちひかへり。』是は思難に居る者の祈禱でありますが、六節を見ますれば、神は其様な人の祈禱を聞き、七節に於て其祈禱に答へんが爲に、御自分の力を延ばし、天地を動かさしめ給ひます。『われ窮苦のうちにありてエホバを呼び又わが神にさけびたり、エホバはその宮よりわが聲をきゝたまふ、その前にてわがよびし聲はその耳にいれり、このときエホバ怒りたまひたれば地はふるひ動き、山の基はゆるぎうごきたり(六、七)。此祈禱者は未だ其を見ませなんだけ共、遂に十六、十七節に於て其祈禱の答を経験しました。』エホバは高きより手をのべ我をとりて大水よりひきあげ、わがつよき仇とわれを憎むものより我を助

震動かし給ふ神の能力

「けいだしたまへり」。私共は信仰の祈禱を献げる時に、見えぬ處に於て天地が動かされるかも知れませんが。私共の祈禱が答へられ、此地上に於て其驚くべき結果が表はれる前に、先づ見えざる世界即ち天に於て、驚くべき變動が起る事を、此詩篇に於て見ます。私共は是を認めて置かねばなりません。

人の心を動かす三の方法

私共の祈禱會の時にも、此弟子等の祈禱會の時の様に神の榮光が表はれる筈であります。此處では祈禱によりて震ひ動きます。使徒行傳十六章廿五、廿六節を見ますれば、感謝によりて震ひ動きます。又以西結書卅七章七節では、説教によりて震ひ動きます。此三つの方法によりて、人の心を動かしてリバイバルを起す筈であります。

燃立つ焔の如き愛

此弟子等は迫害せられましても、心の中に燃立つ焔のやうな熱心を有つて居りました。又其許りでなく、卅二節を見ますれば、人間に對しても燃立つ焔のやうな愛を有つて居りました。神に對しても消すべからざる熱心と愛を有ち、又人に對しても消すべからざる愛を有つて居りました。

然うてすから三十三節のやうに、大なる力を有つて居りました。又同じ節に大なる恩恵を蒙りました。又其爲に五章十一節に人々に大なる恐が起りました。今使徒行傳に由りて、聖靈に満されし者が能力ある事を學びました。此處で聖靈に満された者は、能力ある祈禱を献げる事を學びました。どうぞ祈禱によりて震ひ動かす力を得る爲に、聖靈を御求めなす。

ペンテコステの祈禱會の順序

此四章の終に、ペンテコステの祈禱會の記事があります。今概略ペンテコステの祈禱會の順序に就て見たらういたします。第一、心を合せる事(廿四節)。第二、神の存在と其御方に依り頼む事(同節、又希伯來書十一章六節を参照)。第三、聖書の言を引く事(廿五節)。第四、此戰が自分のものでなく、神の戰であるとする事(廿六節)。第五、神は其企て給ひし事を必ず成就し給ふと信ずる事(廿八節「預じめ定め」)。第六、明かなる證をする爲に大膽を願ふ事(卅三節)。第七、神はイエスの名に榮光を歸し給ふ事を願ふ事(同節)。神はかういふ祈禱會に、必ず新しきペンテコステを與へ給ひます。

神の道

【卅一節】

『神の道』 舊約全書に於ても、新約全書に於ても、度々此言を讀みます。福音は神の道であります。然うてすから嚴肅に其を宣傳へなければなりません。其を宣傳へますれば、必ず以弗所書六章十七節のやうに、聖言は劔となります。『聖靈の劔、即ち神の道を取り』。又是には生命がありますから必ず路加傳八章十一節の通りに果を結びます。『種は神の道なり』。然うてすから、私共が説教する事は、聖靈の劔を使ふ事です。又他方より見れば、生る種を播く事であります。使徒行傳に於て神の道に就て書いてある處を御覽なさい。六〇二、七、八〇十四、一一〇一、二〇廿四、一三〇五、七、四十四、四十六、一七〇十三、一九〇廿(原語では是も神の道です)。

第十七 アナニアの死

内部の敵

第五章

四章に於て外からの敵の勢を見ます。又聖靈がさういふ敵に反對し給ふ事を見ます。五章に於ては内部に敵ある事、及び如何して聖靈が教會を其敵より救出し給ふかを讀みます。教會が潔くありますれば、外部から来る敵は決して教會を亡しませぬ。然れ共内部の敵は教會を亡す事を得ます。

四章の終迄段々、聖靈が教會の中に在し給ふ事を示し給ひました。其が明かに示されますなれば、信者の中に罪を赦して置く事が出来ません。明かに御自分が教會を統治め給ふ事を示し給ひますから、信者は恐れて惡を去る筈です。使徒行傳五章に於て、教會の潔めに就て學びます。

聖靈の燃立つ火

聖靈は燃立つ火であります。四章に於て其は愛と惠の火でありました。五章の始に於て其は審判の火であります。聖靈が教會の中に宿り給ひますなれば、唯潔主て在す許りてなく、又審判主ともなり給ひます。約翰傳五章廿一、廿二節を見ますと、それは父の死し者を甦らせて生しむる如く子も己の意に従ひて人を生しむべし、それ父は誰をも鞫かず審判は凡て子に委ねたり。此處で主イエスは生命を與へ、又審判を與ふる權威を有つて居給ふ事を見ます。聖靈は恩恵と生命とを與へ給ひますが、其と同時に審判をも行ひ給ひます。此二の事は何時まで一緒であります。

教會の中に宿り給ふ聖靈

使徒行傳に於て三度、明かに聖靈が教會の中に宿り給ふ事を讀みます。三の確實な例があります。第一、五章九節。此處で聖靈は教會の中に在し給ひまして、審判を行ひ給ひます。第二、十章二節。聖靈は教會の中に在し給ひまして、或信者を選びて、格別に命ぜられし傳道に遣はし給ひます。第三、十五章廿八節。聖靈は教會の中に在し給ひましたから、エルサレムの議會の時、教會を導きて神の聖旨に適ふやうに、眞理を悟らせ給ひます。今の教會の有様を見ますれば、一個人として聖靈のバプテスマと、聖靈の能力を受入れる者がありますが、教會全體として聖靈の能力を受入れません。私共は唯一個人としての爲め許りてなく、教會全體の爲に、聖靈の能力と、聖靈が宿り給ふ事、及び聖靈が支配し給ふ事を求むる筈です。

教會として聖靈を受入れますなれば、必ず聖靈が審判を行ひ給ふ時であります。使徒行傳に於て四度、聖靈の審判が記されてあります。第一、五章に於てアナニアに死を與へ給ひました。第二、八章廿一節に、シモンに譴責を與へ給ひました。第三、十二章廿三節に、ヘロデに死を與へ給ひました。第四、十三章十節に、エルマスを旨とならしめ給ひました。私共は聖靈を頂戴しますれば、其やうに恐れて、惡より遠く離れなければなりません。希伯來書十二章廿八節廿九節

に「是故に我儕震はれざる國を得たれば恩に感じて度み敬ひ、神の意旨に合ふ所をもて之に事ふべし、夫われらの神は燬盡す火なり」とあります。或信者は唯神は愛に富み給ふ神であると受入れます。併し私共は其と同時に、神は燬盡す火であると信じなければなりません。

眞似の献身

【二十節】

「然るに」。是は恐ろしい言葉であります。今迄信者は勝を得、衣を深く守りて、神の聖前に生涯を暮しました。丁度雅歌六章四節の通りでありました。「わが佳耦よ、汝は美はしきことテルサの如く、華やかなることエルサレムのごとく、畏るべきこと旗をあげたる軍旅のごとし」。教會は今迄此様に美はしい、又此様に華やかな教會でありました。然うてすから恐るべき兵卒のやうな教會でありました。「然るに」今罪が這入りました。而して若し聖靈が守り給ひませなんだならば、教會の其美はしさと恐るべき有様を滅ぼすやうに至りました。

「然るに」。是は創世記三章一節のやうであります。神が美はしき、深きエデンの花園を作り給ひました時に、蛇が靜かに其處に這入りました。又是は約書亞記七章一節のやうであります(日本譯に「時に」とあるは英譯にては「然るに」とあります)。其時迄イスラエル人は勝を得て、カナンの

地に入りて、其地を占領する事を得ました。外部からの敵を何時でも亡ぼす事を得ました。然れ共今尙々恐ろしい敵が起つて参りました。其は内部の敵であります。即ちアカンが神の屬を取りました。エリコの分捕物は皆神の屬でありましたが、アカンは幾分か其を取つて自分の屬と致しました。神の物を盗みました(馬拉基書三章八節を御覽なさい)。今此アナニアの罪も是と同じ事であります。其持物を神に献げる真似をして、幾分を自分の爲に取りましたから、神の物を盗んだ事であります。アナニアは其持物を皆賣つて神に献げませんでしたもよいのです。四節を御覽なさい。『地所未だ售らざる時は爾の有ならずや、已に售りたりとも亦爾の權に屬するならずや』。然うてすから、忠實なる献身の心を以て其を續いて有つて居つて差支なかつたのであります。然れ共其を神に献げる真似をしまして、神に虚言を吐き、恐ろしい罪を犯しました。今でも度々聖別會の時に、かういふ罪があります。身も魂も全く献げると申しましても、幾分か自分の屬として未だ其を有つて居ります。是は献身の真似をしたのです。

是は又ナダブとアビウの罪と同じ罪であります。利未記十章一節二節を御覽なさい。『茲にアロンの子等なるナダブとアビウともに其火盤をとりて火を之にいれ、香を其上に盛りて異火をエホバの前に献げたり、是はエホバの命じ給ひし者にあらざりしかば、火エホバより出て、彼等を燬滅ぼせり、すなはち彼等はエホバの前に死うせぬ』。此二人はエホバが在す事を恐れずして、エホ

バの聖前に自分が造つた火を献げました。丁度其様にアナニアは、聖靈の恐ろしい聖潔を感ぜずして、神の聖前に自分の心に從つて、肉に屬ける献身を致しました。神の潔き火に由らずして、自分の心の儘に從つて犠牲を致しました。是は異火です。

サタンの真似

是はサタンの働であります。四章の卅六節卅七節を見ますと、聖靈に感したる献身を見ます。是は眞の献身であります。併し眞の物がありますと、サタンは何時でも其真似を致します。サタンは又私共の心の中に、熱心な信者を真似したい心を起して、偽善とならしめます。ヨセフが其持物を献げましたから(四〇卅六、卅七)、アナニアは其を真似しました。信者の目の前に、自分熱心家であると表はしたういしました。アナニアは道徳に逆ふ罪を犯しませんでした。却て教會を助け、貧乏人に金を施し、博愛の心を示しました。其やうに多の金を寄附しましたから、是は聖靈の働ではないてせうか。否是はサタンの働でありました。三節にペテロは辨へる處の目を有つてゐましたから、此献身を辨へる事を得ました。此多くの寄附金は聖靈の御働でなくて、サタンの働によつて行つた事です。斯んな罪の爲に死ぬる事は正しい報であります。例へん俄かに其報を受ける事がありませんでも、其様な罪は矢張神の前に死を受くべき罪であります。以西結

書卅九章七節『我々が聖き名をわが民イスラエルの中に知らしめ重ねて我聖き名を汚さしめじ、國々の民即ち我がエホバにしてイスラエルにありて聖者なることを知るにいたらん』。神は私共にも其を悟らせ給ひたうムいます。

聖靈の審判の美しき結果

【十一—十六節】

聖靈は斯様に教會を守り、教會を潔め給ひます。其爲に直ぐに美はしい七の結果が出ます。第一は大なる恐がありました(十一節)『全會の者とこれを聞ける者ども皆大に懼る』。第二、神の著しい御力が表はれました(十二節)『多の休徴と奇なる跡は使徒等の手に由て民の間に行はれたり』。第三、一致和合がありました(十二節の終)『又かれら皆心を合せてソロモンの廊に在る』。第四、二心を以て道を求むる者は退き、斯ういふ潔き教會に入る事を恐れしました(十三節)『餘の者は敢て之に近づかず』。第五、主イエスの御名が其によりて崇められました(十三節の終)『尊み』。第六、多の者が救はれました(十四節)『男女とも信する者益々多く主に屬きぬ』。第七、著しい御力が表はれました(十五、十六節)『即ちエルサレムの周圍の諸邑より病る者および惡鬼に難されたる者を携へてエルサレムに來り』ました。其によりて傳道の能力を感じます。而し

て是等の者が皆癒されました。其癒されました者が多分主イエスを信じ、其信仰を以て自分の村に歸りまして、主の爲に生涯を送りましたてせう。

聖靈の審判を求めよ

然うてすから聖靈が其恐ろしい審判の御力を示し給ひますれば、是は却て幸てあります。又は傳道の爲によい事てあります。私共は度々心の中に聖靈の能力と聖靈の喜悅を求めますが、どうぞ其と同時に自分の心の中に聖靈の審判をも求めたうムいます。度々聖靈のリバイバルを求めますが、どうぞ其と同時に、教會の中に聖靈の恐ろしい審判の表はれるやうに祈りたうムいます。私共は自分の事を考へますれば、又人の事を考へますれば、淺い心を以て唯聖靈によつて幸福を求めます。然れ共私共が眞正に神に同情を表して、神と心を合せて祈りますれば、或時には熱心に聖靈の審判を求めます。私共自身は祈るべき處を知りませんが、聖靈の感化を求めますれば、或時には聖靈が自ら言難き歎を以て、私共をして其を祈らしめ給ひます。どうぞ其やうに苦んで神の審判を求めて祈りたいものです。

第十八 祭司と使徒との戦

教會の打撃

【十六、十七節】

然うてすから福音が諸方から人々を引付けました。又諸分から参りました人々は、福音によりて新しい恵と新しい喜とを得ました。然うてすから誰でもかういふ働を喜んだかと申しますと、然うてはありませなんだ。十七節の人々は其に反對しました。其によりて悪魔の力を知る事を得ます。「然るに祭司の長及び彼と同一にある者、即ちサドカイ宗の徒みな起て大に憤り」。イスラエル人に斯ういふ恵の兆を興へられましたから、大に喜ぶ筈でありますのに、心の中に悪魔の暗黒がありましたから、大に憤りました。

【十八、十九節】

「使徒等を執へて獄に置り」。四章の始には唯使徒二人丈けを捕へました。今使徒等十二人皆を捕へて獄に入れました。是は此小い教會に取つて、大なる打撃ではないてせうか。併し十九節に於て神は教會と使徒等と共に働き給ふ事を明瞭に示し給ひます。「然れども」、是は大切な言であ

ります。祭司の長等は斯様に迫害しましたが、「然れ共」神は其御力を伸し給ひました。「然れ共」主の使者夜獄の門を啓き彼等を携へ出して曰けるは「(十九節)。然てすから、天使は使徒等の味方となりました。神は御自分を使徒等の友であると表はし給ひました。此使徒等は今迄ヒドイ迫害に遇ふて働きましたから、又國の有司や祭司の長に反對せねばならぬ場合になりましたから、彼等の心の中に幾分か疑や恐が起つたかも知れませんが、四章廿節に「われら見しところ聞し所のものは言ざるを得ざる也」と申しまして、有司等に反對して、其命令に従ひませなんだ。然れ共舊約全書には何時でも、有司人に従へと書いてありますから、幾分心の中に心配が起つたかも知れませんが、バプテスマのヨハネでも、大膽に主イエスを宣傳へましたけれ共、或時心の中に心配と疑が起りました。然うてすから此弟子等も幾分か心配が起つたかも知れませんが、其爲に今神は明らかに此弟子等を助け給ひます。此弟子等の行は、御自分の旨に適ふて居る事を、明らかに示し給ひます。其爲に天使は門を開きました。

此サドカイ人はどういふ人であつたかと申しますと、天使を信じない者でありました。然れ共唯今天使の手によりて、其敵が助けられました。サドカイ人は又魔を信じません。又靈を信じません。然れ共此章の卅一節卅二節を見ますと、魔につき、又聖靈に就て明らかなる證を聞かねばなりませなんだ。神は天使の行により、又ペテロの證によりて、サドカイ人の説に

天使の働

使徒行傳てよく天使の働を讀みます。又何時ても其働によつて福音が尙々廣く宣傳せられました。其一つは此五章十九節で、天使は獄の門を開きて使徒等を救出しました。次に八章廿六節には、天使はピリポを導きてエテオピヤ人を導かせました。又十章三節に於ては、天使はコルネリオを導きて福音の爲に其家を開かせました。十二章八節では天使はペテロを牢屋から導き出しました。又同じ章の廿三節では天使は大なる迫害者を殺しました。廿七章廿三節では天使はパウロを勵ました。斯様に天使は度々福音を助け、傳道者を導きました。又傳道者と共に働きて、反對者に反對しました。今でも必ず天使は忠實なる傳道者と共に働き、又傳道の門戸を開きます。羅馬教では天使を拜みますが、是は大なる罪で、神の聖榮光を汚す事でありますが、其爲に新教の多くの信者は反動して、大概の者が天使の働を重んじません。併し私共はどうぞ聖書に教へられましたやうに、天使は私共と共に働く事、又私共の爲に働く事を信じて、慰を得たいものであります。

權威者の無能力

【十九、廿節】
是は天使の命令でありました。路傍説教せよといふ命令であります。又唯靜かな處でなく、エルサレムの真中の要の所に立て、此生命の言を語れと命じました。「殿に立ち」。其前の日に彼等を牢屋に入れました有司等が權威を振ふて居る處に、大膽に立てイエスを宣傳へよ、是が神の命令であります。エレミヤが同じ命令を受けた事があります。耶利米亞記七章二節「汝エホバの室の門にたち、其處にてこの言を宣べて言へ」。

【廿一節】

「かれら之をき、味爽より殿に入りて教ふ」。此使徒等は走り行いて神の命に従ひました。必ず有司等が再彼等を捕へると思ふて、味爽より殿に入りて福音を宣傳へました。「祭司の長および同人も來りて議員及びイスラエルの子孫の長老等を悉く召集めて彼等を曳來らせんが爲に下吏を獄に遣せり」。是は實に面白ういふ事です。此人々が皆集りまして、賤しい使徒等を罰したういふ事です。此人々は神を忘れました。又神が此人等と共に在す事を知りませなんだ。然うですから神は此人々を愚かなる者とし給ひました。

天使の働 權威者の無能力

エルサレムのリバイバルの秘密

【廿二—廿八節】

然うてすから此人々は、必ず自分の力また人間の力にて牢屋から出たのではありません。必ず是は奇跡であると認めたとに相違ありません。『其教をエルサレムに滿せ』(廿八節)。其都によく福音を宣傳へました。其結果は六章七節を御覽なさい。『神の道いよく傳播て弟子等の數エルサレムに甚だしく増り』。此弟子等は大胆に其教をエルサレムに滿しましたから、其様に多の人が救はれました。私共は時々熱心にリバイバルを願ひます。其やうに重荷を負ふてリバイバルを祈る事は餘程必要であります。其様な祈禱がありませんならば、必ず聖靈が働き給ふ事がありません。然れ共六章七節のやうな、リバイバルが起るやうに願ひますれば、五章廿八節のやうに、迫害を構はずして其教をエルサレムに滿しめなければなりません。其様に大胆に福音を宣傳へますれば、神は聖靈の力を加へ給ひまして、其様に多の罪人を救ひ給ひます。

ペテロ事實を認はす

【廿九—三十二節】

廿九節よりペテロの答があります。其答の意味は斯うてあります。祭司の長は神に反對しました。神はイエスを送り給ひましたのに、祭司の長は神の使たるイエスを殺し、又彼を木に懸けました。之は一番恐ろしい、又一番賤むべき、又一番惡むべき死刑でありました。祭司の長は斯様に神の使を取扱ひ、ユダヤ人は其様にしてキリストを賤めました。然れ共神は此キリストに榮光と凡の權威を與へて、イエスを君とし給ひました。其は何の爲でありますかならば、其イエスエル人を亡ぼす爲ではなく、却て彼等を救はんが爲でありました。神はイスラエル人に此三の最も美しい恵を與へ給ひたうムいます。即ち卅一節の終にあるやうに、第一に悔改、第二に罪の赦免、第三に卅二節の終にあるやうに、聖靈を與へ給ひたうムいます。其によりてペテロは神の大きな恩恵を示しました。イスラエル人は其やうにヒドイ罪を犯しましたけれ共、神は尚々愛を示し、恵を與へ給ひたうムいます。ペテロは此處で主イエスの十字架をも、又主の甦りをも、主の昇天をも、又聖靈の降臨をも宣傳へました。此使徒等は何時でも此大なる事實を宣傳へ、又其によりて救と恵とを論じました。

最もよき事

ペテロは唯今其嚴かなる使命を認めまして、祭司の長の前に立つて居ります。此祭司の長は格

エルサレムのリバイバルの秘密

ペテロ事實を認はす

一三九

別に神を知り、又神の言を有つて居る筈です。又格別に神の民を教へる筈の者でありました。然れ共ペテロは明らかに、其人は神の光を得て居ないのを見まして、自分が神の證人である事を知りました。格別に此處で、卅二節に父なる神の事、卅三節に子なる神の事、卅四節に聖靈なる神の事を宣傳へて、父と子と聖靈が自分と共に働き給ふ事を認めました。哥林多前書三章九節に「我々は神と共に働く者なり」とありますが、此時にペテロは格別に是を求めて、是に由りて大膽を得ました。ウエズレーが臨終の時に、其寢床の周圍にある人々を忠實に大膽に神の爲に働くやうに、色々話し勵ました後最後に、神が我等と共に在る事は最もよい事であると申しました。私共の心の中に、聖靈によりて其を認めますならば、如何いふ迫害に遇ひましても、力を以て福音を宣傳ふる事を得ます。オ一神は私共と共に在して働き給ひます。然うてすから卅九節のやうに神に従はなければなりません。卅二節に神に従ひませんならば、聖靈の力を經驗する事が出来ないといふ事があります。私共は斷えず聖靈の力を經驗する爲に、真心から一歩一歩神の聖言に従はねばなりません。服従によりてのみ聖靈の能力を何時でも有つて居られます。

普通の方法によれる助

【三十三—四十節】

ペテロは此話をしました時に、必ず聖靈の力を以て話したに相違ありません。又必ず此言は人の心を刺したに相違ありません。然れ共此有司等は心が頑固でありましたから、少しも神の力を感ぜません。少しも聖靈の火又聖靈の愛又神の恵を感じません。「かの人々之を聞いて甚しく怒を含み彼等を殺さんと謀る」(卅三節)。此人々は一年前に主を殺しましたから、今使徒等を殺す事は易い事でありました。「彼等を」即ち使徒等皆を殺さんと謀りました。然うてすから使徒等は生命を賭けて福音を宣傳へたのです。

今神はどうして此使徒等を助け給ひますか。神は或時は使徒等を助ける爲に、十九節のやうに天より天使を遣はし給ひました。然れ共今は然うし給ひません。今は普通の人を以て、普通の事柄を以て、即ち以前のやうに奇跡に由らずして、使徒等を助け給ひました。ガマリエルはパウロの教師でありました。又幾分か福音に同情した者でありました。卅九節を讀みますれば、心の中に或は此福音は神の福音であるかも知れぬといふ考があつたかも知れません。此人は心の正直な人でありまして、ペテロの話によりて感じましたから、議會に於て彼等の爲に辯護しました。祭司の長等はガマリエルの勸に從ひまして、使徒等を釋しましたが、釋す前に彼等を鞭ちました。是はヒドイ刑罰であります。

苦よりの喜悅

【四十一節】

主イエスが十字架に釘られ給ふ時に、ペテロは苦を恐れて主イエスを知らずと申しました。然れ共唯今同じペテロが、イエスの名の爲に辱を受るに足る者とせられし事を喜ぶ事を得ました。聖靈の感化によりて苦をも喜ぶ事が出来るやうになりました。神は罪を轉じて福とならしめ給ひます。又其爲に此使徒等は大きな喜悅を得ました。後にペテロは迫害に遇ふ信者に手紙を送りました時、彼得前書四章十二、十三、十六節の様な勸を致しました。「愛する者よ爾曹を試むる火の如き苦を非常事の如くして爾曹異とする勿れ、却てキリストの苦に與るを以て歡樂とすべし然ば其榮の顯はれん時また爾曹喜び躍らん、若くクリスチアンたるに因て苦に遇はば羞づること勿れ却て之に緣て神を崇むべし」。ペテロは自分の經驗によりて、かういふ勸を致しました。人間の眼から見ますれば、使徒等は賤しめらるべき者でありました。又其爲に頑固なる人々は其福音を眞實でないと思ふたに相違ありません。然れ共苦の中にも喜を得ましたから、賤しめられました者でも、神の御榮を表はしました。パウロは後からコリント人の信者に向つて愛を以て忠告しました。哥林多前書四章八節「爾曹既に飽き、爾曹既に富めり、爾曹我と倍ならずして王たり、我實

に爾曹が王たらん事を願ふ、蓋我も爾曹と倍に王たらんが爲なり」。此信者等は十字架を負ふ事を好みません。世の中の名譽を求め、榮を求めましたから、パウロは此信者に十字架を負ふべき事を勧めたうまいました。さうですら續いて御覽なさい。「我意ふに神は我使徒を死に定められし者の如く末の者として顯し給へり、蓋われらは宇宙のもの即ち天の使及び人々に觀玩にせられたれば也、我儕はキリストの爲に愚なる者となり、爾曹はキリストに在て智者となれり、我儕は弱く爾曹は強し爾曹は貴く我儕は賤し」(九、十節)。此信者は世の人の目の前に、智者強い者又貴い者と表はれませんが、福音を汚すと思ひましたが、パウロは其様な事は決してないと申しました。私共基督信者たる者は、世の人の前に弱く又賤しい者であります。今に至る迄我儕は飢えた渴きた裸きた捷れ、斯て定れる住處なく、勞りて手づから工をなし言らるゝ時は祝し窘らるゝときは忍び、誦らるゝ時は勸をなせり、我儕今に至るまで世の汚穢また萬の物の塵埃の如し、我なんぢらを愧しめん爲に之を書くに非ず、反て我が愛する兒女の如く爾曹を誡めんとして也」(十一―十四節)。パウロは愛を以て此信者に勧めました。どうぞ其様に己を高くせず、どうぞ十字架を負ふて主に従ふやうにと、愛を以て勧めました。私共もどうぞ此勸を受入れたらういいます。今讀みました使徒行傳五章に於て、初代の弟子等の精神を知ります。彼等は大胆に迫害に反對してよい戦を戦ひました。大胆に人間の聲に従ひませず、唯神の御聲に従ひました。大胆に人の

心を悦ばせずして、唯神の聖旨に適ふやうに行ひました。人間の目の前に己を高くせず、又己を
 智き者とせず、却て神の御聲に従ひまして、十字架に釘られた主イエスを宣傳へました。其爲に、
 其證の爲に多の人々は救はれました。又祭司も多く信仰の道に従ひました(六〇七)。私共も其
 様に真心を以て神に従ひますれば、必ず結果が表はれます。又其許りてなく、心の中に此四十
 一節のやうな大なる喜びがあります。續いて四十二節の通りに「日々に殿および人の家に於て教を
 なし、イエス・キリストの福音を傳へて止めざりき」。以賽亞書四十章三十一節に「然はあれどエホ
 バを俟望むものは新なる力を見ん、また鷲のごとく翼をはりてのぼらん、走れどもつかれず歩めど
 も倦まざるべし」とありますやうに、日々に靜かに歩み、少しも倦む事はありません。

日々に

【四十二節】

「日々に」。使徒行傳に度々「日々に」といふ言を見ます。第一、二章四十六節に日々に集りまし
 た。第二、同じ二章四十七節に日々に悔改める者のあるのを見ました。然うてすから其教會に何
 時でも果を結ぶ喜がありました。放蕩息子が歸つて来たやうな喜がありました。第三に、此五章
 四十二節に日々に福音を傳へました。時を作りて是非罪人に福音を宣傳へなければならぬと思ふ

て、日々にかういふ集會を設けました。第四、六章一節に日々の施濟がありました、日々貧乏人に
 に施しました。第五、十六章五節に日々信者の數が増加へられました。ペンテコステの日に然う
 いふ事がありました、是はペンテコステの時から二十五年も後の事でありました。然れ共其時に
 も新しい信者が毎日出來まして、其數が増加へられました。又第六に、十七章十一節に日々に聖
 書を読む事が記してあります。此六の引照によりて、今の私共も毎日なすべき事を教へられま
 す。格別に教會が眞正に聖靈の生命を得ましたならば、其やうに日々に恩恵を求め、又其恩恵を
 頂戴します。

第十九 教會の組織及び發達

組織や方法に就て靈の導を求めよ

第六章

聖靈は先づ組織や設備を造つて、獻立をして其を進め給ひません。働が進むに従つて、必要に
 應じて如何に組織すべきかを示し給ひます。今でも是は大に大切であります。聖靈は定つた組織
 を與へ給ひません。或は罪人を救ふにも、定つた方法を與へ給ひません。私共は何時でも聖靈

日々に 組織や方法に就て靈の導を求めよ

に頼りて、其折々の導に従はねばなりません。神は或時は或方法を與へ、他の時には別の方法を與へ、其によりて勝利を與へ給ひます。私共も何時も同じ方法を用ひなければならぬ事はありません。聖靈に導かれて働かなければなりません。教會の組織に於ても其通りであります。六章より前には施濟に就て格別に定つた組織がありません。併し今其必要が生じたから、七人を選んで其働を命じました。

サタンの妨害

五章の終て教會が勝利を得て、外からの敵に向つた事を見ますが、今六章の始に教會の中に悪い事がありました。怨言や、相互の間に苦い考が出来ました。是は尙々恐ろしい事でありませぬ。然れ共聖靈は教會を導きて、其時にも全き勝利を與へ給ひました。今迄サタンは色々の工夫を以て其働を妨げんと企てた事を見ます。第一、四章に於て反對者がありました。名高い人々が反對しました。第二、五章一節から十一節迄の處に於て、サタンは眞似する事によりて神の働を妨げました。第三、五章十七節より四十二節迄の處に於て、迫害によりて妨げました。第四、此六章に於て教會内の分離によりて妨げます。第五、七章を見れば信者を殺す事に由りて妨げます。其やうにサタンは此五の方法を以て、是非救の働を妨げたらういたしました。今此六章に於ては、

格別に教會内に分離を起したういたしました。

【一節】

「當時弟子たちの數おほく加り」。其時に危い事が出来ました。數の少い時には危い事はなく、一致和合は易い事でありました。然れ共弟子の數が加りました時に、教會が分離しました。是は危い事でありました。「ギリシヤ方言のユダヤ人」。是は多分ギリシヤに居つた者であります。其時神を禮拜する爲にエルサレムに参りました者でせう。「其後等が日々の施濟に遺漏されしを以てヘブル方言のユダヤ人」、即ち平生ユダヤに居るユダヤ人に向つて、「怨言し事ありければ」。實に是は危い時でありました。然れ共十二人の使徒等が聖靈に滿されて、其を處分致しました。

最も大切なる奉仕

【二一四節】

使徒等は教會に其責任を負はせました。此働は使徒等の働でありませぬから、信者が其をせなければなりません。是は信者の働でありますから、信者等が自分の働を務めて、使徒等に其様な重荷を負はせぬやうに勧めました。是は聖靈の導であります。度々牧師や傳道師が自分の手にかういふ働を持つて居る事を願ひますが、其爲に自分の格別な働を妨げられます。又其爲に教

サタンの妨害 最も大切なる奉仕

會には損を生じます。教會が其様な働を致しますれば、其爲に教會は恵を得て罪人は救はれます。然れ共此使徒等は金を施す事よりもモット大切な働があります。「神なる父の前に潔して穢なく事ふることは、孤子と寡婦を其患難の中に眷顧、又自ら守りて世に汚されざる是なり」(雅各書一章廿七節)。然うてすから寡婦を顧み金を施す事は潔き宗教であります。然れ共使徒等は其より尙々大切なる職務がありました。其働は何であるかといへば、四節にあるやうに「常に祈ること、道を傳ふること」であります。靜かに自分の室で祈る事、聖書の聖言に就て祈る事、又公けに大膽に道を宣傳へる事であります。是は私共の格別な職務であります。傳道者は格別に此二つを學ばなければなりません。言を換へて曰へば、傳道者の學ぶべき事は此二つ即ち坐る事と立つ事とあります。此二の事を眞正に學びますれば、必ず成功ある傳道者となります。靜かに神の前に坐つて祈り、大膽に人間の前に立つて道を宣傳へますれば、必ず其爲に多の人が救はれるに相違ありません。

祈禱の大切な事

概略使徒行傳を見ますと、祈禱のいかに大切であるか解ります。一章十四節「心を合せて恒に祈禱を務めたり」。二章四十二節「常に……祈禱を務む」。三章一節「祈禱の時」。四章廿四節「心

を合せ神に對ひ聲を揚げて曰けるは」。六章四節「常に祈る事」。六章六節「使徒等祈りて」。七章五十九節「彼等石を以てステパンを撃る時彼祈りて曰けるは」。八章十五節「彼等が聖靈を受ん爲に祈れり」。九章十一節「彼は祈りて居り」。十章二節「恒に神に祈禱せり」。十章九節「ペテロ祈禱のため屋上に昇れり」。十二章五節「教會は之が爲に懇切神に祈る」。十二章十二節「多の人こゝに集りて祈りたり」。十四章廿三節「斷食と祈禱をなし」。十六章廿五節「夜半ごろパウロとシラス祈禱をなし」。二十章卅六節「跪き衆人と共に祈れり」。廿一章五節「共に岸に跪きて祈り」。どうぞ深く此引照を考へて御祈りなさい。是によりて祈禱の必要なる事、何時でも、何處でも祈らねばならぬ事を知ります。教會は其祈禱を献げました時に、其爲に恵まれました。神は祈禱に答へて何時でも新しい膏を注ぎ、新しい力を與へ給ひます。私共も其に従ひますれば、昔の教會のやうに日々に神の恵と神の榮光を見る事が出来ます。

神の働を務むべき人

【三節】

此三節を見ますれば、此働の爲にどういふ事が必要であるかに就て、三の個條があります。第一は「善證ある者」、即ち悔改めない人々の前にも、よき生涯を送つて居る正直なる者。第二は

祈禱の大切な事 神の働を務むべき人

『智慧の満ちたる者』即ち物事を辨へる常識のある人。第三は『聖靈に満ちたる者』であります。かういふ人々が會計の事を務めなければなりません。教會の働を務めるのは、神の働に親しい關係がありますから、其を務める者は聖靈に満ちて居なければなりません。教會の役員はかういふ人でなければなりません。然うてありませんならば却て教會の妨害になります。例へば或人は正直で物がよく解つて會計を務めます。其人が聖靈に満ちて居ませんが、神に祈る人でありませんが、度々其様な人を役員に選びます。然れ共私共は三節のやうな人を役員に選ばなければなりません。然うしますれば必ず神の祝福を受ける事が出来ます。

愛の勝利

【五—七節】

五節を見ますれば皆一致しました。『此言すべての人の心に合ひければ』とあります。即ち皆一つの心と一つの考を以て一致しました。是は實に聖靈の働の美はしい兆てあります。又其のみならず、其七人を選ぶ時に、どういふ人を選びましたかならば、矢張ギリシヤ方言のユダヤ人のみを選びました。是は實に美はしい事てあります。此選ばれました七人の名を見ますれば、皆ギリシヤ語の名前てありますから、必ず皆ギリシヤ方言のユダヤ人であつたに相違ありません。其中の

一人は猶太人てはありませぬ。即ち終の人は異邦人てありました。然れ共始めに先づ割禮を受けて猶太人となり、次に基督教に入つた人てした。然うてすから其時既に教會の中に異邦人の信者がありました。ギリシヤ方言のユダヤ人が怨言しました時に、教會全體が其人々の中より是等の人を選んで、會計を委ねました。是によりて其信者の寛容と、廣い心と、罪を赦す心とを知る事が出来ます。教會の中に苦い感情が起りました時、此信者等はどうして其を消しましたかならば愛を以て其怨言いた者を信用して、是に會計を委ねた事によりて、其を追出す事を得ました。怨言いた者は他の信者を信用する事は六かしい事てした。然れども他の信者は怨言いた者をよく信用する事が出来ました。是は實に愛の勝利てありました。其爲にサタンの企圖に勝つ事を得ました。其爲に此苦い考を全く潔めて、教會を助ける事を得ました。其爲に直ぐ美はしい結果が起りました。

七節『神の道いよく傳播て弟子等の數エルサレムに甚しく増り』。是は教會が潔められた結果てありました。教會より怨言を逐出し、一致和合する事を得ましたから、直ぐ力と愛を以て外の人に福音を宣傳へ、罪人を救ふ事が出来ました。又案外にも『祭司も多く信仰の道に従へり』。是は初ていあります。今迄祭司が悔改めた事がありませなんだが、今此時に祭司が多く悔改めました。是は教會が新しい力を得ましたから、今迄頑固な心を有つて居た人をも導く事が出来たので

あります。是は實に幸福であります。教會が深くありますならば、又愛を以て全く一致して居りますならば、必ず勝利を得て、頑固なる心を有つて居る人々は碎かれます。此祭司等は主イエスが十字架に釘られ給ひました時、神殿の帳が上より下迄裂かれた事を覺えて居ましたせう。其時の祭司は必ず其を感じたに相違ありません。其帳は實に厚いもので、厚さは三寸餘りもありましたから、其が裂かれた事は人間の力てなくして、唯神の御力であると解りましたせう。又上より裂かれましたから、格別に神の御手によりて裂かれた事が解ります。又今迄其帳の爲に至聖處に入る事が出来ず、又神の御榮光を見る事が出来ませんでした。只今祭司でも誰でも、其至聖處に入りて神の御榮光を見る事が出来ると解りました。主イエスの死の爲に靈の恵を得られると感じましたせう。今此時に種々の證據がありましたから、遂に大勢の祭司が道に従ひました。

三の聖靈の盈満

今迄の處に聖靈に滿される事に就て、三の事が記されてあります。第一、三節に「聖靈と智慧の滿たる者」とあります。聖靈に滿されました格別の結果は智慧、即ち靈的智慧に滿される事てあります。私共が聖靈を受けますならば、格別に靈に由れる智慧を得る筈であります。第二は五

第二十 ステパノの殉教

ステパノの變貌

節「信仰と聖靈の滿たるステパノ」。即ち聖靈に滿されて居りますれば、格別に信仰がある筈です。山を移す事が出来る信仰がある筈です。天より火を呼下す事が出来る信仰がある筈です。第三に八節「恵と能力に滿ちて」。聖靈に滿されて居ますならば、必ず恵があります。優しい心、主の聖意に適ふ心、柔和なる心、又謙れる心、愛の心があります。又必ず能力もあります。サタンの業を打碎く事の出来る力がある筈です。又病人を癒す力、鬼を逐出す力を有つて居る筈です。私共は在弱を感じ、不信仰を捨て、其を求めなければなりません。此三の引照によりて、聖靈に滿さるゝ事の結果を知る事を得ます。どうぞ私共は其を経験したいといふ事許りてなく、其經驗が能力ある結果となつて表はれる事實でなければなりません。

【八一十五節】

此處に二の訴がありあります。即ち一つはステパノは律法に反いた者と訴へ、も一つは彼は神殿を汚したと訴へました。然れ共ステパノは格別に其に就て答へません。七章に於てステパノは尙

尙大切な證をせなければなりませんから、自分の爲には言譯をさせません。然れ共話の中に、律法に従ふよりも律法の神の聖聲に聽従ふ事は大切である事を言ひました。又神殿を敬ふよりも神殿の神を敬つて、之に従ふ事が大切であると申しました。

彼等はステパノがモーセを汚したと言ひましたから、十五節を見ますと、神はモーセに與へ給ふた榮光を、ステパノの顔にも與へ給ひました。「是に於て集議所に坐せる者皆目を注て彼を見しに其面天使の面の如く也き」其周圍にある證人等は、虚偽を吐いて何かしてステパノを滅しく願ひました。然るに其様な時に、心に溢れる程の平安の爲に顔が輝きますれば、是は眞正の聖潔であります。眞正の勝利であります。他の人が私共に就て虚偽を申します時に、どうか其様に少しも怒らずして、却て天使の顔をして居りたうします。其時にステパノは神の御榮光を見上げて居りましたから、其榮光はステパノの顔に照されました。夜明に他の處は何處も皆暗い時にも、高い山の頂には最早太陽の光が照りますから、其處は輝いて居ります。其通りにステパノの周圍にある人々は皆暗黒の中に居りましたが、彼の顔は神の輝を得ました。私共も其様に斷えず面蔽なくして主の御榮を見る筈です。然ら致しますれば、周圍にある人々の怒に目をつけず、却て心の中に平安と喜樂を有つ事が出来す。詩篇卅一篇十三節より十六節迄を御覽なほ。『そは我おほくの人の讒をき、到るところに懼あり、かれら我にさからひて互にはかりしが、わが生

命をさへとらんと企てたり。されどエホバよわれ汝に倚頼めり、また汝はわが神なりといへり、わが時はすべてなんぢの手にあり、願はくはわれを仇の手より助け、われに追迫るものより助けいだしたまへ。なんぢの僕のうちへに聖顔をかゝりやかせ、なんぢの仁慈を以て我を救ひたまへ。』是はステパノの祈でしたらう。ステパノは必ずかういふ心を有つて居りましたせう。神は必ず豊かに其祈禱に答へ給ひまして、彼に變貌を與へ給ひました。昔モーセが四十日間山に於て祈禱を獻げ、神と交りされた時、變貌の榮光を得ました。長い間祈つて神を求めましたから、神は其を與へ給ひました。ステパノは敵の中に苦んで居る時に、格別に靜かに祈る事が出来ぬ時に、變貌の榮光を得ました。詩篇卅三篇五節「なんぢ我仇のまへに我がために筵を設け、わが首に膏を注ぎたまふ、わが酒杯はあふるゝなり。』今ステパノは其敵の前て其様な恩恵を得ました。又其やうに神の榮を得ましたから、必ず其顔は美しくなりました。神たる美はしさ、天に屬ける美はしさがありましたから、皆目をとめて彼を見ました。見ずに居る事が出来ない程、神の榮光が輝きました。多分パウロは後に碎けたる心を以て、其を話したらうと思ひます。

聖靈に滿されたる教會の七の結果

此第六章に於て、聖靈に滿された七の果を見ます。第一、三節、即ち世に屬ける職業を務める事

聖靈に滿されたる教會の七の結果

が出来ます。第二、七節に於て罪人が救はれます。第三、八節に於て不思議なる行爲をなす事が出来ず。第四、十節に於て力を以て證する事が出来ず。第五、十二節に迫害せられます。第六、十五節に於て顔が輝きます。第七、七章の終りにペンテコステの死があります。今迄使徒行傳に於て、ペンテコステの力を以て潔き生涯を暮す事、或は道を擴める事、或は敵に對する事等に就て學びましたが、今此處で始めてペンテコステの死に就て讀みます。私共は生涯を暮す爲にペンテコステの聖靈を求めなければなりません。其と同時に、死ぬる時にもペンテコステの力を求めなければなりません。ペンテコステの能力を以て生涯を暮しますれば、是は神の爲の明かなる證であります。又ペンテコステの能力を以て死にますれば、是も亦大なる證となります。

ステパノの説教

第七章

『さて祭司の長曰けるは此事此の如くなる乎、ステパノ曰けるは』。是はステパノに備へられた機でありました。今迄ステパノはエルサレムの諸方を廻つて、主イエス・キリストを證いたしました。又主イエスは共に働かれました。今茲で神はステパノの證をさかしめんが爲に、大傳道會を開き給ひました。祭司の長及び長老等を悉く集めて、其前に證人ステパノを立たせ給ひました。

而してステパノが未だ一言も話させぬ中に、神は其御榮光を表はし給ひました。是は實に嚴肅なる集會でありました。此人々の頑固なる心は其爲に溶けないでせうか。また碎かれないでせうか。斯ういふ時にステパノは自分の爲に申譯する事が出来ません。斯ういふ大切な機に神の言を宣傳へて、どうかして此長老等を悔改に導かねばならぬと思ひました。

其爲にステパノは何と云ましたかならば、第一に、今迄千五百年の間、神は如何してイスラエルの民を取扱ひ給ふたかを話しました。神は何時でも其民を恵み、其民を愛し、何時でも思廻し給ふて、其民を新しき祝福に導き給ひたういしました。又其爲にいろ／＼の導者を其民に與へ給ひました。第二に、ステパノは其イスラエル人民は如何して神を取扱つたかと話しました。彼等は神に反對し、神の聖聲に従はず、神の與へ給ふた導者に逆さまして、此時迄頑固にして唯自分の道許りを踏みました。其爲に神の恵を斷りまして、色々の禍害と困難に遇ひました。

ステパノは神の榮光を見乍ら、又其榮光を受けて、話の初に榮光の神が表はれ給ふた事に就て語りました(二節の終)。五十五節を見ますれば、此説教の終つた時にも、神の榮光に就て記してあります。ステパノは顔に其榮光を得まして、榮光の神に就て正しく證し致しましたから、面蔽なくして神の榮光を見上げる事を得ました。

榮光の神がアブラハムに表れ給ひました(二節)。何故イスラエル人が敬つてゐたアブラハムが、

神の祝福を得ましたかならば、榮光の神に従ひ、其光を得て神を信じた、其爲でありました。其時には律法もなく、又神殿もありませなんだ。然れ共其様なものよりも尙々大切なるものがありました。即ち榮光の神が表れ給ひました。ステパノが此事を申しました時、必ず主イエスの中にモ一度榮光の神が表れ給ふた事を言つたと思ひます。又此時代のイスラエル人が、アブラハムが得ました恩恵を得たういいますならば、主イエス・キリストによりて表はれ給ひました榮光の神を信じ、其聖聲を聞き、アブラハムのやうに一切を捨て、其に従はねばならぬ事をも申しましたてせう。

ステパノは格別に此三人に就て話しました。即ち第一はアブラハム、第二はヨセフ、第三はモーセです。九節、十節に於てヨセフは神の選び給ふた僕、又働人である事を申しました。神は其十一人の兄弟等及び一家族を、ヨセフの手を以て救ふ事を計畫し給ひました。然れ共兄弟等はヨセフを拒み、却て彼を迫害し、力を盡して彼を滅さんと致しました。然れ共神は逐出されたヨセフを恵み、榮光を與へ給ひました。又遂に其十一人の兄弟等はヨセフの前に跪いて、恵を願ふやうになりまして、逐出されたヨセフは其人々を救ひました。ステパノは其を言ひました時に、必ず其を聞きました人は、主イエスを例へた者であると解りましたてせう。ステパノの考は、主イエスはイスラエル人の爲に新しいヨセフであるといふ事でありました。

第三に二十節を見ますと、モーセは神に立られた救主でありました。卅五節に「救者」とあります。彼は廿一、廿二節にあるやうに、大なる榮光を有つて居る者でありました。然れ共廿三節に於て、其愛する兄弟等を憐みて、其榮光を後ろに捨て、イスラエル人を顧みしました。卅八節を見ますと、彼は「生る道」を以て参りました。又此道といふ字は、原語で宣言又は詔勅(Oracles)といふ字でありまして、普通の言といふのと違ひます。然れ共廿七節を見れば民はモーセを「拒却」しました。又卅五節にあるやうにモーセを「拒み」しました。卅九節には此モーセに「順ふ事を欲せず反て之を卻け」ました。今迄神は大なる恵を以てイスラエル人を顧み給ひました。然れ共神が遣はし給ふた使者を自分から斯様に拒みましたから、四十二節を見ますと「是に於て神は彼等を顧みずして其天の軍勢を祭るに任せ給へり」。是は恐ろしい事でありました。

四十七節を見ますと、ソロモンは神の爲に殿を建てました。神はモ一度恵を以て、恵を受ける方法を與へ給ひました。然れ共ステパノの意味は何てありましたかならば、神殿は左程大切ではありません。神の御聲に従ふ事が大切であるといふ事です。ソロモンは自分の建てた殿に満足しましたかならば、彼は四十八節のやうな事を申しました。「然れども至上神は手にて造れる所に居給はず」。是はソロモンの意見であつた許りてなく、神が立て給ふた預言者の預言でありました。「即ち主いひ給はく天は我座位なり、地は我足凳なり、爾等我ために如何なる屋を建てんと爲るか

又わが息む所は何處なるや、我が手は此凡ての物を造らざりし乎(四十九、五十節)。是はイザヤの預言であります。ステパノの意味は、此民のやうに此神殿を敬ふのは却て神の尊い御名を汚す事、又此神殿を敬つて神の與へ給ひました導者と預言者を拒む事は、何よりヒドイ罪であるといふ事でありました。

頑固なる心

ステパノは斯様に聖靈の力を以て、聖靈の剣を使ひました。其最後に此人々の心を刺す爲に、此ヒドイ力ある言を用ひました。「強頑にして心と耳に割禮を受けざる者よ、爾曹常に聖靈に逆ひ其先祖等の如く爾曹も行す也(五十一節)。是は彼が此尊い宗教議會の前に於て、此長老等に向つていつた言であります。ステパノは神の榮光を見ましたから、此人口の位を顧みず、是非神の言を述て其人々を悔、改に導きたらういしました。今迄猶太人は異邦人を心の頑固なる者、又耳に割禮を受けない者だと度々申しました。然れ共ステパノは今彼等に向つて、猶太人の有司たる汝等も異邦人の如き者であると申しました。汝等は神のイスラエル人ではない、其心は唯神を信じない異邦人に過ぎないと申しました。五十二節を見れば「義者」といふ字があります。神は此時代に恩恵を以て新しき導者を與へ給ひました。即ちイスラエル人を幸福に導く爲に、イスラエル人

に御自分の律法を與ふる爲に義しき主イエスを遣はし給ひました。然るに汝等の先祖等が他の導者を殺したと同じやうに、今汝等は此神の義者を殺し、又其許りてなく、私を律法に従はざる者だと訴へるけれ共、汝等は天使によりて律法を受け、尙之を守らないのであると申しました(五十二、五十三節)。

ステパノは聖靈の大なる力を以て、其様な事を申しました。主イエスは必ず其時に馬太十章廿節の約束を成就し給ふたてせう。此人々は心が刺れて悔改める筈でしたが、哥林多後書四章四節のやうに、サタンは其心を暗ました。「是神の像なるキリストの榮の福音の光をして彼等を照さしめんが爲なり」。此爲にサタンが働き、此人々はサタンの感化を受けました。ステパノの話は眞正の事で、彼等は之に答へる事が出来ませなんだが、心の中にサタンの怒を得て福音に反対し、其議會は地獄のやうでありました。

ペンテコステ的の死

【五十四節】

「衆人此等の言を聞て大に憤り切齒しつゝ」。是は地獄の有様であります。彼等は其様に怒つて、ステパノに向ひました。然れ共ステパノは其嵐、其サタンの憤を少しも見ません。是は幸

頑固なる心 ペンテコステ的の死

【五十五、五十六節】

ステパノは天が開かれて榮光を見ました。此周圍には地獄が開かれて、地獄よりの靈が働いて反對致しましたが、彼は唯神の榮光を見上げました。又此人々の前に、主イエス・キリストに就て終の明かなる證を致しました。是より明かなる證は出来ません。神は終迄此有司等を憐れんで、最後にモ一度明かな證を與へ給ひました。「見よ我天ひらけて神の右に人の子の立てるを見る」(五十六節)。此罪人等は其を聞く筈でした。然れ共心が頑固で、地獄の口より出る叫のやうに、大に呼ばりました。

【五十七—六十節】

サタンの靈によつて、此尊い有司等は狂人のやうになりました。少しも神の使者の聲を聞かぬ爲に「耳を掩ひ」、皆心を合せて、ステパノの所に驅よりて、彼を撃ちました。「彼を邑より逐出し石をもて之をうつ」(五十八節)。此死はヒドイ痛の苦の死でありました。然れ共體が苦んで居る時にさへも、ステパノは全き平和を以て神の異象を見る事を得ました。主イエスと主の御榮光を見て、主の形に象らせられて、其一番苦痛と困難の時にさへも、キリストの靈を以て、キリストが死にかけて居給ふ時の此祈禱を獻げました。「我靈魂を納けたまへ」「主よ此罪を彼等に負はし

ひる勿れ(五十九、六十節)。

「此言をいひ畢りて寢につく」(六十節)。死を嘗めませなんだ。最早神の御榮光が開かれて、死の苦を感じずに、直に天國に移りました。神はモ一度此イエスラエル人に、明かな證を與へ給ひました。彼等は之を斷りました。而してモ一度彼等は神の使者を殺しました。彼等は以前に主イエスの證を消す爲に、主イエスを殺しましたが、神は尙々忍耐を以て、又種々の工夫を以て、此イエスラエル人に恩恵を表はし給ひました。今此ステパノの證は其終の證でした。然れ共彼等は是を拒みましたから、此章の四十二節のやうに、神は彼等を捨て給ひました。是より後に神はイエスラエル人全體に證を與へ給ひません。却て段々滅亡と神の怒が彼等に近づきました。

此聖靈に滿された青年が死にました。是は大死でありました。是は犬死でありました。否、決して然うてはありませぬ。此章の終の言を見ますと、「サウロ彼の殺されしを好とせり」とありますが、必ずサウロは其日に見聞せし事の爲に、後て悔改めましたと思ひます。ステパノが天の榮を見て、其榮の中に主イエスを見上げる事を得ましたやうに、後てサウロも榮光の主イエスを見上げる事を得ました。此一粒の麥は地に落ちました。其爲にパウロが生えて參りました。ステパノの死の爲に、パウロの働が始まつたのであります。今ても其やうに、損と思はれる死でありまして、神が恵み給ひますならば、其麥の粒より百倍の收穫が得られます。

第廿一 サマリアのリバイバル

福音傳道の苗代

第八章

【一節】

「此日エルサレムに在る所の教會を大に窘迫こと起り」。此日、即ちステパノが大膽に主イエスを證しました日、其日に他の信者等が大なる迫害を受けました。然うてすから始にステパノの大膽の爲に、幾分か傳道が妨げられた様に見えました。又肉に屬ける信者等が、ステパノが大膽に證した事を残念な事をしたと思つたかも知れません。然れ共外部から見れば、傳道の妨害であるやうてありましても、其爲に後に福音が廣められ、又其爲に神の榮光が表はれました。出埃及記五章十七節を見ますれば、モーセが始めてイスラエル人を救はんとしました時に、却てイスラエル人が其爲にヒドイ目に遇ひました。モーセの働の爲に、平安と自由を得ずして、却てヒドイ苦痛と束縛を得ました(出埃及記五章十七節より廿一節迄)。其爲にモーセが救はうとしたイスラエル人が、却てモーセを攻撃しました。此時エルサレムの信者等に其様な心はありません。然れ共主を證しますれば、或は始の結果は迫害と傳道の妨害であるかも知れません。

「使徒等の外は皆ユダヤとサマリアの地に散されたり」。是は神の恵と神の導てありました。神は此信者等を諸方に福音を宣傳へる爲に遣したうまいました。然うてすから神は此迫害によりて、信者等を散し給ひました。又散された者等は、四節にあるやうに「徧く往きて福音を宣傳」へました。丁度苗代を作るやうなものでありまして、始に稲の苗を小さい處で作つて、其が出来てから其を別けて、廣い處に植付けけるやうなものであります。然うしますれば僅かな苗でも、廣い處に出て豊かな收穫を結ぶ事が出来ます。神も其やうに始にエルサレムの狭い處に信者を作り給ひました。其儘其處に皆が居りますれば餘り神の國が擴がりませんから、迫害によりて、攝理の中に彼等を廣い處に押出し其處で多くの收穫を結ばしめ給ひます。今ても神は其やうに働き給ひます。私共は神の導に従ひますれば、散されても其によりて廣く傳道する筈です。此散されし信者等はユダヤにもサマリアにも参りました。丁度一章八節の順序に段々從つて居ります。八章の終の方にエテオピア人が救はれますから、福音が段々地の極に迄参ります。

巢籬の教育

「使徒等の外は」。然うてすから使徒等はエルサレムに止りました。其處は危い處であります。迫害の時てすからどんな事が起るか解りません。然れ共使徒等は大膽に其處に止りました。

又他の點から見ますれば、是は傳道の爲によい事でありました。散された基督信者は、今から最早使徒等に依り頼む事が出来ません。他の處に散されて、是から唯神のみに頼らなければなりません。今迄エルサレムに於て使徒等より教を受け、自然に使徒等に依り頼みましたが、是は神の旨に適はない事でありました。然うてすから神は段々信者等を導いて、神の旨に適ふ者となさんとて、彼等を寂しい處に導き給ひました。申命記卅二章十一節、十二節を御覽なさい。「鷓鴣の其巢雛を喚起し其子の上に翱翔る如く、エホバその羽を展べて彼らを載せ其翼をもて之を負ひたまへり、エホバは只獨にてかれを導きたまへり」。今迄此信者等は安らかに巢の中に生涯を暮らしたが、今神は此巢雛に飛ぶ事を教へんとし給ひますから、巢を毀して寂しい處に導き給ひます。其によりて巢雛は力を得て、信仰に就て教へられます。是は大に大切な事であります。或信者は何時迄も雛のやうに巢の中に止ります。然うてすから信仰の生涯即ち飛ぶ事を學びません。神は此エルサレムの信者等に迫害によりて飛ぶ事を教へ給ひました。

悪魔の傳道者としてのサウロの播種

【二節】

「敬虔ある人々」。是は基督信者ではありませんが、神を敬ふ人々です。然ういふ人々はステパ

ノに同情して「ステパノを葬り」ました。是は粗末な葬式ではありません。懇懃な葬式を致しました。「之が爲に大なる哭泣をなせり」とあります。

【三節】

併しサウロは其時どう致しましたか。彼はステパノによりて明かな光を認めました。ステパノから靈の光によりて照された舊約全書の講義を聞き、又ステパノの顔に神の榮光を認めました。然うてすから彼は悔改めました。否、尙心を頑固にして迫害しました。「サウロは教會を殘害して此處彼處の家にいり男女を曳出して之を獄に付せり」。廿章の廿節を見ますと、後にも此人は家々に入りましたが、其時は人々を救はんが爲でありました(廿〇廿及卅一參照)。然れ共今此八章の始に於ては、熱心なる悪魔の傳道者として家々に入り、訪問傳道をしました。後には主イエスの爲に熱心に訪問しましたが、今此時には悪魔の爲に訪問しました。サウロは今播きました種に従つて、後に收穫れました。哥林多後書十一章廿三節を御覽なさい。「……鞭たれしと彼等より夥しく」。サウロは基督信者を鞭ちましたから、後に自分も鞭たれました。「獄に入れらるゝと多く」。サウロは基督信者を獄に入れましたから、後に自分も獄に入れられました。「死に遇ふこと屢なり」。サウロは又基督信者を死に導きましたから、後に自分が死に遇はねばなりません。又其廿五節には「石にて撃れ」とありますが、彼は前にステパノを石で撃殺す事に賛成

しましたから、今自分が石にて撃たれました。其やうに播いた種に従つて收穫れました。

福音の擴張と其力

【四節】

此第八章は格別に其事の語てあります。又其時に何を宣傳へましたか、何卒其に就て五の引照を御覽なさい。(一)四節に「福音を」宣傳へました(英語譯には「神の言を」とあります)。(二)五節の終りに「キリストの事」を示しました。(三)十二節に「神の國及びイエス・キリストの名につきて」宣傳へる事があります。(四)廿五節に「主の道」を證したとあります。又其節の終にも「福音を」傳へたとあります。(五)卅五節の終りに「イエスの福音」を宣傳へました。私共は其やうに、喜の音信をも、神の與へ給ふキリストの事をも、又神の國の事をも、又キリストの言、キリストの招きをも、即ち主イエスに屬ける福音を宣傳へなければなりません。

【五節】

是は大膽の事てあります。今迄此弟子等は唯ユダヤに福音を宣傳へました。又猶太人はサマリア人に就てどう考へて居ましたかならば、サマリア人は神に捨てられた者てすから、必ず神の恵を得られないと思ひました。然れ共ピリポは神の愛に感じ、又福音の靈を得て、此捨てられし者にも福

音を宣傳へたらうと思ひました。是は信仰の働であります。段々神はサマリアにも福音を宣傳へさせ給ひます。又此章の終りに於て、地の極に至る迄福音を宣傳へさせ給ひました。斯様に神の計畫は段々廣くなりました。又神の旨を知れる人々は、聖旨に従つて大膽に廣く傳道いたしました。又使徒行傳を見ますれば、神は唯其様な傳道の記事許りを記さしめ給ひました事が解ります。平生の安らかなる傳道を書かせ給はず、新しい處に進撃して行つて傳道する、侵略的傳道だけを書かせ給ひました。神は其様な働を喜び、格別に其様な働を私共の手本となし給ひます。神は第一にサマリアに、次にエテオピア人に福音を宣傳へさせ給ひました。弟子等が始めにサマリア人に傳道した事は、地の極に迄傳道する爲の飛石てありました。エテオピア人に傳道する等の事は、餘り突飛の話てありますから、神は先づサマリア人に傳道を試みさせて、其によりてエテオピア人に傳道せしめ給ひました。即ちサマリア傳道は異邦人傳道の爲の一の踏石てありました。神は斯様に私共傳道の大膽を勵まし給ひたらうと思ひます。又六つかしい傳道を爲さしめ給ひる爲に勵まし給ひます。又近い處の傳道を踏石として、六つかしい、遠い處の傳道をなさしめ給ひます。エルサレムの傳道も、サマリアの傳道も、六つかしい働であつたに相違ありません。サマリア人は今迄六百年の間彼處に居りましたが、ユダヤ人は彼等を導きませんでした。自分の受けし恵を分與ふる事を致しませんでした。併し今基督信者が福音をサマリアに入れました、彼等に

よりて神はサマリヤ人にも其喜を分與へしめ給ひます。

【六一八節】

神はピリポの大膽に報いて、サマリヤに大リバイバルを起し給ひました。六節を見ますと、其地の人々は耳を傾けて福音を受入れました。其結果は七節にあるやうに、鬼に憑れたる人々も救はれ、又永い間苦める病人も癒され、又第三に八節にあるやうに大なる喜悅がありました。福音の爲に其やうに神は悪魔の工を毀ち、悪魔の手より罪人を救出し、又其人々に大なる喜悅を與へ給ひました。喜悅は福音が必ず結ぶ大なる結果であります。

悪魔の陣營に進撃す

【九一十三節】

外部から見ますれば、其時にサマリヤに福音を宣傳へるのは適當でないと思はれました。九節を見ますと、魔術が盛んに行はれて居りまして、シモンといふ人は大に悪魔の爲に力を盡し、又其人によりて不思議な事が多く起つて居りました。其様な時に其處に行つて福音を傳へる事は、餘りよくない様に思はれたかも知れません。エルサレム教會の傳道委員は、或は其を決議したかも知れませんが、然れ共神は一人の傳道者を導いて、進撃的傳道に遣はし給ひました。ピリポは其

時に、其六つかしい時に、其悪魔が盛んに活動して居る時に、サマリヤに行つて福音を宣傳へました。是は丁度撒母耳前書十四章一節より十四節迄の、大膽な勳と同じ事でありました。『其時サウルの子ヨナタン武器を執る若者にいひけるは、いざ對面にあるペリシテ人の先陣に涉往かんと、然ど其父には告げざりき』(一節)。父に相談しましたならば、或は妨げられたかも知れません。然れ共ヨナタンはピリポと同じ心を以て、是非此ペリシテ人の先陣を取らねばならぬと思ひました。然うてすから十三節を見ますれば、『ヨナタン攀のぼり』、即ち祈禱の儘に登りました。『ペリシテ人ヨナタンのまへに仆る、武器をとる者も後に從ひて之を殺す』。神は此時に共に働き給ひました。十五節に『而して野にある陣のものおよび凡ての民の中に戦慄おこり、先陣の人および劫掠人もまたをのゝき地ふるひ動けり、是は神よりの戦慄なりき』。然うてすから神が大勝利を與へ給ひたのであります。是は丁度使徒行傳八章と同じ話でありました。ピリポは此處で一人てペリシテ人の先陣を攻めに參りました。又神は彼處にある人々の心を動かし給ひました。

遂に十三節に於て、シモンも悔改めました。『シモンも亦信じてバプテスマをうけ、常にピリポと偕に在て彼が行ふ所の奇なる跡と休徴を見て駭けり』。此人は眞正に更生つたと思ひます。眞心を以て悔改めたに相違ありません。又福音を受納れました。是は福音の大勝利でありました。後に此人は失敗しましたけれ共、此時には眞心から主イエスキリストを信じたと思ひます。

天より火を下す使者

【十四—十七節】

十四節を見ますと、エルサレムに居る弟子等が此働に同情を表はし、ピリポの働を助けたらうと思いましたが、二人を彼處に遣はしました。是は使徒等の大膽なる信仰と、眞の愛を表はした事でありました。一體團體が出来て居る場合に、其團體を代表する委員として大膽なる行動を取る事は、一個人として行動を取る事よりも困難であります。此二人はエルサレム教會を代表する委員として、大膽な行動を取りました。私共も臆病を捨て、神の聖聲を聞いて、大膽に進まなければなりません。

此使徒等は此働に同情を表し、又格別に新しく出来た信者に聖靈を得させたらうと思つた。此サマリアの信者は眞正に救はれました者、明かに更生つた者でありました。然れ共ペンテコステの聖靈を受けませんならば、墮落するかも知れません。然うてすから一番大切な事は、ペンテコステの聖靈を受しむる事でありました。二人は其爲に遣はされて参つたのであります。路加傳九章五十四節を見ますと、ヤコブとヨハネはサマリア人の上に、天より火を呼下したらうと思つた。今ペテロとヨハネは其サマリアに下りまして、天より聖靈の火を呼下しました。又靈はエルサレム

の信者等に下り給ひました如く、今喜んで此サマリア人にも下り給ひました。多分使徒等は其を見て驚きました。聖靈が丁度ペンテコステの通りに、サマリア人の上にも下つた事を見ました。又今祈禱が急に答へられました。初のペンテコステの日には、十日の間聖靈を俟望まねばなりませんでしたが、今は聖靈は急に祈禱に答へ給ふて、急にサマリア人に下り給ひました。

聖靈を求めても得ざる者

【十八—廿四節】

十八節に於てシモンは、信者が聖靈を與へられた事を見ました。聖靈が下り給ひました爲に、其信者等は大に變りました。多分其顔も變り、又多分其祈禱も變つて能力ある祈禱となり、又多分心から神に感謝しましたらうから、シモンは明かに其急な變化を見まして、自分も他の人々に聖靈を與へる力を熱心に願ひました。シモンは自分の爲に聖靈のバプテスマを願ひません。自分の爲に潔き心、又神と親しく交る事を願ひません。然れ共他の人々に恵を分與ふる力を願ひました。是はシモンの大なる罪でありました。私共は最早聖靈のバプテスマを得て潔められましたならば、他の人々に其を分與ふる力を求むる事は自然の事で、是は神の聖旨に適ふ事でありました。然れ共未だ自分は潔められぬ儘で、他の人に聖潔を與へ又恵を與へる力を求むる事は、大なる罪であり

ます。是はパリサイ人の心であります。馬太傳廿三章三節を御覽なさい。「蓋かれらは言ふのみにして行はざれば也」。是は偽善者であります。私共は自分が神の聖潔を得ずして、他の人々に其を宣傳へますれば、又他の人々に其を分與へたらういふ事ならば、私共も咀はれしパリサイ人のやうな者であります。是はシモンの罪でありました。

シモンの祈禱はよい祈禱でありました。「此權を我にも與へよ」。是は立派な祈禱です。潔き者の祈るべき祈禱であります。然れ共其力を求むる方法によりて、自分の汚れた心を示しました。シモンが此惠を求めました其仕方を見ますれば、明かに彼の心がドレ文け汚れて居るかを表はして居ります。ペテロは其仕方によりて、彼の心を知りました。もし其立派な祈禱によりてシモンを判断しましたならば、大に誤つたてせうけれ共、其仕方によりて明かに其心を知りましたから、廿二節に悔改めよと命じました。此處に大に學ぶべき事があります。どうぞ皆様、此話によりて自分の心を御悟りなさい。私共は明かに神の救を経験したものでありまして、又幾分か神の靈の働を見物した者でありまして、又聖靈を求むる爲に立派な祈禱を献げる者でありまして、心の中に「膽の苦にをり不義の繋に在る」かも知れません。然うてすから格別に聖靈の力を求めますれば、どうぞ深く自分の心を御探りなさい。而して第一に赤心を以て悔改めて、先づ自分の爲に神の聖潔を御求めなさい。第一に自分の爲に聖潔を求めますれば、第二に聖靈の力を求める事は

正しい事でありませぬ。

【廿五節】

使徒等は今サマリヤ人に道を宣傳へます。是は面白ういふ事です。ピリポが始めにサマリヤ人に福音を傳へましたから、今使徒等がピリポの手に倣ひ、エルサレムに歸る途中サマリヤの諸邑に福音を傳へました。輕蔑せられし人々の間にも福音を宣傳へました。此使徒等は今眞の傳道者となりました。人種を區別せず、唯靈魂を愛して傳道する者となりました。使徒の位よりも傳道者の位は高ういふ事です。罪人を救ふ事は何よりも貴い事業であります。神は私共も斯様に大膽に侵略的の傳道に出る事を願ひ給ひます。オ、どうぞ神の召を蒙り、又其爲に靈を求めて、聖靈の大膽を以て輕蔑せられし人々にも、喜の音信を宣傳へたらういふ事です。

第廿二 神の計畫の擴張

悔改の三の例

此章廿六節より後に悔改の三の例が記されてあります。其を調べる事は、私共は大に利益があります。神はどうして罪人を導き、どうして罪人を照し、どうして罪人を更生らせ給ふかを學

ふ事は、大切な事であるに相違ありません。格別に傳道の職を務める私共は、此三の例を注意して調べなければなりません。八章にエテオピア人の悔改があります。九章にサウロの悔改があります。十章にはコルネリオの悔改があります。是は即ちアフリカ人と、猶太人と、羅馬人の悔改の話であります。又此三人は案外な道によりて悔改めました。此人々は皆自然には救はれる望のない者でありましたが、神は是等の人々を救ひ、此人々を悔改の例となし給ひました。サウロの悔改は格別に悔改の型であります。提摩太前書一章十六節を御覽なさい。「然れ共我が矜恤を受しはキリスト・イエス首先に我に寛容を悉く顯はし、後彼を信じて永生を受る者の我を模楷となし給へる也」。即ちサウロの悔改は、後の人の悔改の型であります。其悔改の話の中には、悔改に關する肝要なる點が明かに記されてありますから、格別に其を読み、又其を調べなければなりません。然れ共其許りてなく、尙二の例が記してありますから、其をも讀みたくらうみます。

第一はエテオピア人の悔改です。神は尙々廣く傳道をさせ給ひたくらうみます。此八章の初に於てサマリヤに迄福音を宣傳へさせ、今八章の終にアフリカの中央に至る迄福音を宣傳へさせ給ひました。

舊約全書にもエテオピア人の話が記されてあります。又其も矢張エテオピアの寺人でありまし

た。(耶利米亞記卅八章七、八節參照)。此奴隸たる寺人が、大膽にエレミヤの事を王に申しました。此奴隸がエレミヤに同情を表し、是非エレミヤを穴より救出したうらうらうしました。此エテオピア人は眞正にエホバに依頼みたる者でありました。耶利米亞記卅九章十八節を見れば、神は其人に聖言を遣はし給ひました。然うてすから此舊約のエテオピア人も信者でありました。又神を信じて居りましたから、神の僕を助けたくらうりました。

成功ある傳道者の警戒すべき事

【廿六節】

神は今ピリポをリバイバルの所より寂しい處に導き給ひました。リバイバルが起りますなれば、私共は其處に行つて助けるのは自然の事であります。然れ共或時には神はリバイバルの處より、一人の魂を救はしめんが爲に、寂しい處に私共を導き給ふ事があります。神はピリポを以て、此リバイバルを起し給ひました。然れ共唯今ピリポを他の處に導き給ひます。然うてすからピリポは其リバイバルの爲に大切であります。若しピリポが此時に神の聖聲を聞かずして、續いて其リバイバルの中に働きましたならば、續いてサマリヤに留りましたならば、或はリバイバルの妨害となつたかも知れません。度々其様な事があります。神が或兄弟を用ひて、リバイバルを起

成功ある傳道者の警戒すべき事

し給ひました後に、其兄弟を他の處に導き給ひますのに、其導に從はずに續いて其處に留りますから、自分が却てリバイバルの妨害となる事があります。神が其兄弟の働を祝福し給ひます時に、自分は其働に必要であるといふ考が、度々起りますから、却て其爲に働が妨げられます。

五年前印度にリバイバルの起りました時、十二歳位の一人の少女が用ひられました。其少女によりて九百人位の人が、キリストに導かれたさうであります。其がどんな風であつたかと申しますと、其少女が多くの魂に就て重荷を覺えました、どうかして主に導きたいと祈つて居りました。其女は其人々を導く爲に、神が誰か傳道者を送り給ふやうに願つて居りましたが、或時神は其女に近づき、我は其人々を導く爲に人を用ふる必要がない、もし人を用ふるならば其人が高ぶるから、用ひぬ方が却てよい。若し御前が行つて語るならば、我は御前を助ける、といふ事を語り給ひましたから、其女は主に頼りて行き、單純に神の言を語りましたが、其爲に多の人々が信仰したといふ事です。

傳道の成功がありましたならば、格別に其時は傳道者に取つて危い時であります。パウロでも其爲に高慢に陥る恐がありましたから、神は彼に刺を與へ給ひました。神がピリポを曠野に導き給ひましたのも此理由であります。

ピリポは曠野に行つて、一人の人を導く事を得ました。然れ共其結果は唯一人丈けてはありません。其一人に由つて、アフリカの一國に福音が傳はりました。此エテオピア人がアフリカに歸りまして、其處で福音を宣傳へましたから、其時からしてエテオピアが基督教國となりました。ピリポは此時曠野に下りましたから、或は心の中に幾分か失望があつたかも知れませんが、靈の導に服従しました結果、サマリアのリバイバルよりも大なる働が出来ました。又多分サマリアに居る人々も、續いて熱心に傳道しましたせう。眞の傳道者は人々を自分に依頼せず、却て其人々に獨立の信仰を與へます。肉に屬ける傳道者は、悔改めさせた者を自分に依頼させます。然れ共聖靈に満たされた者は、其信者に獨立の信仰を教へます。然うてすから傳道者が他の處に行きまして、其信者は神と交り、恵の中に生涯を暮らす事を得ます。

エテオピア人なる熱心なる求道者

【廿七、廿八節】

此エテオピア人は多分、神を拜む爲にエルサレムに参りました者です。シバの女王のやうに、神の事を聞き、神を拜む爲に態々遠方から参りました。併し今或は失望して歸る處であつたかも知れませんが、エルサレムに於て兼てから求めて居つた恵を得られませんでした。又其光をも得ませんでした。

エテオピア人なる熱心なる求道者